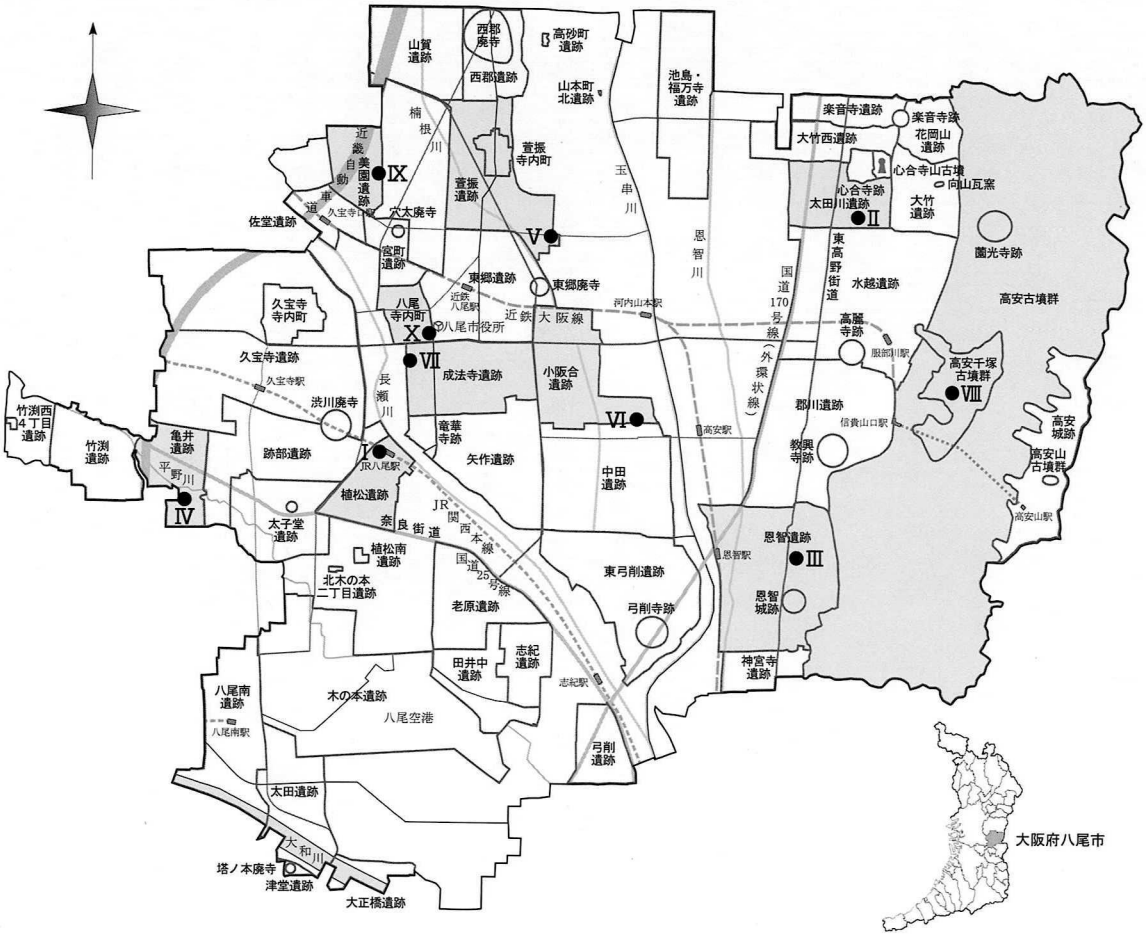
Ⅰ　植松遺跡（第13次調査）
Ⅱ　太田川遺跡（第３次調査）
Ⅲ　恩智遺跡（第25次調査）
Ⅳ　亀井遺跡（第17次調査）
Ⅴ　萱振遺跡（第30次調査）
Ⅵ　小阪合遺跡（第45・46次調査）
Ⅶ　成法寺遺跡（第26次調査）
Ⅷ　高安古墳群（第７次調査）
Ⅸ　美園遺跡（第９次調査）
Ⅹ　八尾寺内町（第６次調査）

２０１４年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

Ⅰ　植松遺跡（第13次調査）
Ⅱ　太田川遺跡（第３次調査）
Ⅲ　恩智遺跡（第25次調査）
Ⅳ　亀井遺跡（第17次調査）
Ⅴ　萱振遺跡（第30次調査）
Ⅵ　小阪合遺跡（第45・46次調査）
Ⅶ　成法寺遺跡（第26次調査）
Ⅷ　高安古墳群（第７次調査）
Ⅸ　美園遺跡（第９次調査）
Ⅹ　八尾寺内町（第６次調査）



２０１４年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの埋蔵文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成23～25年度に八尾市内で行った公共事業に伴う調査（10遺跡、11件）の報告をまとめたものであります。内訳としては６件の発掘調査の他、開発に先立って実施した遺構確認調査５件の調査成果が収録されています。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成26年３月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長　西　浦　昭　夫

序

1．本書は、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成23～25年度に実施した公共事業に伴う発掘調査・遺構確認調査の成果報告を収録したものである。
1．本書作成の業務は、各現地調査終了後に着手し、平成26年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は，下記の目次のとおりである。
1．本書の執筆・構成・編集は当調査研究会　坪田真一が行った。
1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１(平成８年７月発行)・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』(平成24年度版)をもとに作成した。
1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位(T.P.)である.
1．本書で用いた方位は座標北(国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕) を示している。
1．遺構名は下記の略号で示した。
　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　ピット－ＳＰ　落ち込み－ＳＯ　自然河川－ＮＲ
1．遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。
1．土色については『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　　次

はしがき
序
Ⅰ　植松遺跡 第13次調査(ＵＭ2013－13)……1
Ⅱ　太田川遺跡 第３次調査(ＯＴＧ2013－３)……7
Ⅲ　恩智遺跡 第25次調査(ＯＪ2011－25)……13
Ⅳ　亀井遺跡 第17次調査(ＫＭ2012－17)……17
Ⅴ　萱振遺跡 第30次調査(ＫＦ2013－30)……21
Ⅵ　小阪合遺跡 第45・46次調査(ＫＳ2011－45・ＫＳ2012－46)……25
Ⅶ　成法寺遺跡 第26次調査(ＳＨ2013－26)……35
Ⅷ　高安古墳群 第７次調査(Ｔ2011－７)……41
Ⅸ　美園遺跡 第９次調査(ＭＳ2012－９)……51
Ⅹ　八尾寺内町 第６次調査(ＹＣ2011－16)……61
報告書抄録

Ⅰ　植松遺跡第13次調査(ＵＭ2013－13)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市植松町３丁目地内他で実施した平成25年度ＪＲ八尾駅周辺整備事業に伴う植松遺跡埋蔵文化財遺構確認調査である。

1．本書で報告する植松遺跡第13次調査（ＵＭ2013－13）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成25年５月20日～５月21日（外業実働２日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約16㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・竹田貴子の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。

　遺物実測・トレース－市森千恵子、その他－坪田。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1

2．調査概要……3

　1）調査の方法と経過……3

　2）基本層序……3

　3）検出遺構と出土遺物……3

3．まとめ……5

Ⅰ　植松遺跡第13次調査（ＵＭ2013－13）

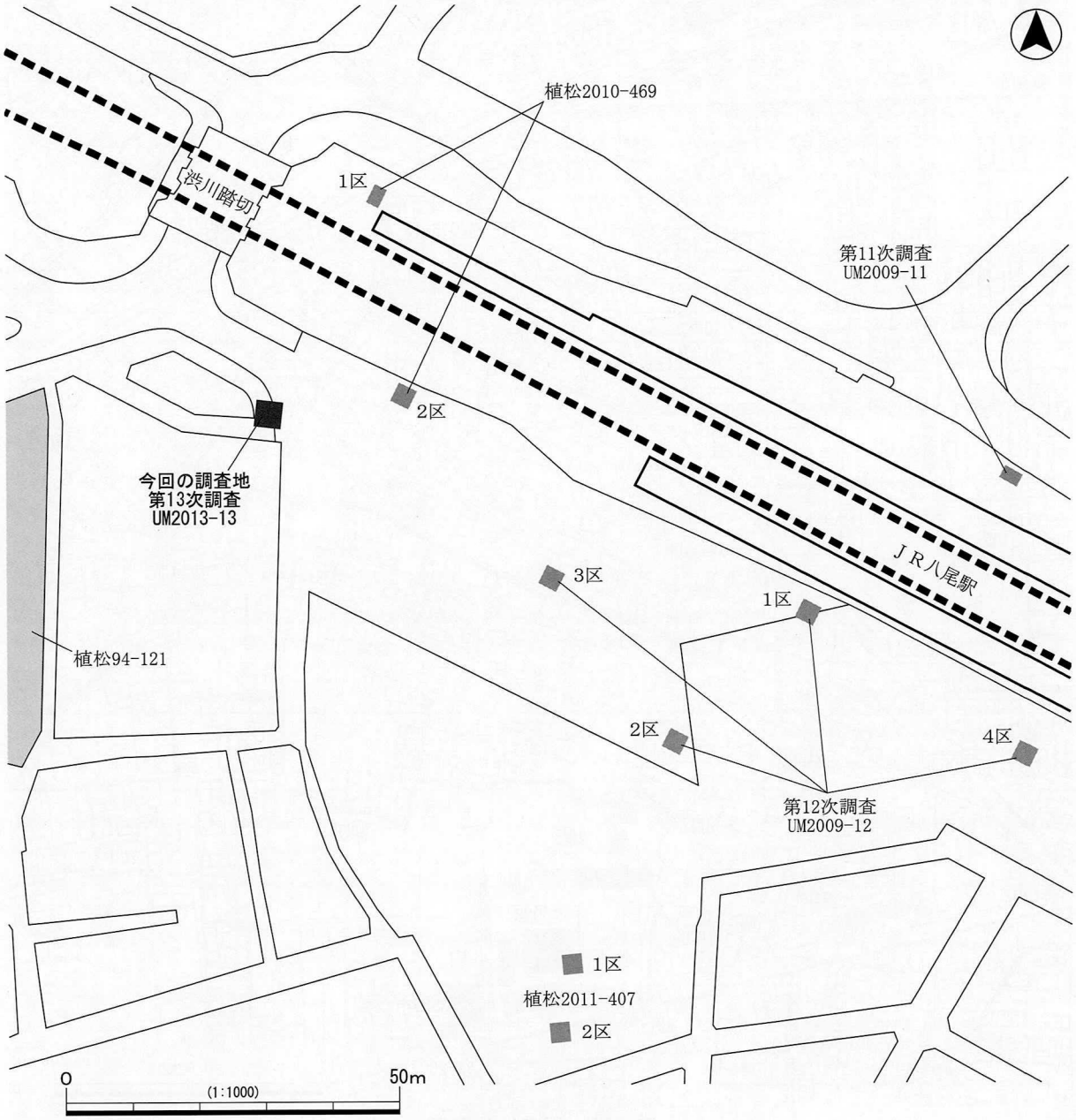
１．はじめに

植松遺跡は八尾市南西部に位置する遺跡である。その範囲は東西約0.8km・南北約0.8kmにおよび、現在の行政区画では安中町４丁目・植松町３～８丁目・永畑町２・３丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流であった古長瀬川と古平野川の分岐点付近に位置しており、遺跡範囲中央部に古平野川の自然堤防が形成されている。この自然堤防上の西部には、跡部遺跡・太子堂遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡などが連なって成立している。

第１図　調査地位置図

当遺跡発見の経緯は、昭和56(1981)年に八尾市教育委員会が永畑町２丁目で行った発掘調査(S56市教委。調査時は植松南遺跡と呼称)で、平安時代前期の掘立柱建物や溝からなる居住域が検出されたことによる。その後、大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって、多次にわたる調査が行われているが、大規模な調査は遺跡南部の国道25号沿いに集中しており、中央～北部では下水道工事等に伴う小規模な調査や遺構確認調査が散発的に実施されている状況である。

南部での主な調査成果として、弥生時代前期の水田や古墳時代前期の集落が検出されている。また古墳時代後期～平安時代前期では、遺跡範囲を北東－南西に横断する古平野川と考えられる埋没河川が確認されており、その規模は最大で150mを超える川幅が推定されている。



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は平成25年度ＪＲ八尾駅周辺整備事業に伴う植松遺跡埋蔵文化財遺構確認調査で、当調査研究会が植松遺跡内で行った第13次調査（ＵＭ2013－13）である。

調査区は現況の歩道・車道に跨る部分に設定されており、平面形は約4.0m×4.0mの正方形を呈し、面積は約16㎡を測る。

調査は現地表（約T.P.+10.8～11.0m）下約3.0mまでについて、機械掘削・人力掘削を併用して実施した。

標高の基準は、北側道路上の八尾市街区補助点（4B132：T.P.+10.861m）を使用した。

２）基本層序

0A層はアスファルト・バラス・盛土である。0B層はコンクリート敷きで、道路敷設以前の建物の基礎と考えられる。0C層は炭・焼土等を多く含む何かの燃えかすと捉えられる締まりの悪い地層で、後述する第１面の耕作段差を埋め立てた客土であろう。１～３層は西半部で見られた撹拌された水田作土である。４層はブロック状を呈する層相で、作土及び東部からの崩落土と考えられる。５・６層は東部で見られた高まり部分にあたり、均質な層相で島畑盛土・作土と捉えられる。この下層にあたる７層は撹拌された作土である。８・９層は水成層か、あるいはやや撹拌が認められることから作土の可能性がある。10・11層は水成層で、洪水砂と考えられる。12層は土壌化層で、撹拌された作土と考えられる。13層は水成層で、河川堆積である。

３）検出遺構と出土遺物

【第１面】

西部の１層水田作土上面（T.P.+9.4m）、東部の５層島畑作土上面（T.P.+10.1m）にあたり、水田・島畑からなる耕作面である。耕作段差は約70cmを測る。平面的には東部の７層上面で**杭列101**を確認した段階で検出した。**杭列101**は南北方向に直線的に延びる杭列で、やや乱れはあるものの30～40cm間隔で平行する２列からなる。各列には40～50cm間隔で杭が垂直に打たれている。構築面は島畑盛土・作土である５・６層であり、島畑に付随する施設と捉えられる。７層出土遺物から見て第１面の時期は近世以降である。

【第２面】

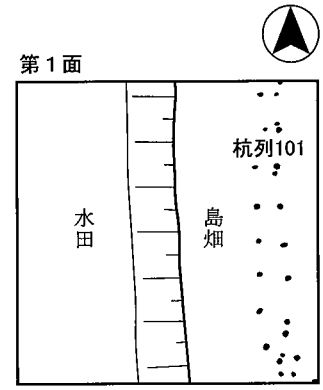
12層上面（T.P.+8.8m）で土坑１基（ＳＫ201）を検出した。北・西は調査区外に至るため詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形が推定される。規模は東西3.2m以上×南北2.7m以上、深さ約40cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の単層で、一気に埋められた状況である。遺構の性格は明らかでない。遺物は土師器皿、瓦器椀、須恵器等の小片の他、加工木片が出土しているが、図化しえたものは土師器皿（１）のみである。遺物の時期は明確ではないが13世紀頃と考えられる。

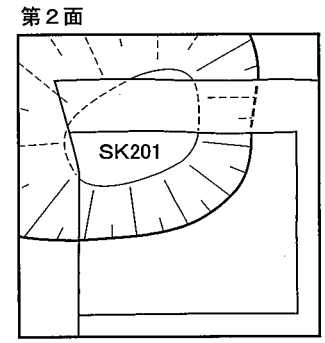
【地層出土遺物】

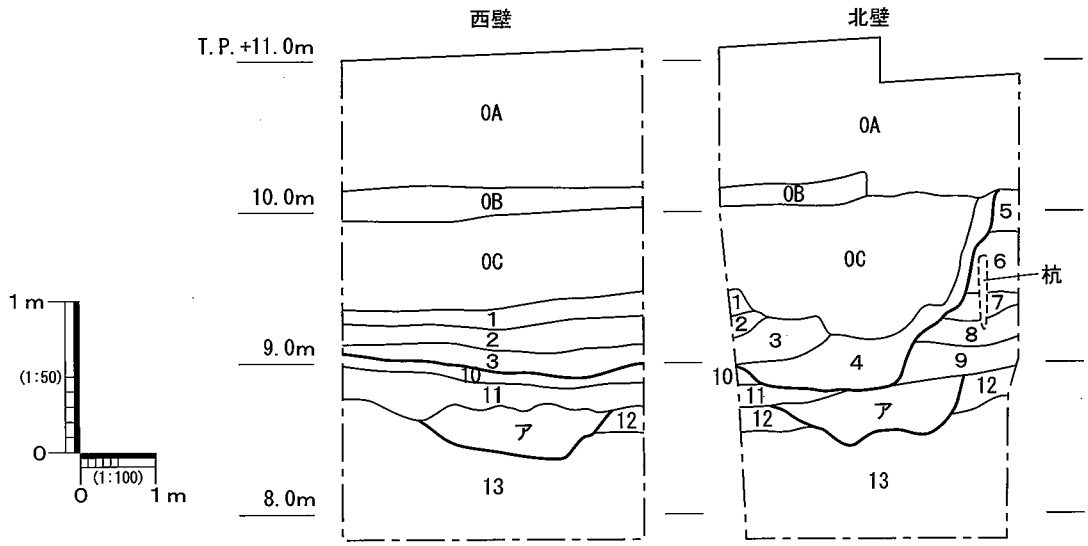
３層－近世平瓦片、７層－18世紀以降の近世陶磁器、平瓦片、９層－13世紀頃の土師器皿片、13層－摩耗した奈良時代頃までの土師器、須恵器片、サヌカイト片が出土した。このうち図化しえたものは９層からの土師器皿片（２）、13層からの土師器皿片（３）、須恵器杯身片（４）である。２は13世紀頃、３は奈良時代頃、４は古墳時代後期後半に比定される。

0A. アスファルト・バラス・盛土
0B. コンクリート
0C. 10YR3/2黒褐色極細粒砂～極粗粒砂　炭・焼土(燃えかす)
1．2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　Fe斑　旧耕土
2．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
3．5Y5/1灰色細粒砂～極粗粒砂多混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
4．5Y5/1灰色粘土～粗粒砂 ブロック状
5．10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂混シルト　島畑作土
6．10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂～中粒砂混シルト　島畑作土
7．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～中粒砂多混シルト　撹拌作土
8．2.5Y6/1黄灰色シルト質粘土～細粒砂　撹拌作土？
9．5Y5/1灰色シルト混細粒砂～粗粒砂　撹拌作土？
10. 2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂　水成層
11. 5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土～シルト　水成層
12. 2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂多混シルト　撹拌作土？
13. 10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂～極粗粒砂　水成層

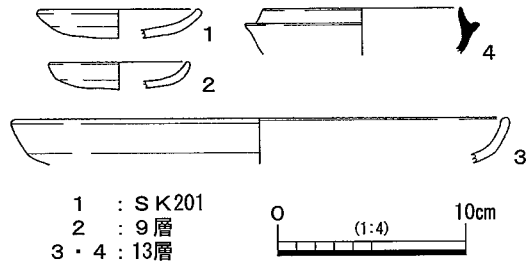
ＳＫ201
ア．10YR4/3にぶい黄褐色～2.5Y4/1黄灰色シルト質粘土ブロック　植物遺体







第３図　平断面図



1　：ＳＫ201
2　：９層
3・4：13層

第４図　出土遺物

３．まとめ

調査では中世～近世の遺構を検出し、それ以下では河川堆積を確認した。

調査地は長瀬川と平野川の分岐地点に当り、13層の砂層はいずれかの河川堆積と考えられる。この砂層は西側に近接する植松遺跡（94－121）、東側の（2010－469）等でも確認されている。出土遺物からこの河川は奈良時代以降の埋没と捉えられ、埋没後には作土と考えられる12層土壌化層が形成されており、生産域となったと考えられる。時期的には中世頃であろう。その後も生産域としての土地利用が続いており、近世頃には水田・島畑からなる耕作地が形成されている。東の（2010－469）や南部の（2011－407）においても近世の島畑や水田が検出されており、調査地一帯には同様の景観が広がっていたと考えられる。

参考文献

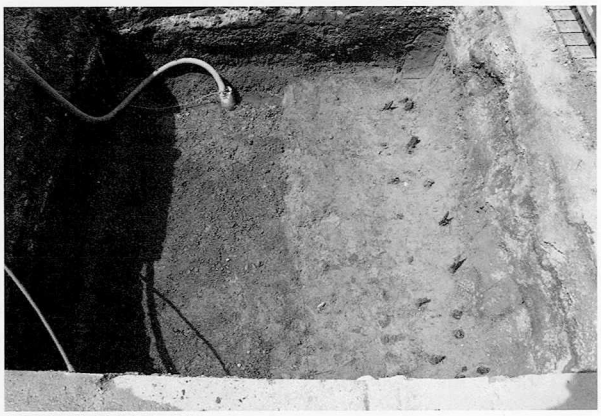
・高木真光1983「第２章　植松南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980･1981年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告２』財団法人八尾市文化財調査研究会
・川瀬貴子・降矢哲男2007『植松遺跡　大阪府営八尾植松（第１期）住宅（建て替え）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　（財）大阪府文化財センター調査報告書第164集』財団法人大阪府文化財センター
・黒須亜希子2010『植松遺跡２　大阪府営八尾植松（第２期）住宅（建て替え）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　（財）大阪府文化財センター調査報告書第208集』財団法人大阪府文化財センター
・八尾市教育委員会1995『八尾市内遺跡平成６年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告31　平成６年度国庫補助事業』
・樋口　薫2012「Ⅱ－３－１）植松遺跡（2010－469）の調査」『八尾市内遺跡平成23年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告69　平成23年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

調査地（西から）

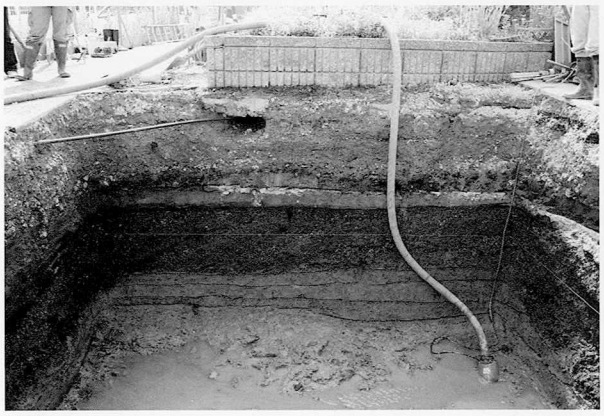
機械掘削（南西から）

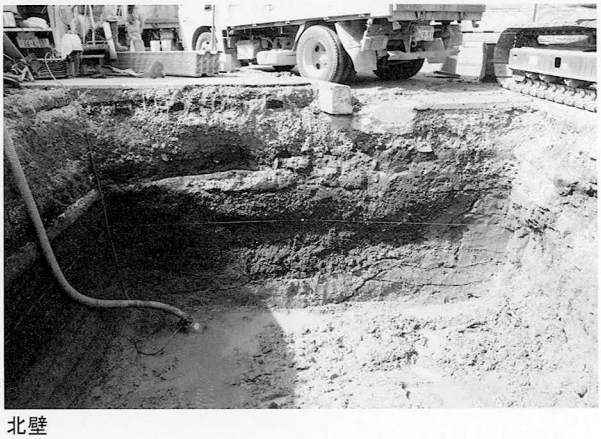
調査状況（東から）


第１面全景（南から）

第２面検出状況（南から）

第２面全景（東から）


西壁


北壁

Ⅱ　太田川遺跡第３次調査(ＯＴＧ2013－３)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越３－70で実施した消防団高安分団北部分隊消防機械器具置場改築に伴う太田川遺跡埋蔵文化財遺構確認調査である。

1．本書で報告する太田川遺跡第３次調査（ＯＴＧ2013－３）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成25年10月28日（外業実働１日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約９㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・芝﨑和美・永井律子の参加を得た。

1．内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。
　遺物実測・トレース－市森千恵子、その他－坪田。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……7
2．調査概要……8
　1）調査の方法と経過……8
　2）基本層序……8
　3）検出遺構と出土遺物……10
3．まとめ……10

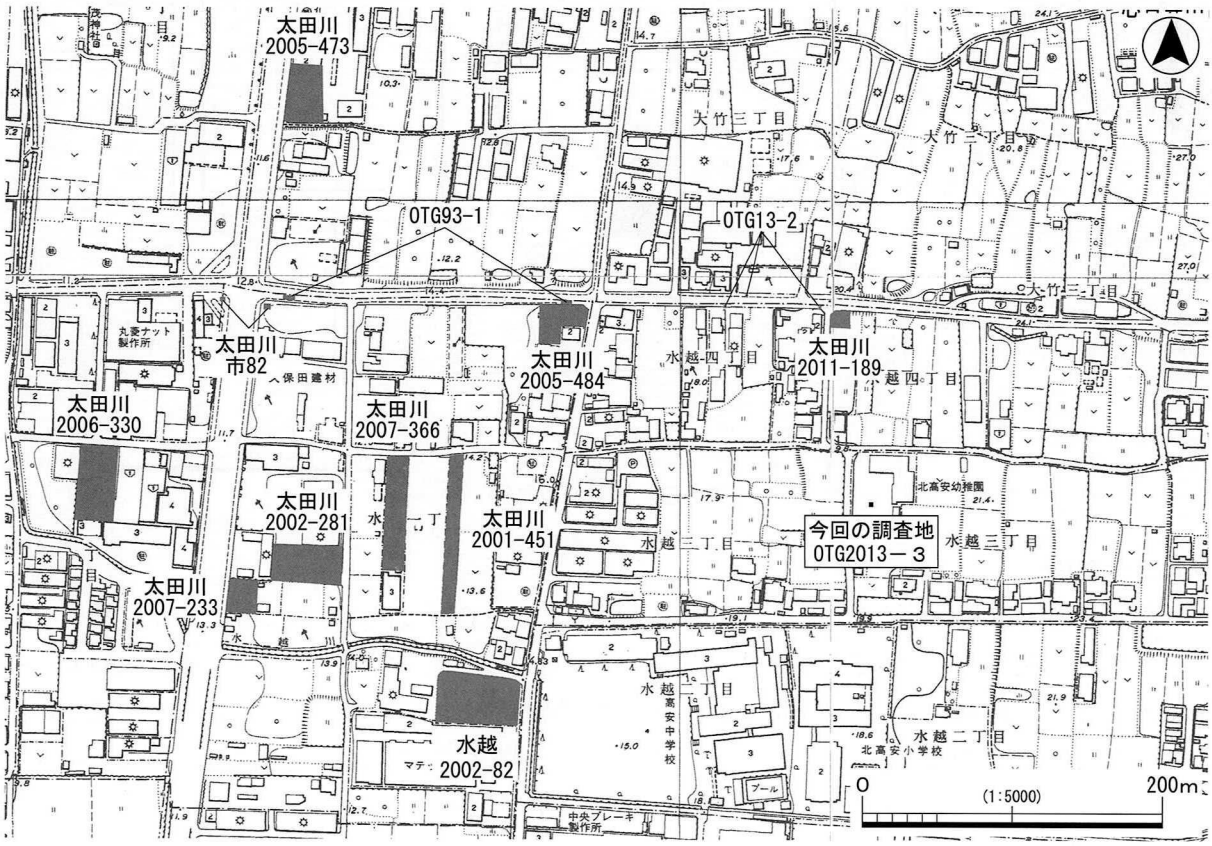
Ⅱ　太田川遺跡第３次調査(ＯＴＧ2013－３)

１．はじめに

太田川遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹１・３・４丁目、水越１・３・４丁目、西高安町１・２丁目の、南北約500m・東西約850mがその範囲とされている。地理的には生駒山西麓の扇状地先端部にあたり、西流する太田川と水越川に挟まれた地域であり、同地形上において北側で大竹西遺跡、心合寺山古墳、心合寺跡、東側で大竹遺跡、南側で水越遺跡に接している。

当遺跡が認識されたのは、昭和15(1940)年３月、東高野街道改修工事の際、滑石製勾玉・弓筈状木製品等を含む地層が確認されたことによる。そして八尾市教育委員会により昭和56(1981)年に立会調査、さらに昭和57(1982)年には最初の発掘調査(太田川市82)が実施され、前者では古墳時代包含層、後者では弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。その後も遺構確認調査や小規模な発掘調査が市教委・当調査研究会によって継続的に実施されており、当遺跡は弥生時代～中世の遺跡として認識されている。

今回の調査地北西部では、当研究会が第１次調査(OTG93-1)を実施しており、縄文時代晩期、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良時代に亘る遺構・遺物を検出している。なかでも古墳時代後期の溝から出土した滑石製有孔石製品の未成品は、周辺の水越遺跡・大竹西遺跡といった玉造関連遺跡との関係を考える上で注目される資料である。



第１図　調査地位置図

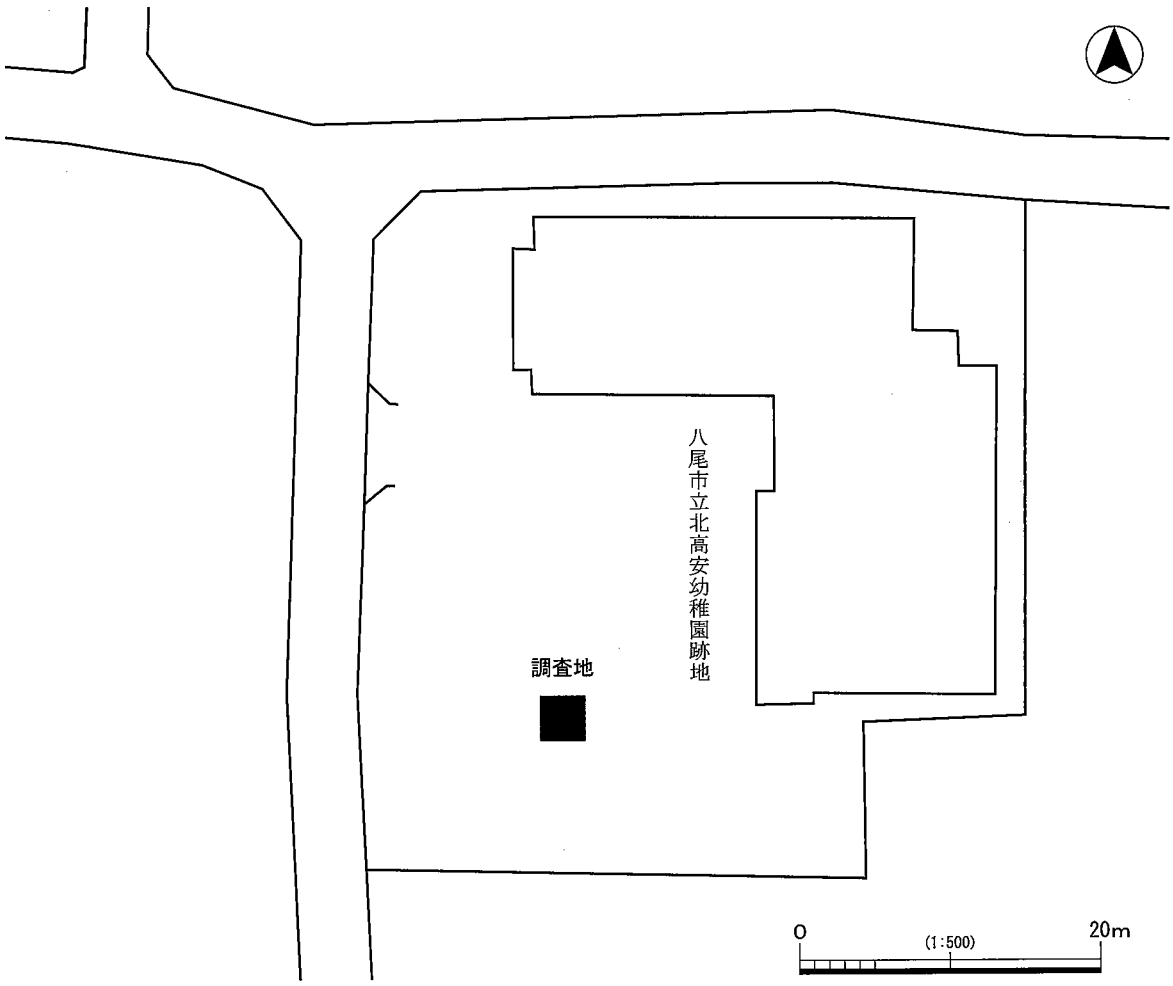
2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は消防団高安分団北部分隊消防機械器具置場改築に伴う太田川遺跡埋蔵文化財遺構確認調査で、当調査研究会が太田川遺跡内で行った第３次調査（ＯＴＧ2013－３）である。

調査地は八尾市立北高安幼稚園跡地の敷地南東部に設定されており、平面形は約3.0m四方の正方形を呈し、面積は約9.0㎡を測る。

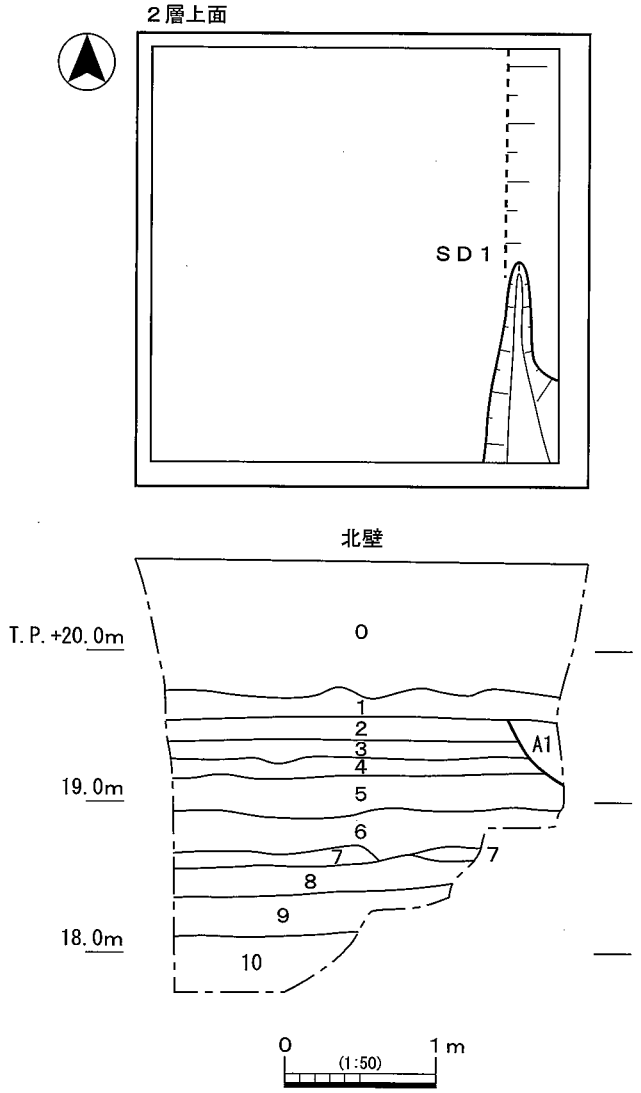
調査は現地表（約T.P.+20.6m）下約2.9mまでについて、機械掘削・人力掘削を併用して実施した。標高の基準は、北側交差点上の八尾市街区補助点（3A453：T.P.+20.295m）を使用した。



第３図　調査区位置図

2）基本層序

０層は幼稚園築造時の盛土である。１層は旧耕土、２・３層も撹拌された作土で、時期は中世～近世であろう。４層は砂礫、５層はシルト質粘土基調の水成層である。６層は土壌化層で、弥生土器を含む。７層は細粒砂～中粒砂からなる水成層で、洪水砂であろう。南西部には見られなかった。８層は土壌化層で、縄文時代～弥生時代の土器を少量含む。９層は炭酸鉄を含む湿地性の水成層で、上部は土壌化していると考えられる。10層はシルト質粘土～細粒砂からなる水成層である。



０．盛土
１．10YR6/2灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト　旧耕土
２．7.5GY6/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　撹拌作土
３．2.5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
４．N6/0灰色シルト～細礫　土壌化層　水成層（～近世）
５．2.5Y5/3黄褐色細粒砂～中礫混シルト質粘土　水成層
６．10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～中粒砂多混シルト質粘土　土壌化層　弥生時代遺物包含層
７．2.5Y7/2灰黄色細粒砂～中粒砂　水成層
８．10YR4/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　土壌化層　縄文時代晩期～弥生時代遺物包含層
９．5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　炭酸鉄　土壌化層　水成層
10．2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粘土～細粒砂　水成層

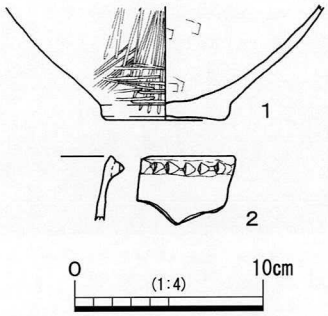
ＳＤ１（近世耕作溝）
A1．5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～極粗粒砂　ブロック状

第３図　平断面図

3）検出遺構と出土遺物

【第１面】

調査区東端の２層上面(T.P.+19.5m)で溝１条(ＳＤ１)を検出した。南北方向に延びる溝の西肩を検出したもので、幅50cm以上、深さ最大約40cmを測る。埋土はブロック状の単層で、耕作関連の溝と考えられる。近世の磁器や平瓦が少量出土しており、時期は近世である。



第４図　出土遺物

【地層内出土遺物】

４層からは弥生土器、須恵器、瓦器、陶器、６層からは弥生土器、８層からは縄文土器・弥生土器が出土した。このうち１・２を図化した。１は６層出土の弥生土器壺底部である。外面には体部に縦位、底部付近に横位～斜位のヘラミガキを施す。中期の所産であろう。２は８層出土の縄文土器深鉢の口縁部である。口縁端部外面に刻み目を施した突帯を巡らせるもので、晩期の長原式に比定される。

３．まとめ

調査では遺構や明確な生活面は確認されなかったが、縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層を検出した。西部で実施した第１次調査(OTG93-1)や太田川遺跡(2005-484)においても該期の包含層や土器が確認されており、周辺に該期の集落域が存在する可能性が高いと考えられる。古墳時代以降では近世の耕作土や耕作関連遺構を確認した。

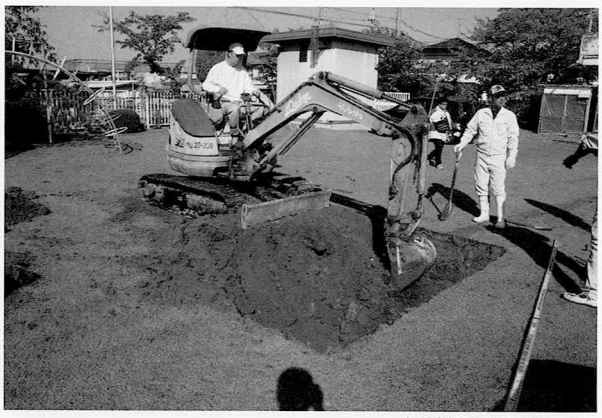
参考文献

・坪田真一1994「Ⅲ　太田川遺跡第１次調査(OTG93-1)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』財団法人八尾市文化財調査研究会

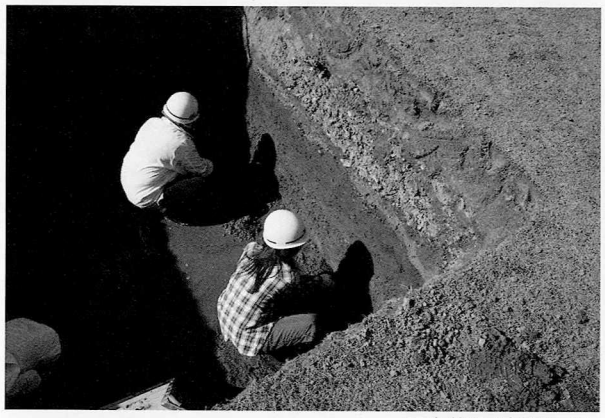
・西村公助2003「５　太田川遺跡(2001-451)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告48　平成14年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

図版1

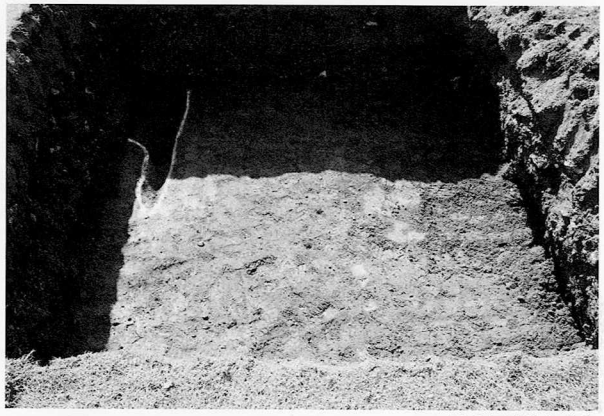
調査地（西から）



機械掘削（南東から）



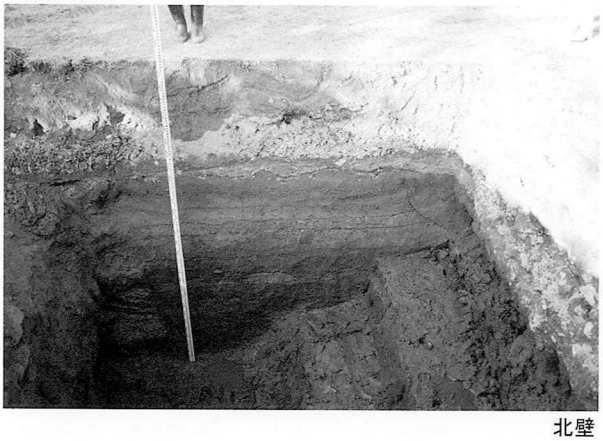
調査状況（南東から）



２層上面（北から）

６層上面（北から）

８層上面（北から）



北壁

南壁

Ⅲ　恩智遺跡第25次調査（ＯＪ2011－25）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市恩智北町四丁目650番地で実施した、南高安小学校給食調理場改築に伴う埋蔵文化財遺構確認調査報告書である。
1．本書で報告する恩智遺跡第25次調査（ＯＪ2011－25）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、八尾市と財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。
1．現地調査は平成24年３月26日（実働１日）に実施した。調査面積は約４㎡である。
1．現地調査には芝﨑和美・竹田貴子が参加した。
1．内業整理は坪田が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……13
2．調査概要……14
　1）調査の方法と経過……14
　2）基本層序と出土遺物……14
3．まとめ……14

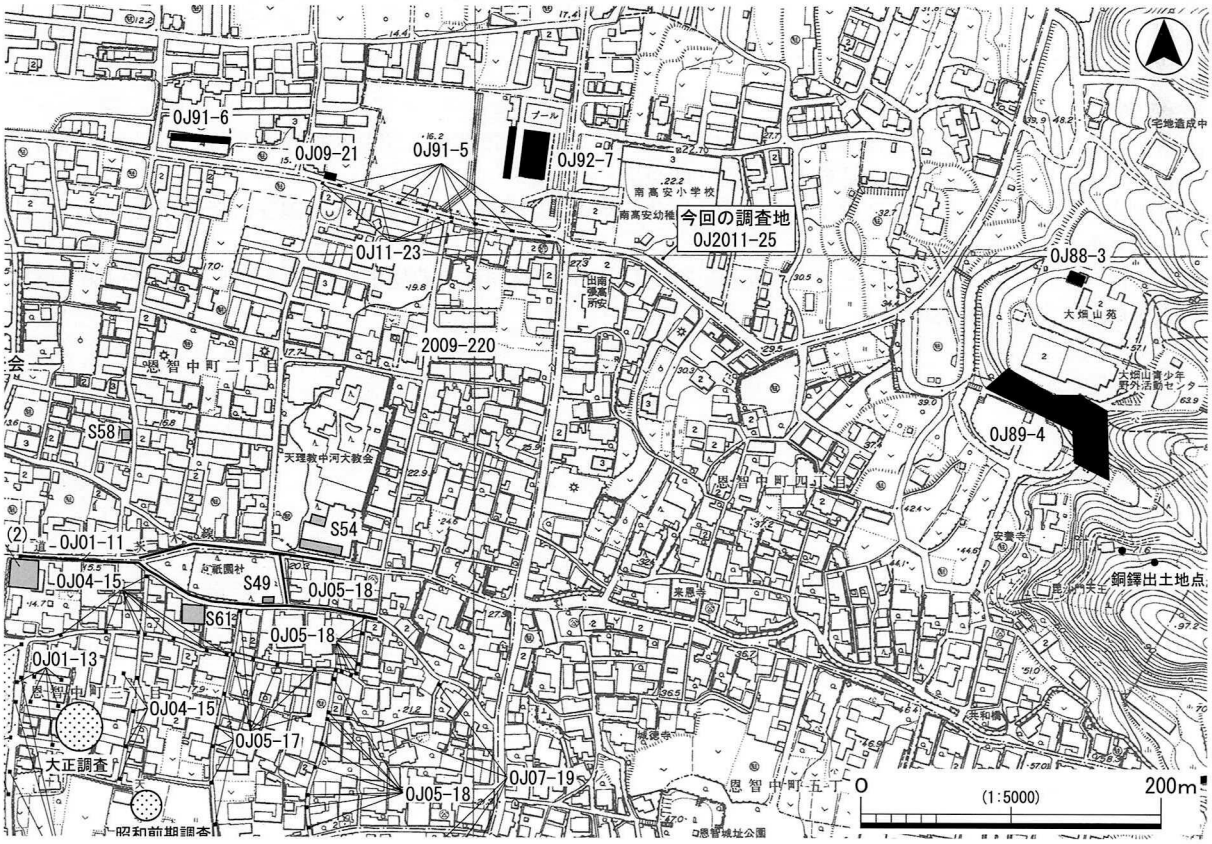
Ⅲ　恩智遺跡第25次調査（ＯＪ2011－25）

１．はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町１～４丁目、恩智中町１～５丁目、恩智南町１～５丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡、西側に玉串川を挟んで東弓削遺跡が存在する。

本遺跡については、古くは大正６年(1917)の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14年(1939)の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23年(1948)の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により実施された。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されている。近年も天王の杜周辺とその南～南西側、北側を中心に多くの発掘調査が行われ、本遺跡は天王の杜周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

今回の調査地は遺跡範囲の中央北東部にあたる。周辺では西部で当研究会が第５・７・23次調査を実施しており、古墳時代中期・中世の遺構・遺物を確認している。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は南高安小学校給食調理場改築に伴う埋蔵文化財遺構確認調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第25次調査（ＯＪ2011－25）である。

調査区は２ｍ四方の１箇所で、現地表（T.P.+23.5m）下1.6mまで機械・人力掘削併用で調査を実施した。

調査で使用した標高の基準は、調査地西部に近接する八尾市街区補助点〈3E257：T.P.+22.462m〉である。

２）基本層序と出土遺物

０層は小学校築造時の盛土・整地層である。１層以下は砂礫層主体の水成層で、扇状地性堆積層である。１層上面では時期不明の土師器が１点出土した。

３．まとめ

調査では小学校築造時の盛土・整地層直下が地山層であることを確認し、上面では遺構は認められなかった。

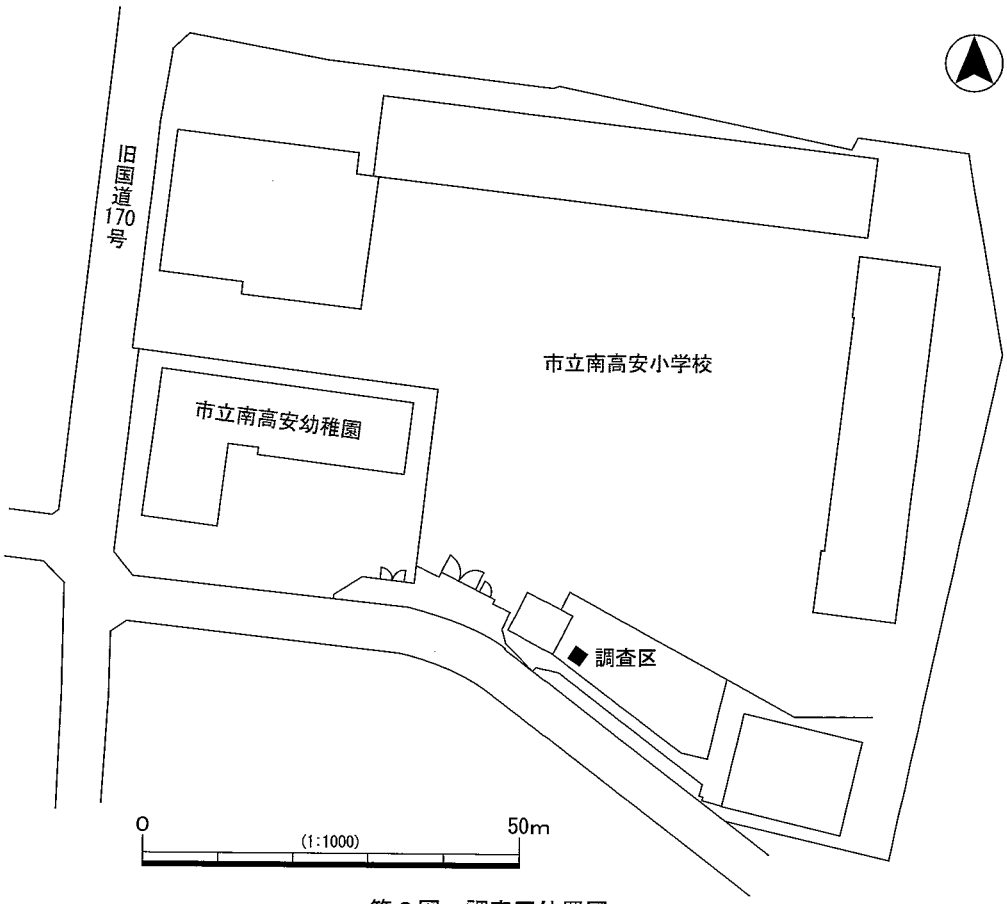
標高の下がった西方の第５次調査地（0J91-5）では同じく地山層上面で古墳時代中期の溝を、また第７次調査地（0J92-7）や第23次調査地（0J2011-23）では中世の遺構を検出しているが、これらの集落域の広がりについては明らかにできなかった。

参考文献

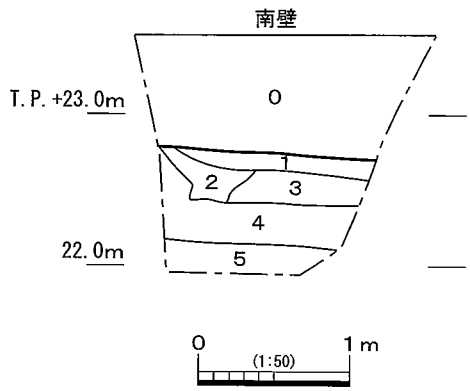
・西村公助1992「Ⅳ　恩智遺跡第５次調査（ＯＪ91－５）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　八尾市文化財調査研究会報告34』財団法人八尾市文化財調査研究会

・成海佳子1997「Ⅰ　恩智遺跡第７次調査（ＯＪ92－７）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一2011「Ⅳ　恩智遺跡第23次調査（ＯＪ2011－23）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会



第２図　調査区位置図



０．盛土・整地層
１．10YR4/4褐色極細粒砂～細礫互層　水成層
２．2.5Y5/2暗灰黄色大礫混シルト～極細粒砂　水成層
３．2.5Y5/3黄褐色細粒砂～極粗粒砂　水成層
４．10YR4/2灰黄褐色シルト混細粒砂～大礫　水成層
５．10YR5/1褐灰色粘土質シルト～細粒砂　水成層

第３図　断面図

図版1

調査地（南東から）

機械掘削（西から）

１層上面（西から）

南壁

南壁下部

調査状況（北から）

Ⅳ　亀井遺跡第17次調査(ＫＭ2012－17)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南亀井町四丁目地内で実施した流域貯留浸透施設築造工事(市立亀井中学校)に伴う亀井遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。
1．本書で報告する亀井遺跡第17次調査(ＫＭ2012－17)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。
1．現地調査は、平成24年７月23日(実働１日)に実施した。調査面積は約４㎡である。
1．現地調査には飯塚直世・國津れいこ・竹田貴子が参加した。
1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……17
2．調査概要……18
　1）調査の方法と経過……18
　2）基本層序……18
　3）検出遺構と出土遺物……18
3．まとめ……18

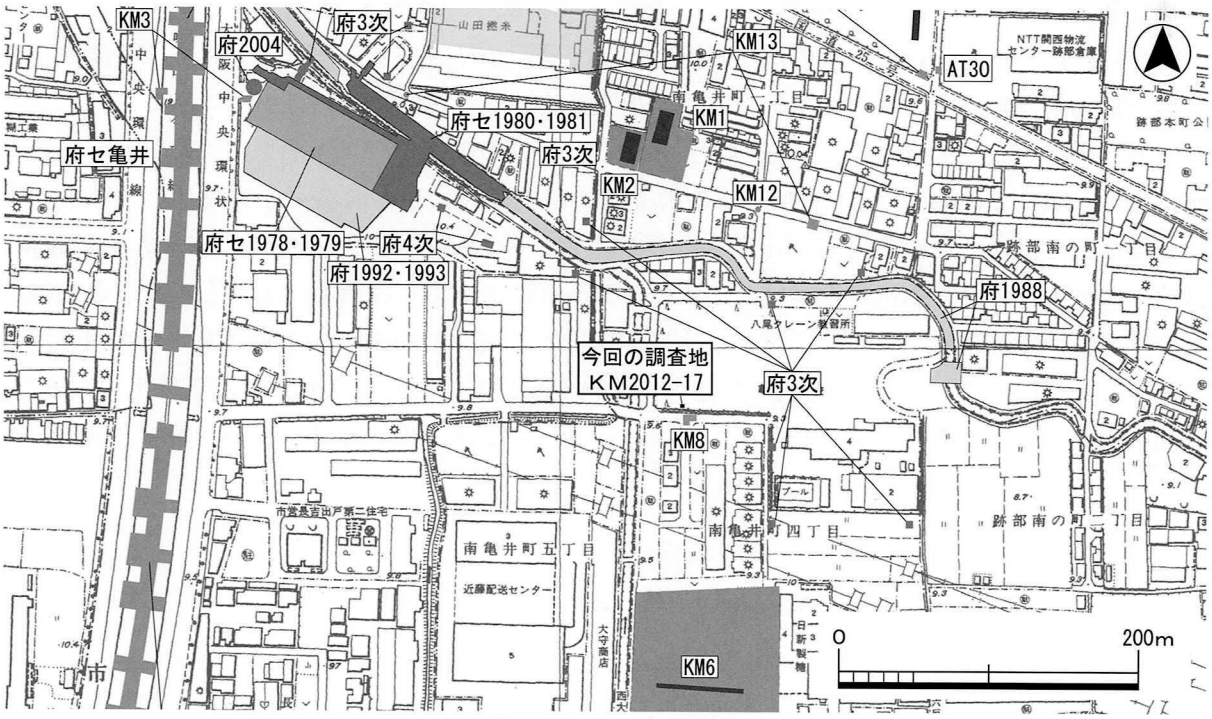
Ⅳ　亀井遺跡第17次調査（ＫＭ2012－17）

１．はじめに

亀井遺跡は八尾市の南西部、現在の行政区画では、亀井町１～４丁目及び南亀井町１～５丁目の東西約0.6km、南北約0.8kmがその範囲と推定されている。地理的には旧大和川水系の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた低位沖積地上に立地する。周辺では北部に久宝寺遺跡、東部に跡部遺跡、西部に竹渕遺跡、南部に大阪市長原遺跡などが位置する。

本遺跡は、昭和43(1968)年の大阪中央環状線建設に先立つ平野川改修工事が行われた際、多量の弥生土器が出土したことによりその存在が確認され、大阪府教育委員会(以下、府教委)による第１次調査が実施された。そして昭和44(1969)年の大阪中央環状線建設予定地内における遺跡範囲確認調査以後、昭和53(1978)～56(1981)年には長吉ポンプ場建設及びこれに関連した平野川改修工事に伴う発掘調査、昭和63(1988)年には平野川改修工事に伴う発掘調査が府教委により実施された。また(財)大阪文化財センター(現、公益財団法人大阪府文化財センター)では、近畿自動車道建設に伴う確認調査を昭和48(1973)年に、そして昭和54(1979)～61(1986)年には本調査を実施している。こうした大規模な調査に加え、八尾市教育委員会や当調査研究会による小規模な調査も継続的に行われており、これらの結果、当遺跡は縄文時代～近世の複合遺跡であり、特に弥生時代においては中河内最大の拠点集落であったことが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲の南部に位置し、前述の府教委による平野川改修工事に伴う調査地(府1988)の南方約100mに位置する。周辺では南側道路部分で当調査研究会が下水道工事に伴う第８次調査(KM8)を、また南約200mでは第６次調査(KM6)を実施しているが、遺跡南部では大規模な調査は実施されておらず、遺跡の実態は不明な点が多い。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は流域貯留浸透施設工事(市立亀井中学校)に伴う亀井遺跡埋蔵文化財発掘調査で、当調査研究会が亀井遺跡内で行った第17次調査(ＫＭ2012－17)である。

調査区は築造工事のうちグラウンド南部に位置するオリフィス桝部分１箇所で、面積は約４㎡(上面では東西約3.0×南北約2.3mで掘削)を測る。

調査にあたっては現地表(約T.P.+9.7m)下約1.8mまでについて機械掘削し、以下約2.5mまでを人力・機械掘削併用により調査を実施した。

標高の基準には、調査地東部約50mの校門前に位置する三級基準点相当の八尾市街区多角補助点〈2A066：T.P.+9.236m〉を使用した。

2）基本層序

０層は盛土、及び撹乱。１層は旧耕土である。２層はグライ化した作土で、時期は近世であろう。３・４層はFe斑を含み撹拌された作土で、時期は中世～近世であろう。５層は北部で見られた水成層である。洪水砂と考えられ、北方の平野川に起因する洪水の可能性がある。６層は暗色を呈する土壌化層で、作土の可能性もある。７・８層はFe斑やMn斑を含み撹拌された作土である。９層はやや暗色を呈する土壌化層であるが、作土の可能性もある。

3）検出遺構と出土遺物

遺構・遺物は認められなかった。

3．まとめ

調査ではT.P.+8.5m以下に水田作土の堆積が続く状況が確認され、当地においては生産域としての土地利用が続いていることを確認した。出土遺物はなく、時期的には不明である。

北方の平野川改修工事に伴う調査(府1989)は、大部分の調査地が河床部を調査対象としているが、当地の東約180mに位置する東端部の調査区では現地表面からの調査が実施されている。その調査成果によると、約T.P.+7.0mで古代及び古代以前の耕作面が検出されており、それ以降、古代～中世～近世と水田遺構が続いている。なお下層においても古墳時代前期と考えられる耕作土の可能性がある地層や粘土を基調とする自然堆積層が続いている。また南方の第６次調査地点においてもT.P.+7.5～7.7mで古代の生産関連遺構を検出している。これらの調査成果からみて、今回の調査で確認した作土層の時期については、３・４層が中世～近世、６～９層が古代～中世頃に比定されると考えられる。

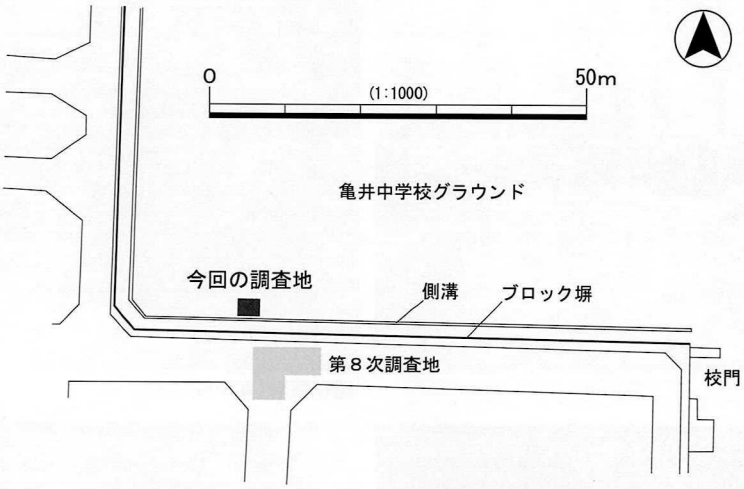
参考文献

・田代克己・中井貞夫1972『亀井遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南亀井町所在－　大阪府文化財調査概要1971－５』大阪府教育委員会

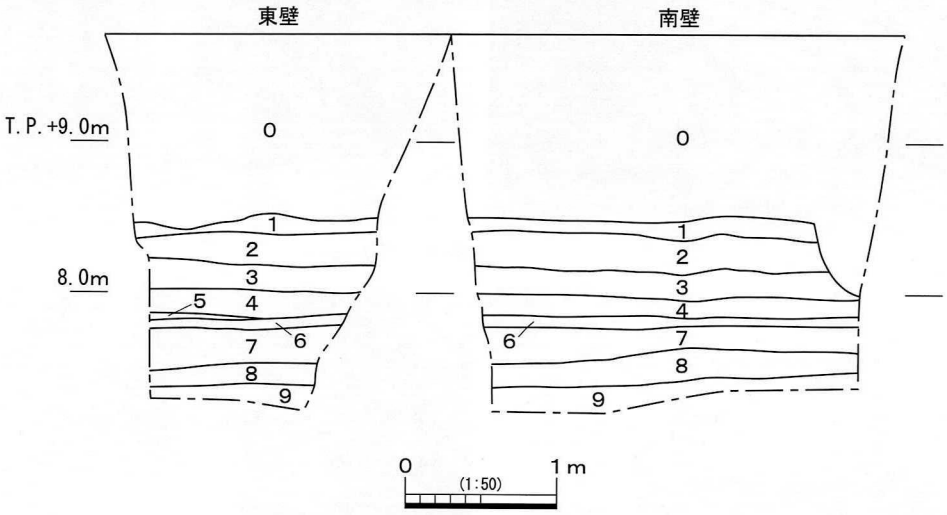
・森井貞雄1989『1988年度　亀井遺跡発掘調査概要－八尾市南亀井町・跡部北の町所在－』大阪府教育委員会

・高萩千秋1999「Ⅳ　亀井遺跡第６次調査(ＫＭ97－６)『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』財団法人八尾市文化財調査研究会

・岡田清一・樋口薫2000「Ⅶ　亀井遺跡第８次調査(ＫＭ98－８)『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会



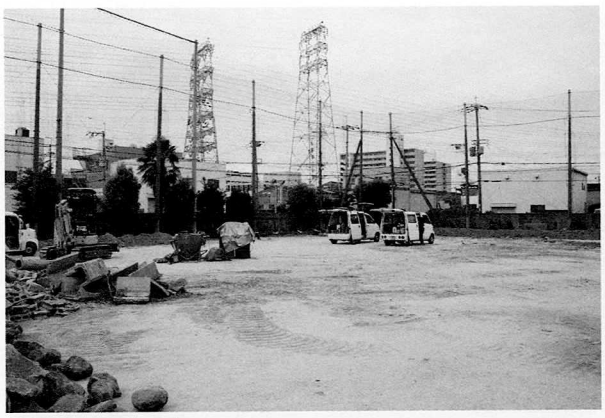
第２図　調査区位置図

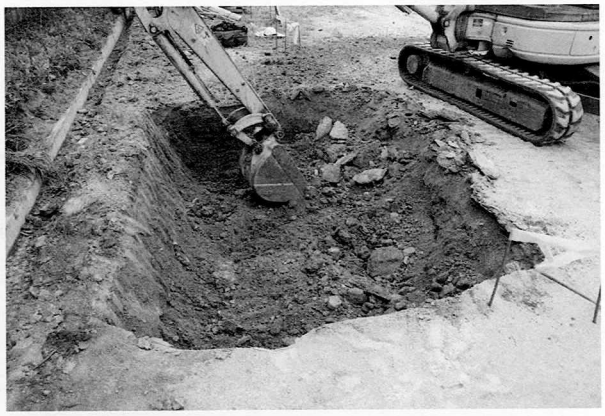


０．盛土・撹乱
１．2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂混シルト質粘土　旧耕土
２．5BG5/1青灰色極細粒砂混粘土　撹拌作土
３．2.5Y6/3にぶい黄色粘土　Fe斑　撹拌作土
４．2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
５．5Y5/2灰オリーブ色シルト～極細粒砂互層　水成層
６．2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土　土壌化層
７．2.5Y6/3にぶい黄色粘土　Fe斑　撹拌作土
８．2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土　Fe斑　Mn斑　撹拌作土
９．2.5Y6/1黄灰色極細粒砂混粘土質シルト　土壌化層

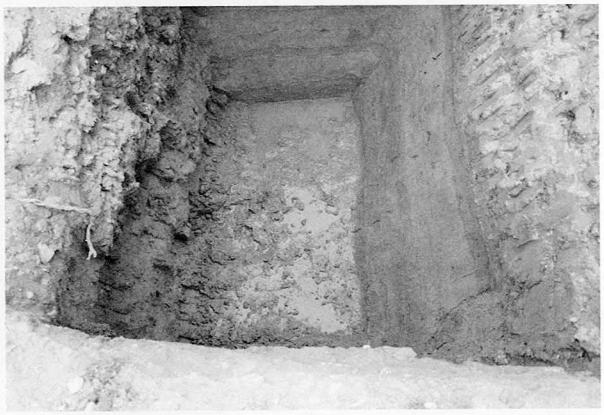
第３図　断面図

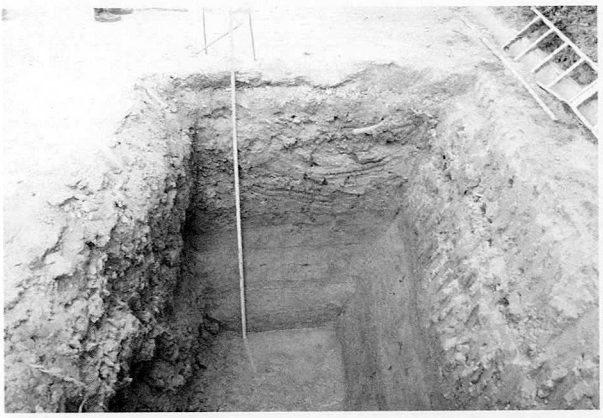
図版1


調査地（北東から）


機械掘削（東から）

７層上面（南から）


最終面（西から）


東壁

東壁下部

南壁下部

調査状況（西から）

Ⅴ　萱振遺跡第30次調査(ＫＦ2013－30)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市旭ヶ丘５丁目85－17・20で実施した保健センター東側駐車場整備に伴う萱振遺跡埋蔵文化財発掘調査である。
1．本書で報告する萱振遺跡第30次調査（ＫＦ2013－30）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．現地調査は、平成26年１月22日（外業実働１日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約７㎡である。
1．現地調査においては、竹田貴子・村井俊子・村田知子の参加を得た。
1．内業整理は坪田が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……21
2．調査概要……22
　1）調査の方法と経過……22
　2）基本層序……22
　3）検出遺構と出土遺物……22
3．まとめ……23

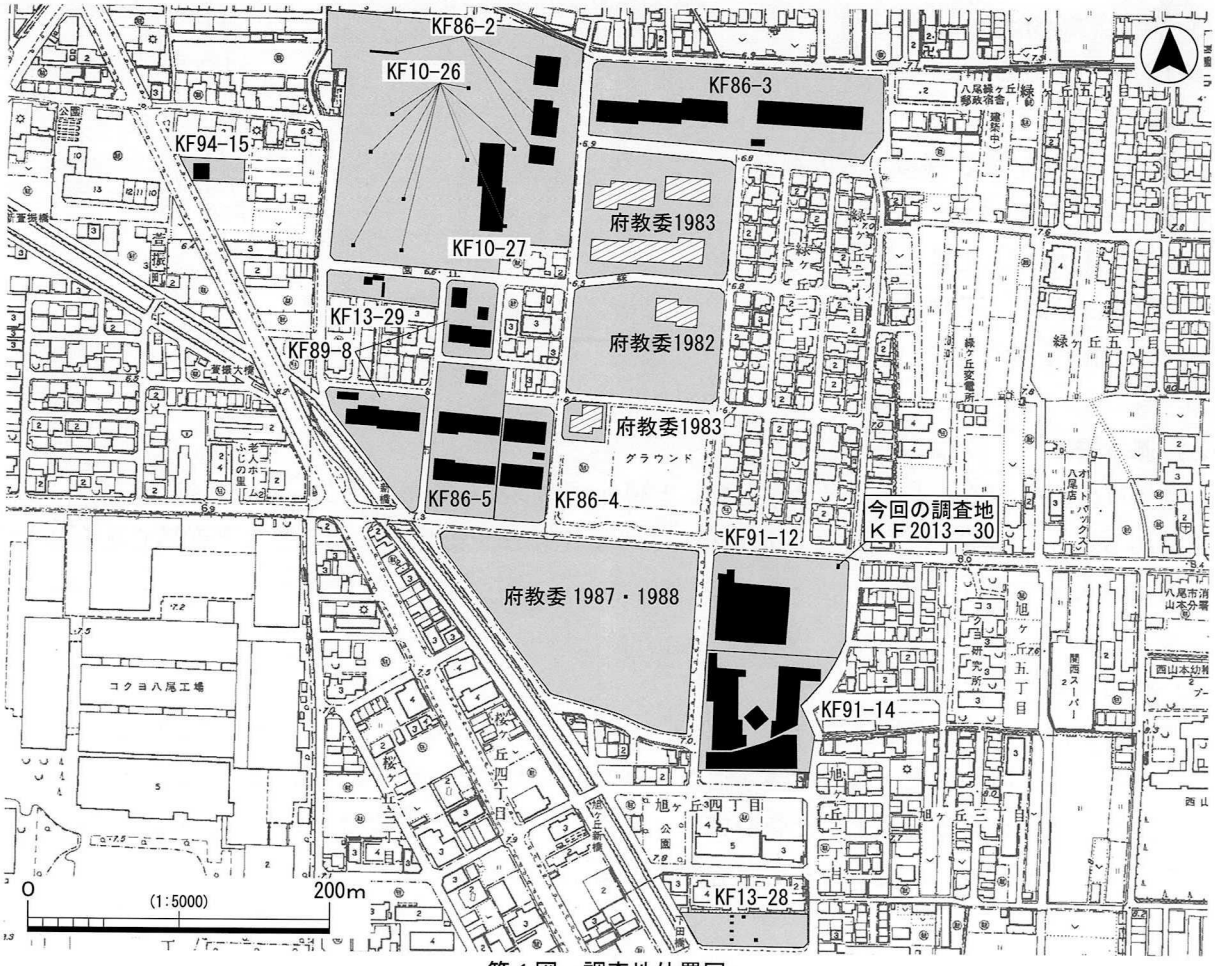
Ⅴ　萱振遺跡第30次調査（ＫＦ2013－30）

１．はじめに

萱振遺跡は、大阪府八尾市の北西部に位置し、緑ヶ丘１～５丁目、萱振町１～７丁目、北本町３・４丁目、楠根町１丁目の東西約0.5～0.9km、南北約1.1kmがその範囲とされている。地理的には、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた低位沖積地に位置している。

当遺跡は、遺跡範囲南東部の緑ヶ丘に存在した八尾競馬場［昭和５(1925)～15(1940)年］跡地内において、昭和18(1943)年に防空壕を構築する際に、古墳時代中期の土師器片や子持勾玉が出土したことにより遺跡として認識された。昭和57(1982)年以降には、府営・市営住宅の建替えや、府立八尾北高校、市立生涯学習センター等の公共施設建設に伴う大規模な発掘調査や、公共下水道工事等に伴う小規模な発掘調査が、大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、当調査研究会により実施されてきた。これら一連の調査の結果、当遺跡は弥生時代中期～鎌倉時代に至る複合遺跡であることが明らかとなっている。

主な調査成果を概観すると、遺跡範囲北部の府立八尾北高校建設に伴う発掘調査では、弥生時代後期～室町時代の遺構・遺物が検出され、古墳時代前期後半の「萱振１号墳」からは、鰭付円筒埴輪・朝顔形埴輪の他、靭形埴輪をはじめとする豊富な形象埴輪が多量に出土しており、古墳時



第１図　調査地位置図

代前期の地域首長の動向を知る上で新たな知見を提供した。一方、遺跡範囲南部では、緑ヶ丘２丁目の府営住宅に伴う発掘調査(府教委1982・1983)で、古墳時代前期前半を中心とする居住域が検出された他、第３次調査(KF86-3)では方墳で主体部に木棺が直葬された古墳時代後期後半の「萱振２号墳」が検出されている。

今回の調査地は遺跡範囲の南東端にあたる。南西部では第12次調査(KF91-12)、第14次調査(KF93-14)を実施しており、古墳時代前期の居住域・墓域の確認や、奈良時代では最古級の土馬の出土が特筆される。

２．調査概要

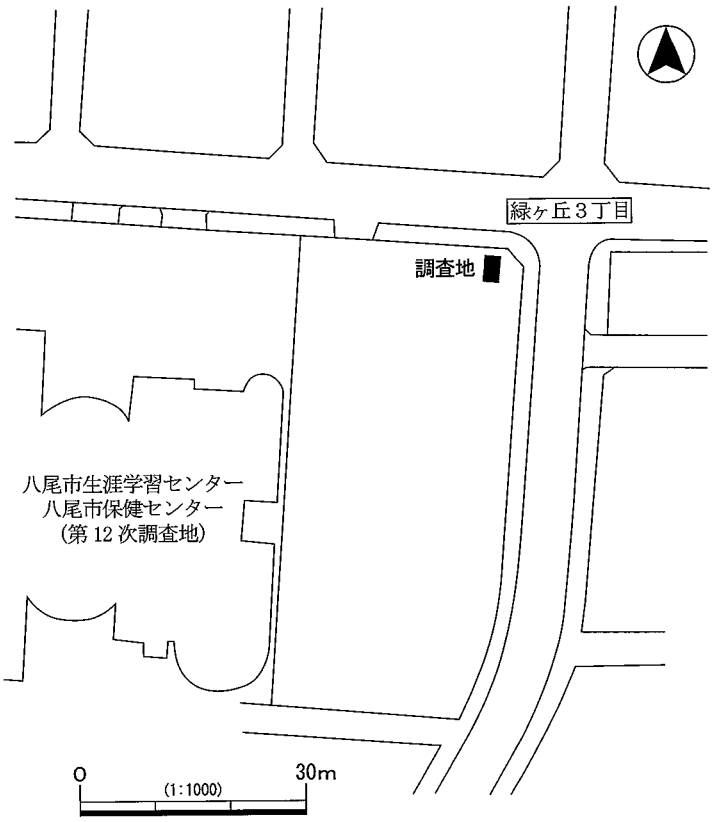
１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市保健センターの東側駐車場整備に伴う発掘調査で、当調査研究会が萱振遺跡内で行った第30次調査(ＫＦ2013－30)である。

調査地は保健センター東側駐車場の敷地北東部角に設置されるオリフィス桝部分で、平面形は東西約2.15ｍ×南北約2.8ｍの長方形を呈し、面積は約７㎡を測る。

調査は現地表(約T.P.+7.9ｍ)下約1.4ｍまでについて、機械・人力掘削を併用して実施した。

標高の基準は、北側歩道上に近接する八尾市街区三角点(1033A：T.P.+7.862ｍ)を使用した。



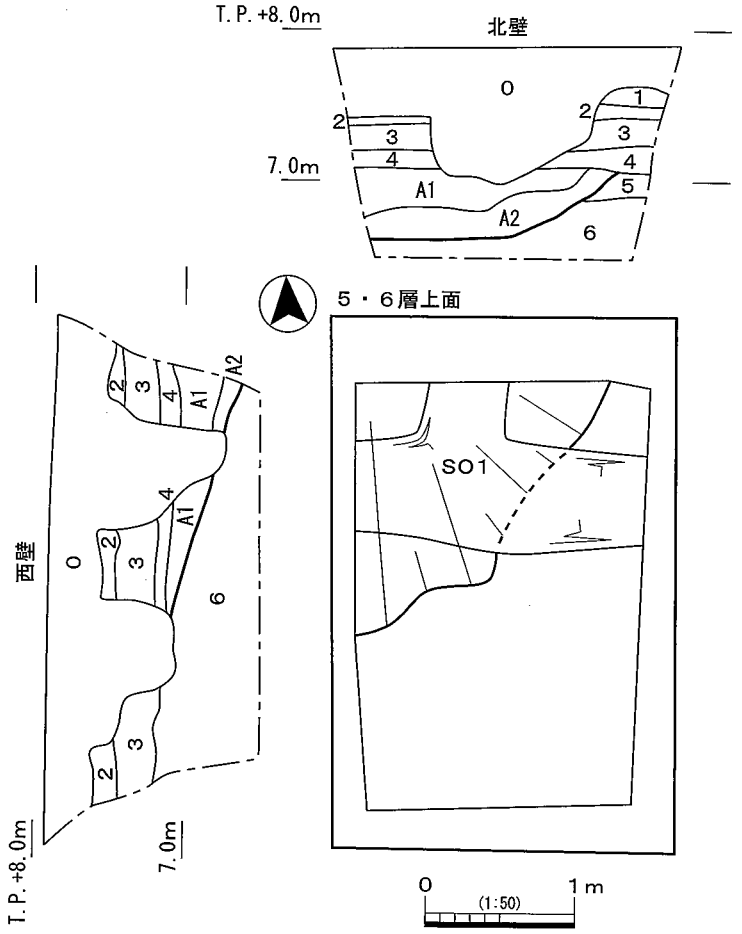
第２図　調査区位置図

２）基本層序

０層は盛土である。１～４層は作土で、１層はブロック状を呈し、２～４層は撹拌が著しい層相である。５・６層は水成層で、河川堆積である。上部は土壌化する。５層は北東部で見られた。６層は湧水層である。

３）検出遺構と出土遺物

調査区北西部の５・６層上面(T.P.+7.1ｍ)で落ち込み１基(ＳＯ１)を検出した。北東－南西方向の弧状を成す肩から北西方向に落ち込むもので、検出部分の規模は東西約1.7ｍ、南北約1.7ｍ、深さ最大約50㎝を測る。埋土は上層がブロック状、下層が自然堆積の互層状を呈する。遺物は上層から中世～近世頃に比定される土師器片、平瓦片が出土した。



０．盛土・撹乱
１．5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
２．10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂混シルト質粘土　Mn斑　撹拌作土
３．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
４．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　Mn斑　Fe斑　撹拌作土
５．2.5Y6/3にぶい黄色シルト　土壌化層　水成層
６．2.5Y7/4浅黄色細粒砂～粗粒砂互層　水成層

ＳＯ１
A1．10YR7/4にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状
A2．7.5Y6/1灰色シルト質粘土～細粒砂互層

第３図　平断面図

３．まとめ

調査では近世～近代の数枚の耕作土層、及び近世の落ち込みを確認した。それ以下は河川堆積となっているが、調査地付近は、萱振分流路と呼ばれる弥生時代後期後半頃の河川域に当っていると考えられており、これに相当する河川堆積である可能性が高い。

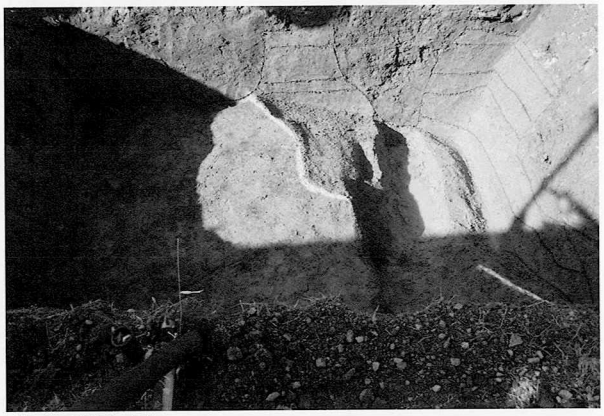
参考文献
・原田昌則2008「Ⅰ萱振遺跡第12次調査（ＫＦ91－12）」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告109』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2008「Ⅱ萱振遺跡第14次調査（ＫＦ93－14）」『萱振遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告109』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

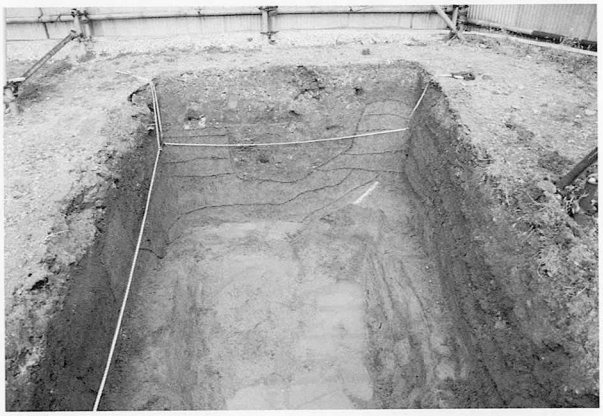
調査地（北から）

機械掘削（南西から）

第１面検出（東から）


第１面（東から）

西壁


北壁

最終面（南から）

調査状況（南から）

Ⅵ　小阪合遺跡第45次調査（ＫＳ2011－45）
小阪合遺跡第46次調査（ＫＳ2012－46）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市山本町南８丁目18番１号(曙川中学校)で実施した、曙川中学校校舎改築に伴う遺構確認調査(第45次調査)、及び本発掘調査(第46次調査)の報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第45・46次調査(ＫＳ2011-45、ＫＳ2012－46)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．調査は第45次調査が高萩千秋、第46次調査は坪田真一が担当した。

1．現地調査は、第45次調査が平成23年９月26・27日(現場実働２日)、第46次調査が平成25年１月28日～２月８日(現場実働９日)に実施した。調査面積は第45次調査が約13㎡、第46次調査が約264㎡である。

1．現地調査には市森千恵子・梶本潤二・國津れいこ・芝﨑和美・竹田貴子・永井律子・村井俊子・村田知子が参加した。

1．本書に係る内業整理は下記が行い、現地調査終了後に着手して平成26年３月をもって終了した。

　遺物接合・復元－梶本・竹田・田島宣子。

　遺物実測－伊藤静江・村井・村田。

　遺物トレース－市森。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……25

2．第45次調査の概要……26

　1）調査の方法と経過……26

　2）基本層序……27

　3）検出遺構と出土遺物……27

　4）まとめ……27

3．第46次調査の概要……27

　1）調査の方法と経過……27

　2）基本層序……28

　3）検出遺構と出土遺物……28

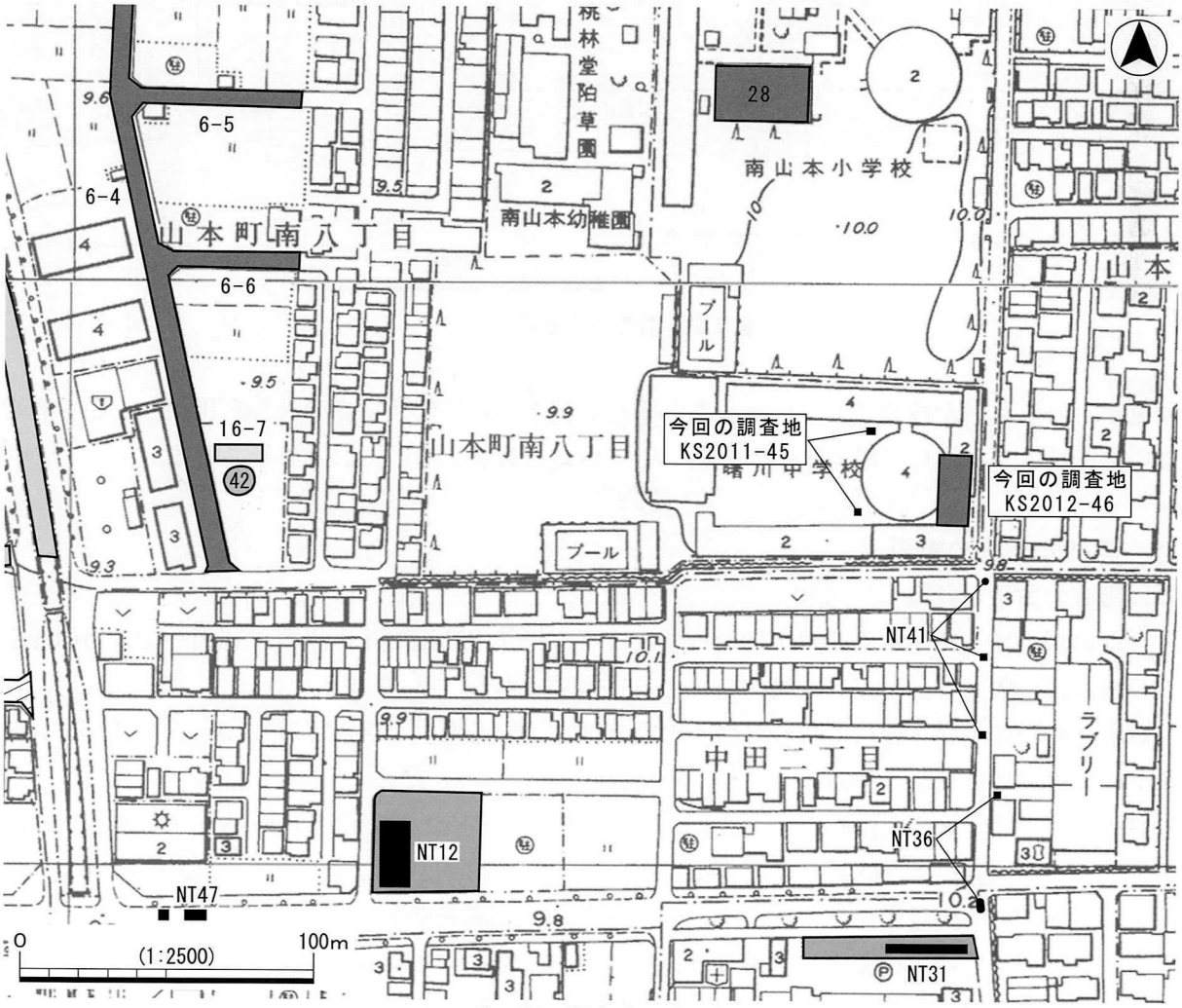
　4）まとめ……31

Ⅵ　小阪合遺跡第45次調査（ＫＳ2011－45）小阪合遺跡第46次調査（ＫＳ2012－46）

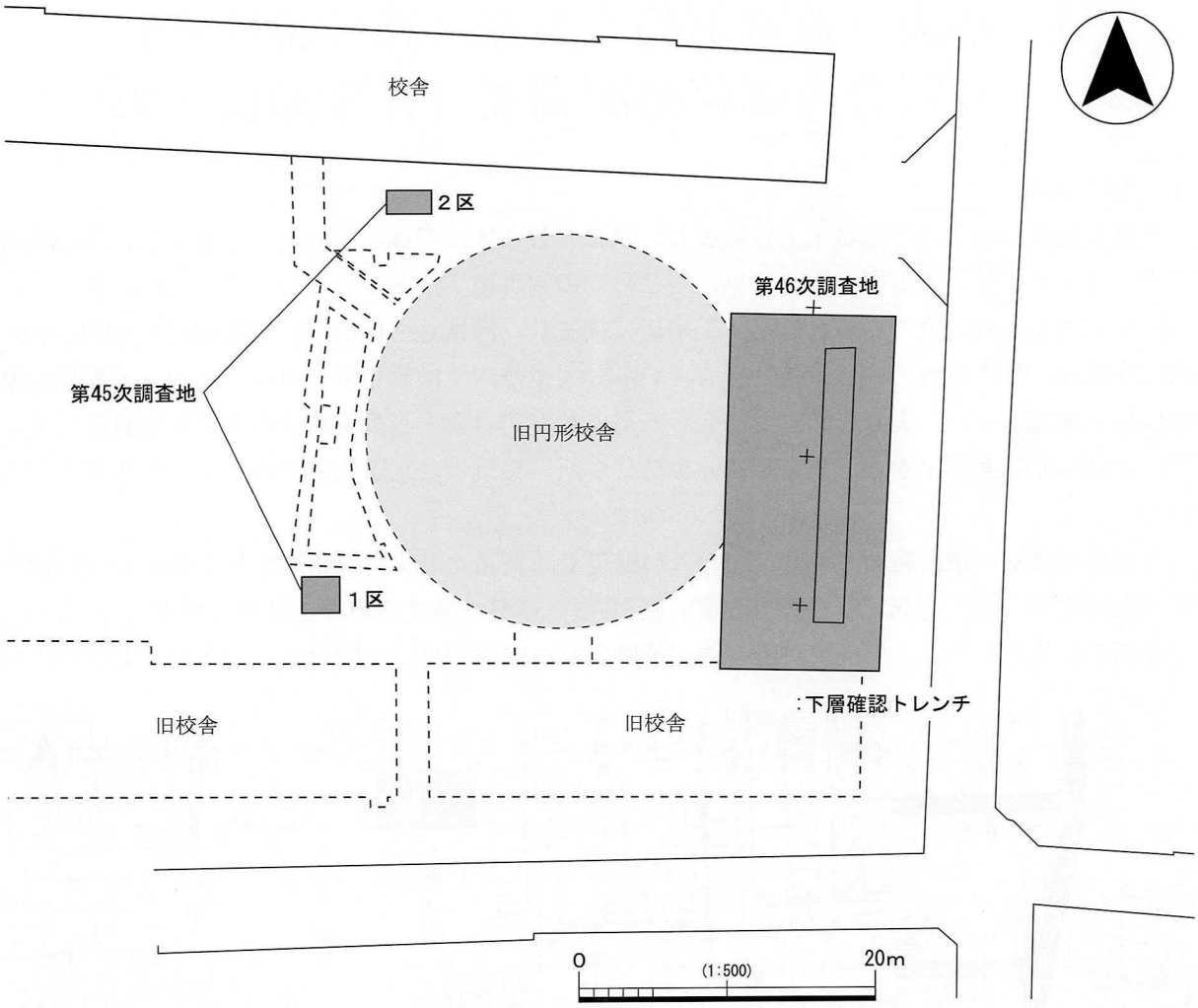
１．はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では小阪合町１・２丁目、南小阪合町１・２・４丁目、青山町１～５丁目、若草町、山本町南７・８丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。当遺跡内では昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲南東部に当たり、周辺では北部で第28次調査、西部で第６次・第16次・第42次調査を、また南部では中田遺跡第31次・36次・第41次調査を当調査研究会が実施している。主な調査成果としては、第28次調査や中田遺跡第36次調査では弥生時代後期の方形周溝墓や土器



第１図　調査地位置図



第２図　調査区位置図

棺墓からなる墓域が確認されている。また第42次調査の古墳時代初頭の溝から出土した船や鹿を描いた手焙り形土器は、絵画土器研究において重要な資料となっており特筆される。

２．第45次調査の概要

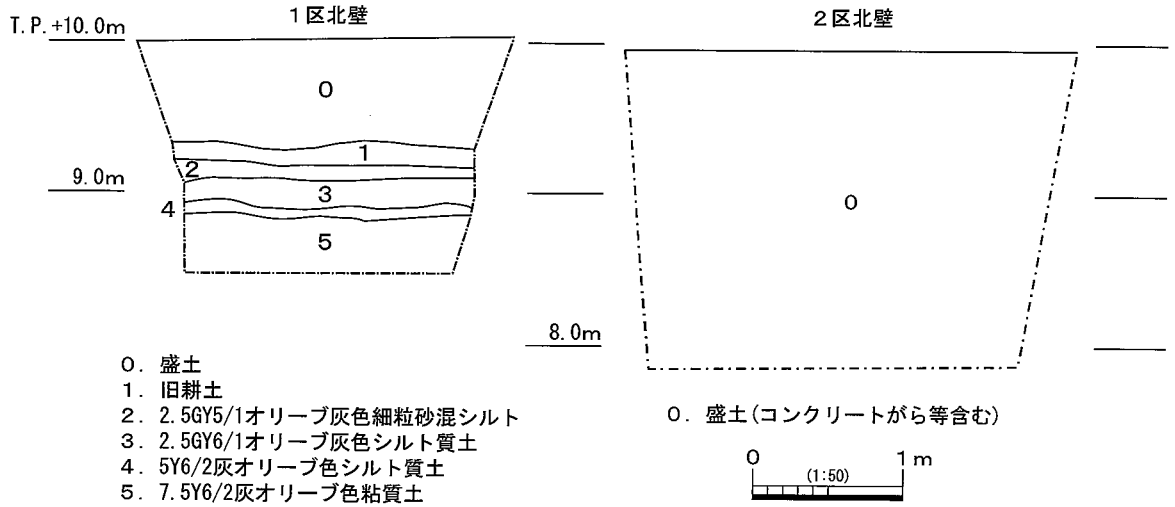
１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市立曙川中学校校舎改築工事に伴う埋蔵文化財遺構確認調査で、当研究会が小阪合遺跡内で行った第45次調査（ＫＳ2011－45）である。

調査は建物建替え予定の隣接に２箇所の調査区を設定した。１区が2.5×2.5m、２区が２×３mで、総面積は約13㎡を測る。

調査は現地表下約2.5mまでを確認する予定であったが、１区では大量の地下水が湧き出たため、約1.8m付近までしか調査ができなかった。２区では約２m以上の撹乱層（近年のゴミ穴）、及び１区と同じく大量の地下水により、撹乱部分のみの調査であった。

調査で使用した標高の基準は、調査地東部道路上に位置する四級基準点相当の八尾市街区多角補助点〈1A235：T.P.+9.624〉を使用した。方位は工事設計図に準じた。



第３図　第45次調査断面図

２）基本層序

１区において現地表下約1.8mまでで６層を確認した。なお、２区は、すべて撹乱層であった。

第０層　盛土・撹乱。学校建設時の整地層で真砂土及び埋め土、２区では整地時に埋められたゴミ穴(コンクリートがら等)である。

第１層　旧耕作土。上面がT.P.+9.3m前後。

第２層　2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂混シルト。近世の作土。

第３層　2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質土。中近世の作土。

第４層　5Y6/2灰オリーブ色シルト質土。

第５層　7.5Y6/2灰オリーブ粘質土。Fe斑点有り。古墳時代の土師器片を微量含む。

３）検出遺構と出土遺物

検出遺構はなかった。出土遺物は１区第５層から土師器、須恵器片、第３層から瓦器の極小片が微量に出土したのみである。

４）まとめ

今回の調査では、中世～近世の生産関連の作土層を検出した。第５層は出土遺物からみて古墳時代の地層と考えられる。近隣の調査では弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が検出されており、当地にもその時期の遺構の存在が考えられる。

３．第46次調査の概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市立曙川中学校校舎改築に伴う調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第46次調査である。本調査は前項２．第45次調査の結果を受けて実施したものである。

調査区平面形は東西約11.0m×南北約24.0mの南北に長い長方形を呈し、面積は約264㎡を測る。遺構確認調査において、調査地の地層は湧水の著しいことが判明しており、掘削に当たっては約45度の法面を設定したため、実際の調査面の寸法は東西約8.0m×南北約21.0m、面積約168

㎡となっている。また北西部、及び中央部には既設建物等による大規模な撹乱が見られた。

調査は、現地表下約1.4mまでを機械掘削とし、以下約0.25mを人力掘削により実施した。またその後、調査区内に東西約2.0m×南北約18.0mのトレンチを設定し、機械・人力掘削併用により下層確認調査を実施した。

調査では、調査地南東部に位置する八尾市街区補助点(3D072：T.P.+10.214m)を標高の基準とした。平面実測では調査区中心に設定した南北ラインを基準とした。

なお中学校の校舎改築に伴う調査ということから、社会科の授業の一環として、二年生の一クラスを対象とした現地説明会を、平成25年２月８日に開催した。

２）基本層序

０層は盛土・撹乱である。前述のように大規模な撹乱が存在するため壁面の遺存状況も悪く、北壁中央、東壁中央、南壁、西壁の中央～北部の大部分は観察が不可能であった。１層は旧耕土である。２・３層も撹拌された作土で、時期は近世と考えられる。4A層・4B層は水成層で、洪水砂と考えられる。５～７層は撹拌された作土である。概ね５・６層が中世、７層が古代～中世に比定されよう。８層以下は水成層で、湧水の激しい河川堆積である。下層確認調査によるとT.P.+7.7m以下まで及んでいる。

３）検出遺構と出土遺物

８層上面(T.P.+8.5～8.6m)で、土坑２基(ＳＫ１・２)、溝５条(ＳＤ１～５)、落ち込み１基(ＳＯ１)を検出した。

ＳＫ１

北西角部で検出した土坑で、北は調査区外に続き、西は撹乱により削平されている。やや弧状をなす肩から西に落ち込むもので、検出部分の規模は南北約3.0m・東西約2.1m・深さ約50cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土はブロック状の２層からなる。井戸の可能性があるが詳細は不明である。遺物は出土していない。

ＳＫ２

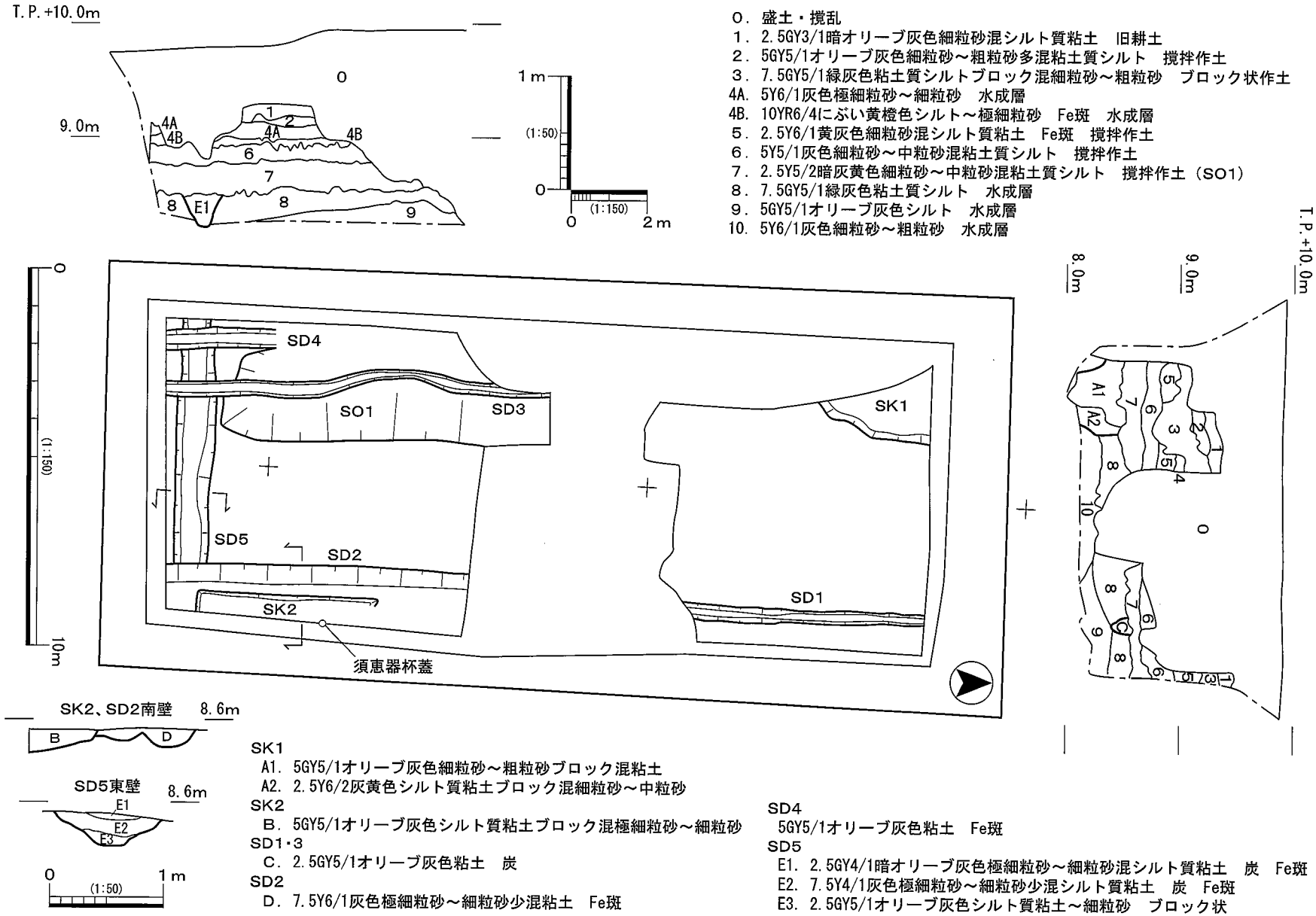
南東部で検出した土坑で、東は調査区外に続き詳細は不明である。ＳＤ２を切っている。検出部分の平面形は南北主軸の長方形を呈し、西辺は長さ約4.7m、東西幅は60cm以上で、深さ約20cmを測る。埋土はブロック状の単層である。遺物は６世紀後半に比定される須恵器杯蓋(１)の他、土師器片が少量出土した。１はほぼ完形で、口径14.4cm・器高4.4cmを測る。

ＳＤ１

北東部で検出した南北方向に直線的に延びる溝である。規模は検出長約6.5m・幅25～40cm・深さ約20cmを測る。断面逆台形で、埋土は炭を含む単層である。遺物は出土していない。耕作関連溝の可能性が高い。

ＳＤ２

南東部で検出した南北方向に直線的に延びる溝で、西肩を検出した。規模は検出長約8.0m・幅1.6m以上・深さ約17cmを測る。底面には起伏が見られ、埋土は単層である。遺物は出土していない。ＳＤ１に連続する可能性もある。



0．盛土・撹乱
1．2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂混シルト質粘土　旧耕土
2．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト　撹拌作土
3．7.5GY5/1緑灰色粘土質シルトブロック混細粒砂～粗粒砂　ブロック状作土
4A．5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂　水成層
4B．10YR6/4にぶい黄橙色シルト～極細粒砂　Fe斑　水成層
5．2.5Y6/1黄灰色細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
6．5Y5/1灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
7．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　撹拌作土（SO1）
8．7.5GY5/1緑灰色粘土質シルト　水成層
9．5GY5/1オリーブ灰色シルト　水成層
10．5Y6/1灰色細粒砂～粗粒砂　水成層

SK1
A1．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂ブロック混粘土
A2．2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土ブロック混細粒砂～中粒砂
SK2
B．5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混極細粒砂～細粒砂
SD1・3
C．2.5GY5/1オリーブ灰色粘土　炭
SD2
D．7.5Y6/1灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土　Fe斑

SD4
5GY5/1オリーブ灰色粘土　Fe斑
SD5
E1．2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　炭　Fe斑
E2．7.5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂少混シルト質粘土　炭　Fe斑
E3．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土～細粒砂　ブロック状

第４図　第46次調査平断面図

ＳＤ３・ＳＯ１

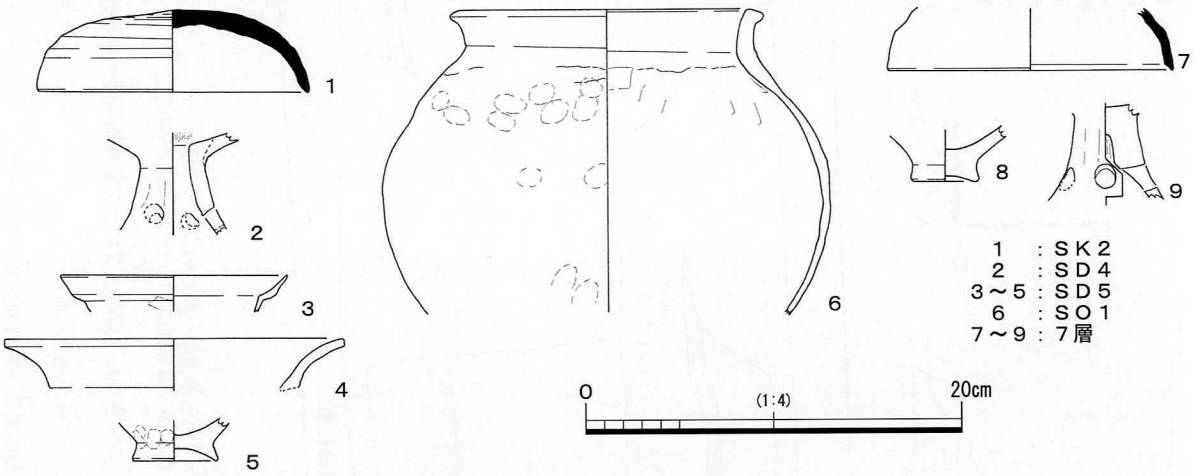
ＳＤ３は南西部で検出した南北方向に延びる溝で、やや蛇行している。規模は検出長約10.1m・幅20～45cm・深さ約20cmを測る。断面逆台形で、埋土はＳＤ１と同じである。下位からの巻き上げと考えられる古墳時代初頭頃の土師器片が少量出土した。ＳＯ１は南西部で検出した浅い落ち込みである。底部でＳＤ３が検出されたもので、埋土にも変化はなく両者は一連の遺構と捉えられる。平安時代後期の土師器、須恵器、瓦器が出土しており、６を図化した。６は土師器甕で、口径16.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部ナデで、体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。外面は全体に煤けており使用品である。

ＳＤ４

ＳＤ３西側に平行して延びる溝で、規模は検出長約2.9m・幅約50cm・深さ約20cmを測る。断面逆台形で、埋土は単層である。下位からの巻き上げと考えられる弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器片が少量出土しており、２を図化した。２は器台の基部と考えられる。調整はヘラミガキで、脚部には四方孔を施す。弥生時代後期末頃に比定されよう。

ＳＤ５

南部で検出した東西方向に直線的に延びる溝で、ＳＤ２～４に切られる。規模は検出長約6.5m・



第５図　第46次調査出土遺物

幅0.8～1.1cm・深さ30～50cmを測る。断面逆台形で、埋土は３層を確認した。上部の２層は炭を含み、下層はブロック状を呈する。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期（布留式期）の土器片が少量出土しており３～５を図化した。３は小形有段鉢の小片で、口径12.0cmを測る。古墳時代前期初頭（布留式期古相）に比定される。４は複合口縁壺の口縁部、５は小形鉢の底部と考えられ、弥生時代後期～古墳時代初頭に比定されよう。

７層出土遺物

７～９を図化した。７は須恵器杯蓋で、６世紀中頃に比定される。８は壺、あるいは鉢の底部である。９は高杯で、脚柱部には四方孔を施す。８・９は弥生時代後期に比定される。

４）まとめ

今回の調査では弥生時代後期～中世の遺構・遺物を検出した。遺物量はコンテナ１箱を数える。

弥生時代後期～古墳時代前期（布留式期）では溝ＳＤ５を検出した。北部の第28次調査や南部の中田遺跡第36次調査では弥生時代後期の方形周溝墓や土器棺墓からなる墓域を確認していることから、墓域に関連する溝である可能性がある。

古墳時代後期では土坑ＳＫ２から完形の須恵器杯蓋が出土した。該期の遺構は他には見られず、また地層中の該期の遺物も極少量であることから、居住域に伴う遺構とは言い難い状況であり、墳墓や祭祀に関連する遺構の可能性もあろう。南部の中田遺跡第31次調査では、土坑から完形の須恵器提瓶が出土しているが、同様の遺構である可能性があり注目される。

古代以降は耕作関連溝や耕作土を検出し、生産域となっていることを確認した。

参考文献

・河村恵理2008「Ⅰ　小阪合遺跡第28次調査（ＫＳ94－28）」『小阪合遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告116』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2000「Ⅷ　中田遺跡第36次調査（ＮＴ97－36）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一・木村健明2009「Ⅰ　小阪合遺跡第42次調査（ＫＳ2007－42）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告126』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則1996「Ⅵ　中田遺跡第31次調査（ＮＴ95－31）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告54』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1　第45次調査

1区上層調査（北から）

1区下層調査（北から）

1区機械掘削状況（東から）

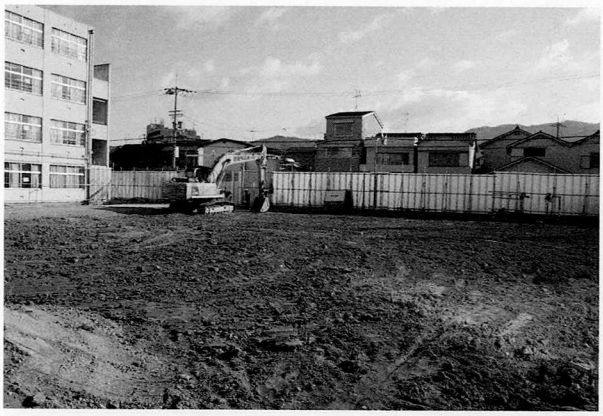
1区北壁（南から）

2区全景（東から）

2区機械掘削状況（東から）

1区調査前（南西から）

2区調査前（東から）



調査地（西から）

機械掘削（北から）

全景（北から）

南部全景（北西から）

ＳＫ１検出（南から）

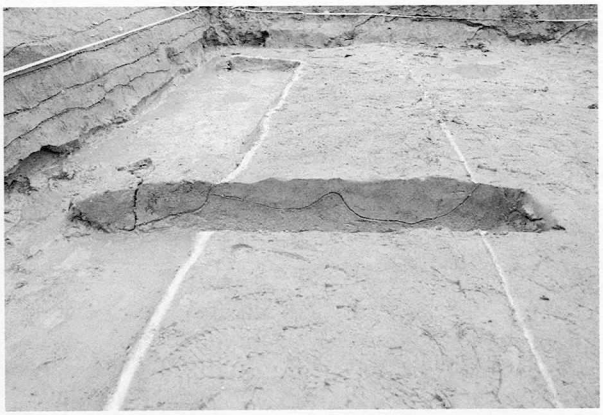
ＳＫ１北壁

ＳＫ２検出（東から）

ＳＫ２全景（北東から）

図版3　第46次調査

ＳＫ２遺物出土状況（北から）


ＳＫ２、ＳＤ２南壁

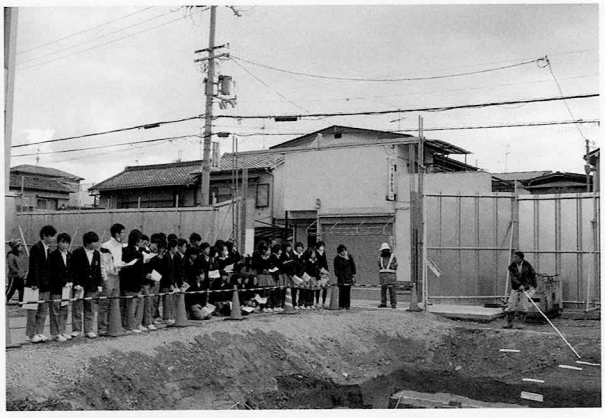
ＳＤ３・４南壁

ＳＤ５東壁

下層確認トレンチ機械掘削（北西から）

下層確認トレンチ（北から）

調査状況（北から）


現地説明会風景（西から）

Ⅶ　成法寺遺跡第26次調査(ＳＨ2013－26)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市光南町１丁目37で実施した水道庁舎機能更新(耐震化等)に伴う遺構確認調査報告書である。

1．本書で報告する成法寺遺跡第26次調査(ＳＨ2013－26)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成25年５月７日～５月８日(外業実働２日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約17㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・伊藤静江の参加を得た。

1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……35
2．調査概要……36
　1）調査の方法と経過……36
　2）基本層序……37
　3）検出遺構と出土遺物……37
3．まとめ……37

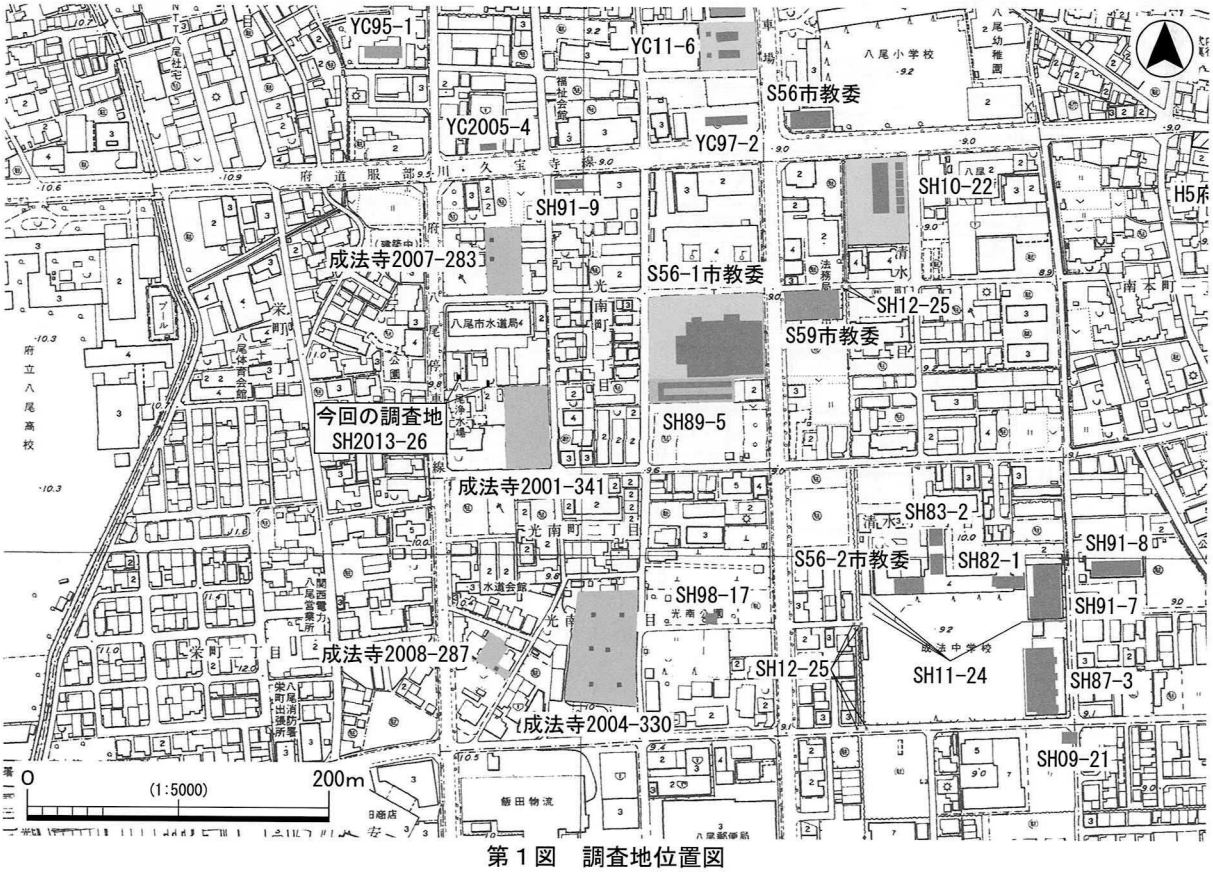
Ⅶ　成法寺遺跡第26次調査（ＳＨ2013－26）

１．はじめに

成法寺遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では光南町１・２丁目、清水町１・２丁目、南本町１～４丁目、高美町１・２丁目、松山町１丁目、明美町１丁目、陽光園１丁目がその範囲とされ、東西約1.1km・南北約0.6kmに広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。周辺では北側で東郷遺跡・八尾寺内町、東側で小阪合遺跡、南側で矢作遺跡・龍華寺跡に隣接し、西側には長瀬川が北流している。

当遺跡は昭和56年５月、八尾市教育委員会が光南町１丁目29番で実施した試掘調査により確認された遺跡で、以降大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期からの遺跡であることが知られている。

今回の調査地は遺跡範囲北西部にあたり、周辺では東部でS56-1市教委調査、第５次調査(SH89-5)、南東部で第17次調査(SH98-17)、北東部では第９次調査(SH91-9)の他、八尾寺内町第４次調査(YC2005-4)を、また北部・南部では小規模な遺構確認調査を実施している。主な成果としてS56-1市教委調査、第５・９次調査、八尾寺内町第４次調査では弥生時代後期～古墳時代後期の集落遺構が検出されており、古墳時代前期では方形周溝墓群や埴輪円筒棺からなる墓域が確認されている。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

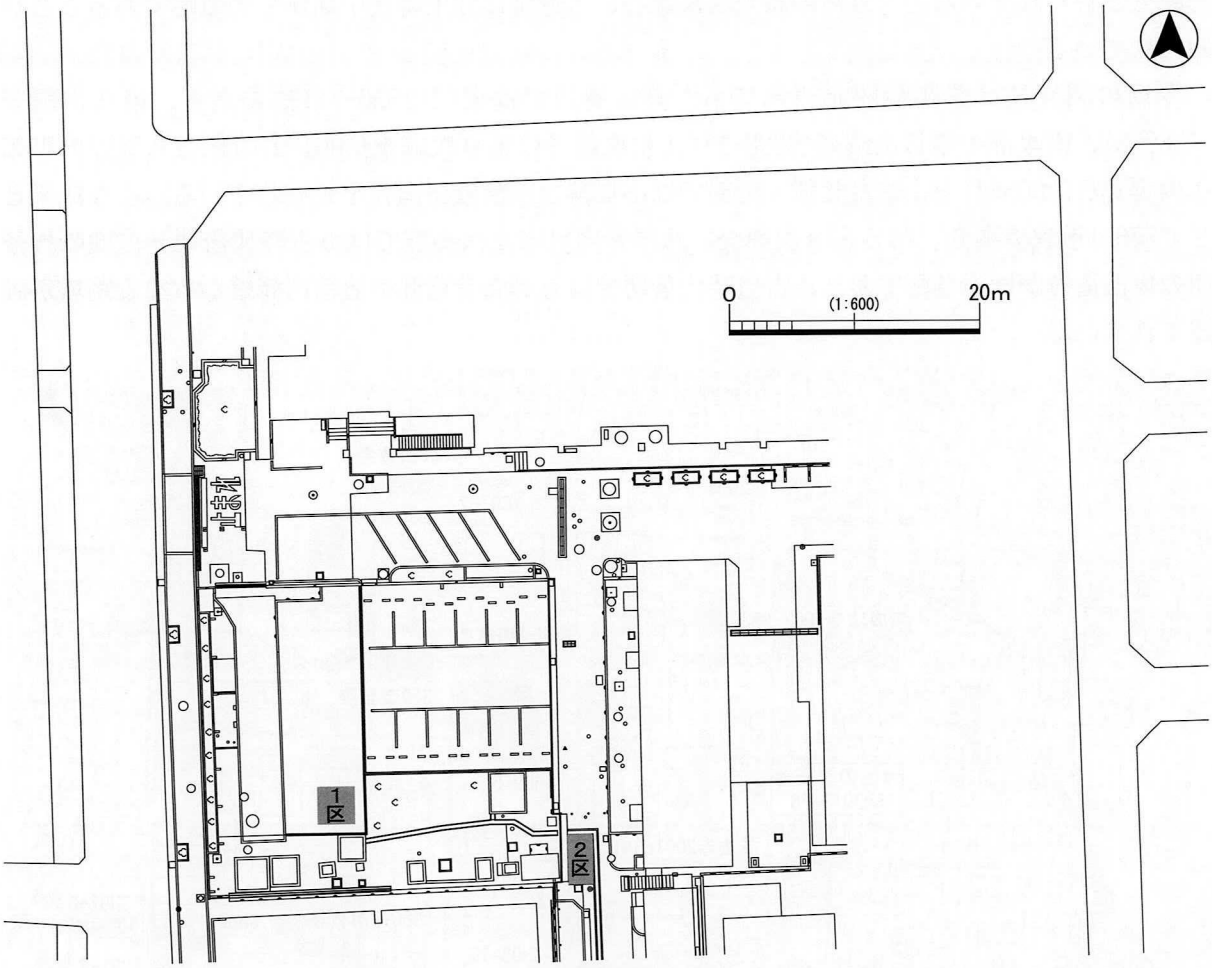
1）調査の方法と経過

今回の調査は水道庁舎機能更新(耐震化等)に伴う遺構確認調査で、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第26次調査(ＳＨ2013－26)である。

調査区は２箇所(西から１・２区)で、平面形は１区が約3.0m×3.0mの正方形、２区が東西約2.0m×南北4.0mの長方形を呈し、総面積は約17㎡を測る。

調査は現地表(約T.P.+10.0～10.2m)下約3.0mまでについて機械・人力掘削を併用して実施した。なお両調査区ともに既設構造物の基礎や配管等に当っていたため、１区では調査区東端の幅約0.9mについて、２区ではほぼ北半分についてのみ掘削が可能であった。

標高の基準は、西側道路上の八尾市街区補助点(3C321：T.P.+9.341m)を使用した。



第２図　調査区位置図

２）基本層序

１区

０層は盛土・撹乱。ア層は既設構造物の基礎コンクリート、グリ石である。１～３層は粘土～粗粒砂の互層状を呈する水成層で、河川堆積である。

２区

０層は盛土・撹乱。１層は静水性の水成層である。２層は極細粒砂～細粒砂の互層状を呈する水成層で、河川堆積である。

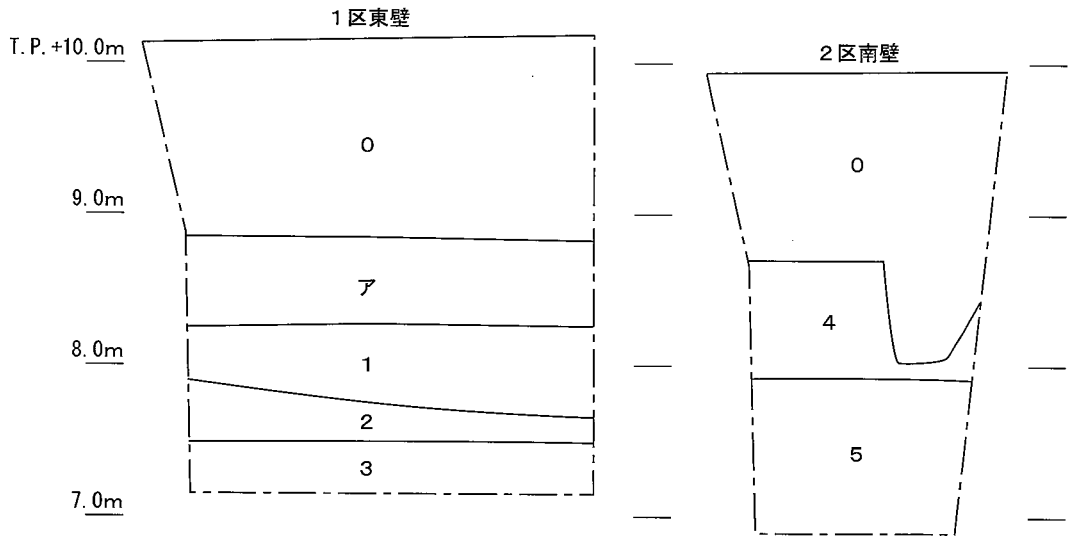
３）検出遺構と出土遺物

両調査区から遺構・遺物は検出されなかった。

３．まとめ

今回の調査では、撹乱等により上層部に本来の地層が遺存しておらず、下部で河川堆積を確認するにとどまった。遺構・遺物も認められず、時期等も不明である。

本調査地を含む遺跡範囲西部においては、これまでに数件の遺構確認調査（成法寺2001-341、2004-330、2007-283、2008-287等）が行われているが、いずれの調査も中世～近世の耕作土やそれ以下の河川堆積を確認するにとどまっている。調査範囲が限られており、深部にまで調査が及んでいないことも考慮する必要があるが、遺跡範囲西部は基本的に西方を北流する長瀬川の影響下にあるものと考えられよう。



０．アスファルト・盛土・撹乱
ア．旧施設の基礎
１．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂　水成層
２．2.5Y7/3浅黄色粘土～粗粒砂互層　水成層
３．7.5YR5/3にぶい褐色細粒砂～粗粒砂互層　水成層
４．5Y5/1灰色シルト質粘土～極細粒砂互層　水成層
５．2.5GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂互層　水成層

第３図　断面図

参考文献

・高萩千秋・他1983『成法寺遺跡　－八尾市光南町１丁目29番地の調査－』八尾市教育委員会
・坪田真一1992「Ⅰ　成法寺遺跡（ＳＨ89－５）」『平成４年度　八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）　財団法人八尾市文化財調査研究会報告35』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助1993「ＸⅣ　成法寺遺跡第９次調査（ＳＨ91－９）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2000「Ⅸ　成法寺遺跡第17次調査（ＳＨ98－17）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会
・荒川和哉2007「Ⅳ　八尾寺内町遺跡第４次調査（ＹＣ2005－４）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告97』財団法人八尾市文化財調査研究会
・八尾市教育委員会2002『八尾市内遺跡平成13年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告46　平成13年度国庫補助事業』
・八尾市教育委員会2006『八尾市内遺跡平成17年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告53　平成17年度国庫補助事業』
・八尾市教育委員会2008『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業』
・八尾市教育委員会2009『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告59　平成20年度国庫補助事業』

調査地（北西から）

１区機械掘削（西から）

１区全景（北東から）

１区東壁

１区南壁

２区機械掘削（南東から）

２区全景（北西から）

２区東壁・南壁

Ⅷ　高安古墳群第７次調査（Ｔ2011－７）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市大字服部川地内で実施した、市道高安第30号線道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

1．本書で報告する高安古墳群第７次調査（T2011－７）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、八尾市と財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお本調査地は、現在の八尾市埋蔵文化財分布図（平成24年度版）では高安千塚古墳群の範囲に含まれる。

1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。

1．現地調査は、平成23年10月７日～11月16日（現場実働８日）に実施した。調査面積は約167㎡である。

1．現地調査には飯塚直世・伊藤静江・梶本潤二・北原清子・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子・村井俊子・村田知子・山内千恵子が参加した。

1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

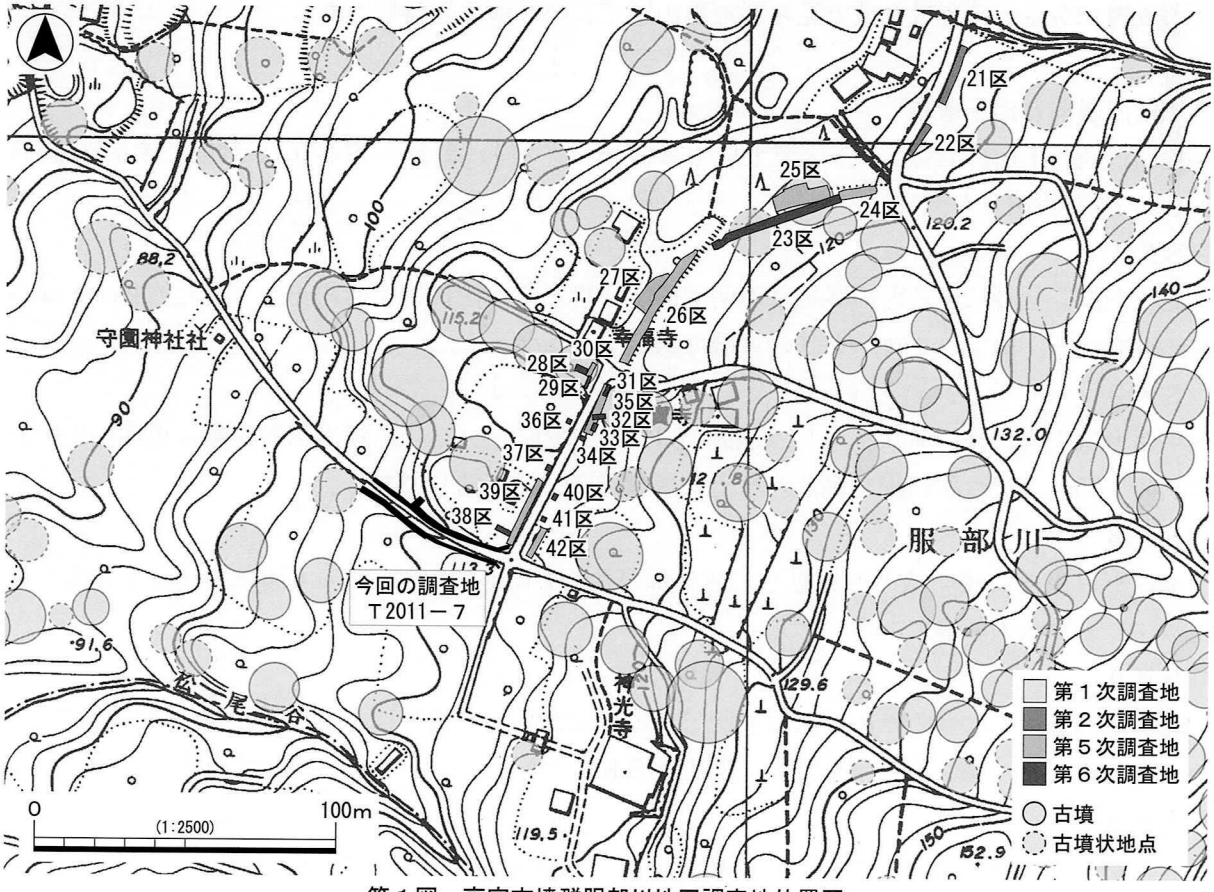
1．はじめに……41
2．調査概要……42
　1）調査の方法と経過……42
　2）基本層序と出土遺物……42
　3）検出遺構と出土遺物……42
3．まとめ……46

Ⅷ　高安古墳群第７次調査（Ｔ2011－７）

１．はじめに

八尾市の東部、生駒山地西麓一帯は、丘陵地や小規模な扇状地が複雑に融合した地形を呈しており、扇状地先端部から沖積地にかけては縄文・弥生時代からの遺跡(大竹西・水越・郡川・恩智遺跡等)が展開している。また古墳時代では前期～終末期の古墳が確認されており、これらは総称して高安古墳群と呼ばれている。なかでも古墳時代中期後半～終末期には、横穴式石室を主体部に持つ小円墳が尾根上に連なって群集墳を形成しており、総数323基が確認されている(平成24年３月現在)。そしてこのうち特に高い密度で古墳が分布する範囲については、新たに『高安千塚古墳群』とすることとなった(平成24年度以降)。高安千塚古墳群は総数224基の古墳からなり、北から大窪・山畑支群、服部川支群、郡川北支群、郡川南支群に分かれている。今回の調査地は高安千塚古墳群の中でも最も古墳の密度の高い服部川支群内に含まれている。

高安古墳群では平成16～18年度に農道整備事業に伴い、北部の神立地区380m、南部の大窪・山畑・服部川地区420m、総延長800mに亘る調査(第１・２・５・６次)を実施している。調査では新たに神立８号墳(芝塚２号墳)、大窪・山畑29号墳、同46号墳、服部川132号墳の４基の古墳が発見されたほか、服部川12号墳の墳丘裾部では高安古墳群内で初めて外護列石の可能性がある巨石列が確認された。



第１図　高安古墳群服部川地区調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、市道高安第30号線道路整備工事に伴う調査で、当研究会が高安古墳群内で行った第７次調査（Ｔ2011－７）である。

調査地は前述の農道整備事業に伴う調査地の南端から西に下る道路両側の擁壁・側溝部分にあたる。調査対象は、現況道路面以下の擁壁基礎部分・側溝部分、及び擁壁部分については既存の石垣等の法面拡幅部分である。

調査区の設定は工事工程に合わせて全体を５分割（北西から１～５区）し、４・５・２・１・３区の順に調査を実施した。各調査区は幅1.0～2.5mで、総延長約109mを測り、総面積は約167㎡を測る。

調査にあたっては工事掘削深度までについて機械・人力掘削により調査を行い、断面については北・南の法面を対象とした。

調査で使用した標高の基準は、工事図面記載の調査地東部のKBM.2：T.P.+112.336mである。

２）基本層序と出土遺物

１層は表土で、主に締りの悪いいわゆる腐植土である。２・３層は１区で見られた。３層は地山、２層はその土壌化部分（風化部分）と考えられ締りが悪い。４・５層は２・３・５区で見られた砂層基調の水成層である。６・７層は５区で見られた。６層は土壌化層の可能性がある。７層は水成層である。８層は全域で見られた地山層で、いわゆる岩盤層である。

３）検出遺構と出土遺物

地山（８層）上面において、１区で土坑４基（ＳＫ１～４）、溝１条（ＳＤ１）、３区で土坑３基（ＳＫ５～７）を検出した。

ＳＫ１

北側が調査区外に至るため詳細は不明である。検出部の法量は東西約85cm・南北約40cm・深さ約30cmを測る。埋土はブロック状の単層である。

ＳＫ２

平面形は東西に長い溝状を呈し、東部はＳＫ３に削平されている。検出部の法量は東西約2.0m・南北40～70cm・深さ約17cmを測る。埋土は基本層序２層と同じである。

ＳＫ３

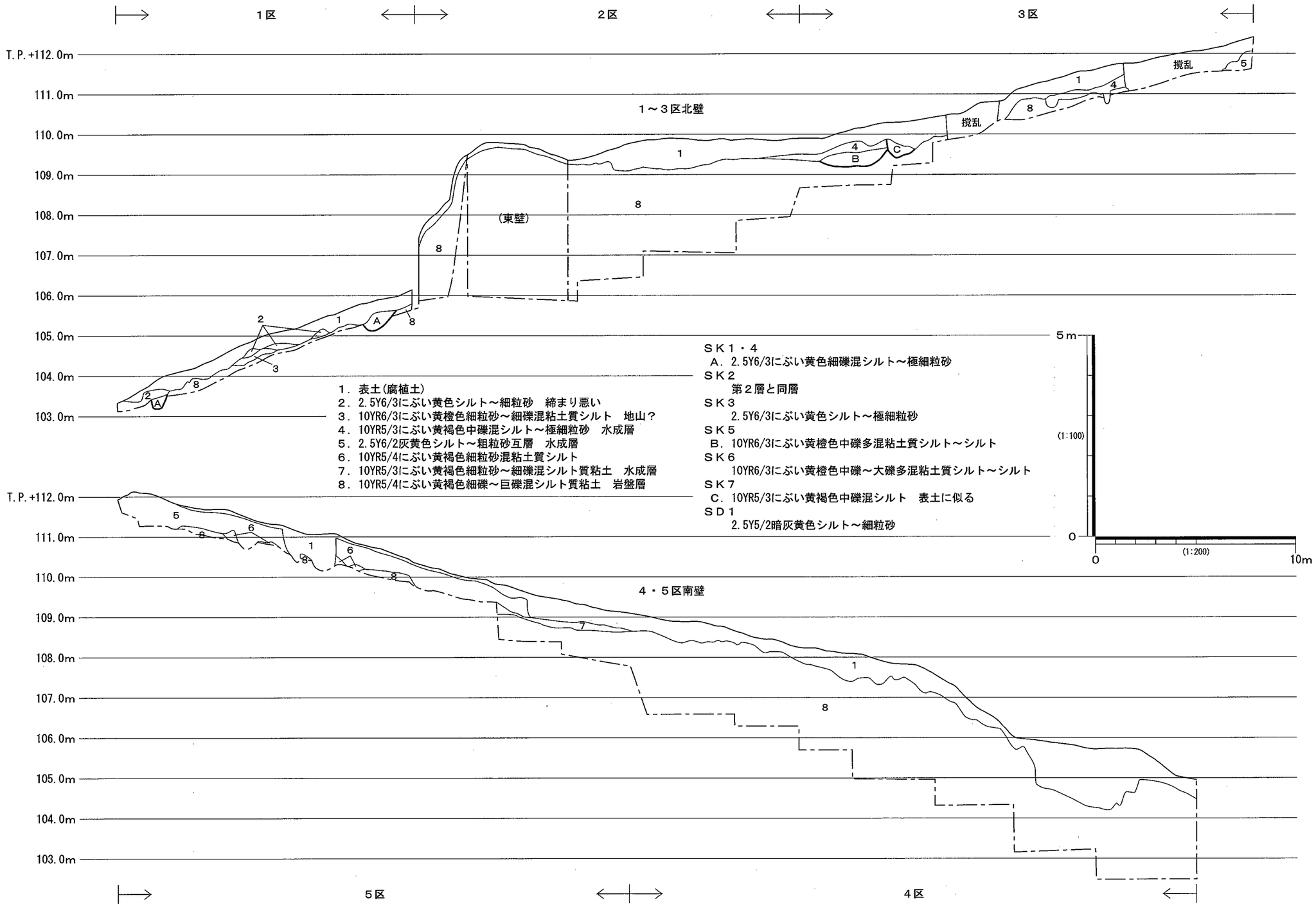
平面形は東西に長い楕円形を呈し、法量は東西約1.0m・南北約75cm・深さ約15cmを測る。埋土はブロック状の単層である。

ＳＫ４

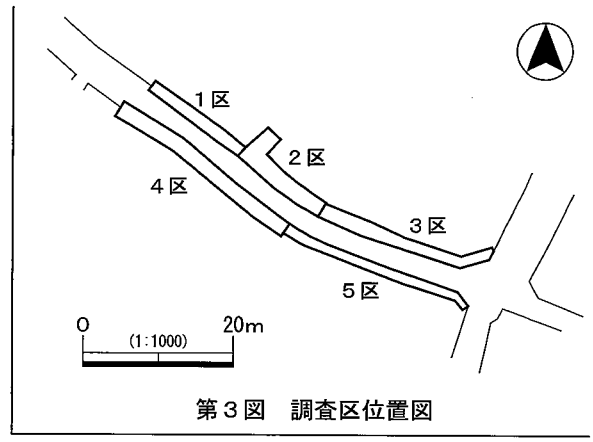
北側が調査区外に至るため詳細は不明である。検出部の平面形は方形に近く、法量は東西約1.5m・南北約85cm・深さ約40cmを測る。埋土はＳＫ１と同じブロック状の単層である。

ＳＫ５

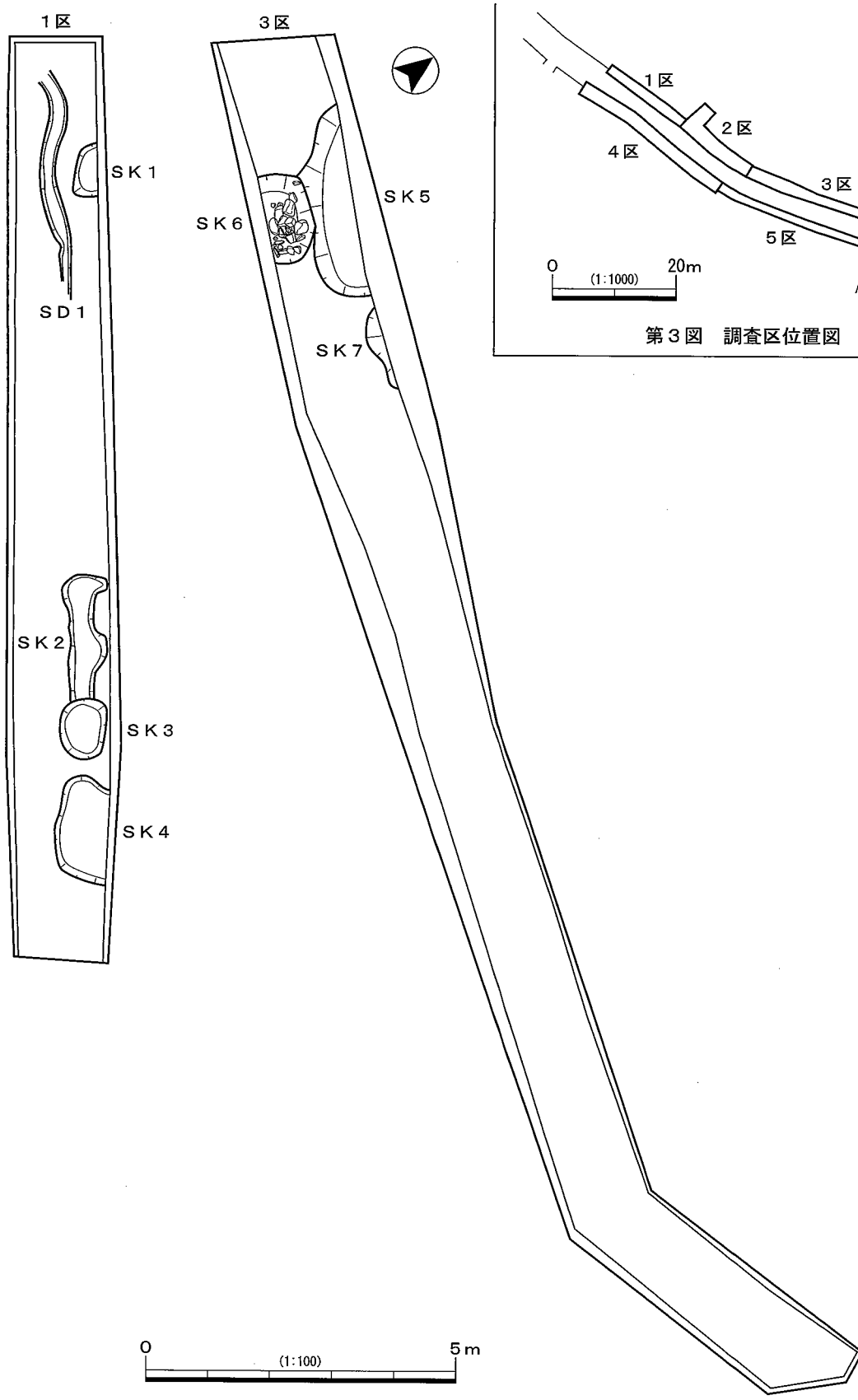
北側が調査区外に至るため詳細は不明である。検出部の法量は東西約3.2m・南北約85cm・深さ約40cmを測る。埋土は中礫を多く含むブロック状の単層である。


１区
２区
３区
T.P.+112.0m
111.0m
110.0m
109.0m
108.0m
107.0m
106.0m
105.0m
104.0m
103.0m
１～３区北壁
（東壁）
撹乱
撹乱
１．表土（腐植土）
２．2.5Y6/3にぶい黄色シルト～細粒砂　締まり悪い
３．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～細礫混粘土質シルト　地山？
４．10YR5/3にぶい黄褐色中礫混シルト～極細粒砂　水成層
５．2.5Y6/2灰黄色シルト～粗粒砂互層　水成層
６．10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂混粘土質シルト
７．10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～細礫混シルト質粘土　水成層
８．10YR5/4にぶい黄褐色細礫～巨礫混シルト質粘土　岩盤層
ＳＫ１・４
Ａ．2.5Y6/3にぶい黄色細礫混シルト～極細粒砂
ＳＫ２
第２層と同層
ＳＫ３
2.5Y6/3にぶい黄色シルト～極細粒砂
ＳＫ５
Ｂ．10YR6/3にぶい黄橙色中礫多混粘土質シルト～シルト
ＳＫ６
10YR6/3にぶい黄橙色中礫～大礫多混粘土質シルト～シルト
ＳＫ７
Ｃ．10YR5/3にぶい黄褐色中礫混シルト　表土に似る
ＳＤ１
2.5Y5/2暗灰黄色シルト～細粒砂
５ｍ
(1:100)
0
0
(1:200)
10m
４・５区南壁
５区
４区

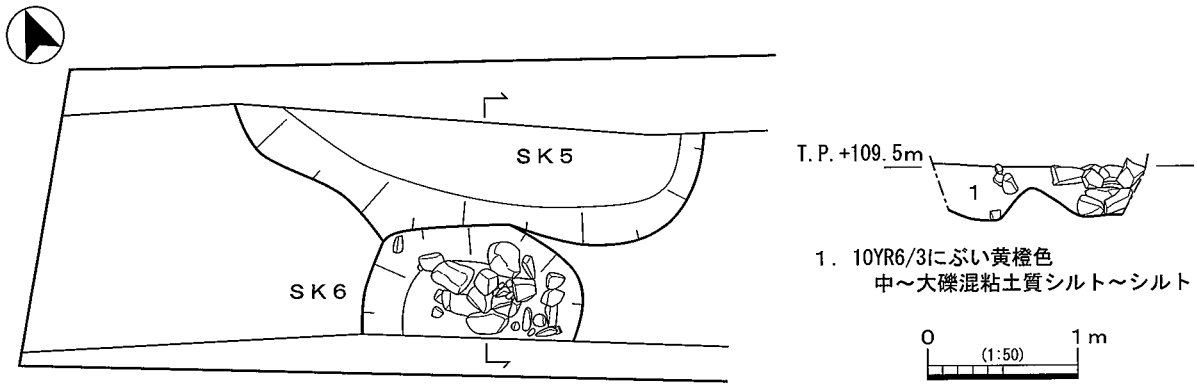
第２図　断面図



第３図　調査区位置図



第４図　平面図



第５図　ＳＫ５・６平断面図

ＳＫ６

南側が調査区外に至るため詳細は不明である。検出部の法量は東西約1.5m・南北約80cm・深さ約35cmを測る。埋土は中礫～巨礫を密に含むブロック状の単層である。須恵器甕の体部片が１点出土した。

ＳＫ７

北側が調査区外に至るため詳細は不明である。検出部の法量は東西約1.3m・南北約40cm・深さ約25cmを測る。埋土は基本層序１層に類似するものである。

ＳＤ１

１区西部で検出した調査区に沿って延びるやや蛇行する溝で、検出長約3.7m・幅約30cm・深さ約18cmを測る。埋土は水成層の単層である。

３．まとめ

今回の調査地は高安千塚古墳群の中で最も古墳が密集する服部川支群に位置しており、北・南に近接する尾根上には古墳が連なって造営されている。現況の地形では２区北側は道路面及び西の１区と約３ｍの比高差があり、高まりが認められることから、古墳の存在も想定されたが、薄い表土直下が地山(岩盤層)となっていた。

北側の１・３区では地山面で時期不明の土坑を検出した。周辺には後期古墳が分布していることや、ＳＫ６から須恵器片が出土したことから、これらが石室石材の抜き取り痕の可能性もあるが、明確にはできなかった。

参考文献

・吉田野乃・他2012『高安千塚古墳群　基礎調査総括報告書　八尾市文化財調査報告68』八尾市教育委員会
・成海佳子2009『高安古墳群　薗光寺跡発掘調査報告書 －府営農林漁業揮発油税財源身替農道整備事業(八尾地区)に伴う発掘調査－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告124』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地（西から）

調査地（東から）

１区機械掘削（西から）

１区調査状況（西から）

１区（東から）

１区ＳＫ２（南から）

１区ＳＫ３（西から）

１区北壁

図版2

2区西半（南から）

2区東半（西から）

2区西半東壁

2区東半北壁

2区東半北壁

3区機械掘削（西から）

3区西半（西から）

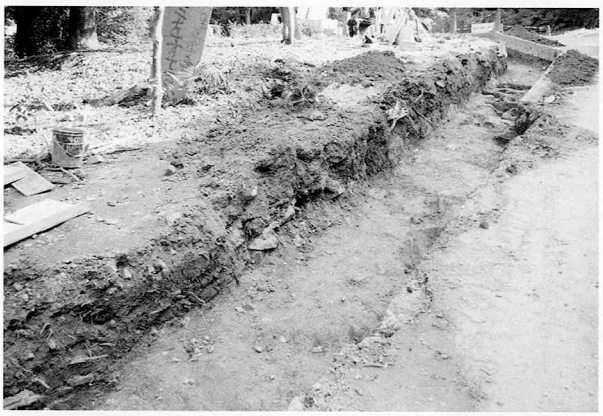
3区ＳＫ205・206検出（西から）

３区ＳＫ205・206（南東から）

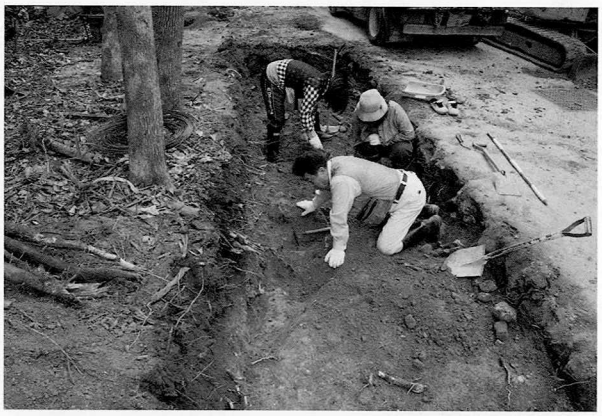
３区ＳＫ205（南から）

３区ＳＫ205・206完掘（東から）

３区ＳＫ207（南から）



３区東半（西から）



３区掘削状況（西から）

４区機械掘削（北西から）

４区西半南壁

図版4

4区中央南壁

4区中央南壁

4区調査状況（北西から）

5区東半南壁

5区（東から）

5区（西から）

5区東部（北東から）

5区西半南壁

IX　美園遺跡第９次調査(ＭＳ2012－９)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市美園町２丁目(美園小学校)地内で実施した耐震性緊急貯水槽設置工事(その２)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する美園遺跡第９次調査(ＭＳ2012－９)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、八尾市と公益財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成24年11月16日～12月５日(外業実働10日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約98.6㎡である。

1．現地調査には伊藤静江・芝﨑和美・竹田貴子・村井俊子・村田知子が参加した。

1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……51

2．調査概要……52

　1）調査の方法と経過……52

　2）基本層序と出土遺物……53

　3）検出遺構と出土遺物……53

3．まとめ……57

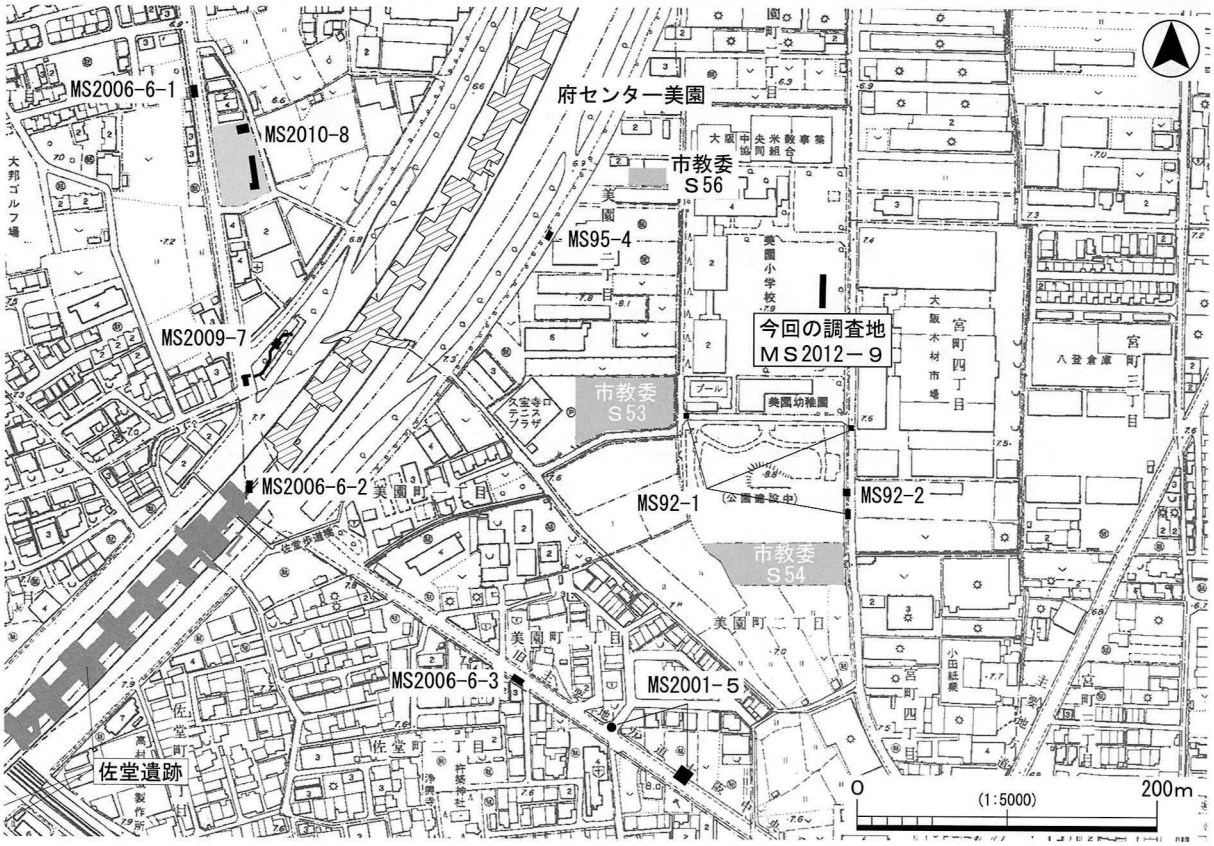
Ⅸ　美園遺跡第９次調査(ＭＳ2012－９)

１．はじめに

美園遺跡は八尾市北西部に位置し、現在の行政区画では美園町１～４丁目がその範囲とされており、遺跡範囲は南北約600m・東西約500mに及んでいる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、北側には友井東遺跡、南側には佐堂遺跡・宮町遺跡が隣接している。

当遺跡は、昭和50(1975)年に大阪府教育委員会が府道大阪中央環状線敷地内で実施した河内ラインガス導管布設に伴う発掘調査で発見された遺跡である。昭和53(1978)・54(1979)年度には八尾市教育委員会による最初の発掘調査が美園町２丁目において実施され(市教委S53・S54。当時は佐堂遺跡として調査)、古墳時代初頭～前期の壺棺や遺物包含層、古代～中世の遺物包含層等が確認された。そして昭和55(1980)～58(1983)年度には、近畿自動車道建設に伴う発掘調査が(財)大阪文化財センターにより実施され、縄文時代後期～近世の遺構・遺物が検出されている。なかでも古墳時代前期の方墳である美園古墳の検出は特筆され、検出状態のまま地中に保存されることとなり、周濠内出土の家形埴輪・壺形埴輪は重要文化財指定を受けている。

今回の調査地周辺では、前述の市教委調査や市教委S56の他、下水道工事に伴い当調査研究会が第１・２・４次調査(MS92-1・92-2・95-4)を実施している。これらの調査では弥生時代後期～古墳時代の遺構・遺物、平安時代の水田等が検出されている。



第１図　調査地位置図

表1　美園遺跡発掘調査一覧表

調査名	文献	主な時代・遺構・遺物
府センター美園	渡辺昌宏・他1985『美園　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人大阪文化財センター	縄文時代～近世。美園古墳。家形埴輪。
府1999	泉本知秀1999『美園遺跡　大阪府埋蔵文化財調査報告1998－4』大阪府教育委員会	弥生時代前期～中期。竪穴住居等。
東大阪第1次	池崎智詞2001『共同住宅建設工事に伴う　美園遺跡第1次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会	奈良時代～鎌倉時代。土壙・溝等。墨書土器。
市教委S53	米田敏幸1981「6. 佐堂遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報　八尾市文化財調査報告7』八尾市教育委員会　※当時は佐堂遺跡として調査	弥生時代終末期～古墳時代前期。遺物包含層。
市教委S54	米田敏幸1981「5. 佐堂遺跡」『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報　八尾市文化財調査報告7』八尾市教育委員会　※当時は佐堂遺跡として調査	古墳時代。壺棺。
市教委S56	米田敏幸1983「第5章　美園遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度（財)八尾市文化財調査研究会報告2』財団法人八尾市文化財調査研究会	古墳時代初頭～前期。建物・井戸・溝。
美園第1次 MS1992-1	成海佳子1993「X　美園遺跡第1次調査(MS92－1)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会	弥生時代終末期～古墳時代前期。土坑・溝・柱穴等。
美園第2次 MS1992-2	岡田清一1993「XI　美園遺跡第2次調査(MS92－2)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会	古墳時代後期の溝。平安時代の水田
美園第3次 MS1994-3	高萩千秋1996「VI　美園遺跡第3次調査(MS94－3)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告50』財団法人八尾市文化財調査研究会	平安時代末の水田。
美園第4次 MS1995-4	西村公助1996「XIV　美園遺跡第4次調査(MS95－4)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』財団法人八尾市文化財調査研究会	弥生時代～古墳時代前期の落ち込み。
美園第5次 MS2001-5	高萩千秋2003「XVII　美園遺跡第5次調査(MS2001－5)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』財団法人八尾市文化財調査研究会	古墳時代以前の河川堆積。
美園第6次 MS2006-6	坪田真一・他2008「第2節　美園遺跡第6次調査(MS2006－6)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告115』財団法人八尾市文化財調査研究会	河川堆積。
美園第7次 MS2009-7	坪田真一2012　「II　美園遺跡第７次調査（ＭＳ2009－７）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告139』財団法人八尾市文化財調査研究会	中世。井戸・土坑等。
美園第8次 MS2010-8	高萩千秋2012「III　美園遺跡第8次調査(MS2010－8)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告137』財団法人八尾市文化財調査研究会	中世。井戸・土坑等。

2．調査概要

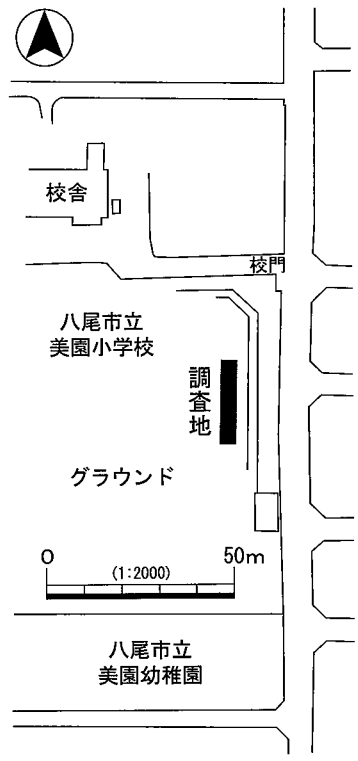
1）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市立美園小学校のグラウンド内で実施される耐震性緊急貯水槽設置工事に伴う発掘調査で、当調査研究会が美園遺跡内で行った第９次調査（ＭＳ2012－９）である。

調査地平面形は東西約4.4m×南北約22.4mの長方形を呈し、面積は約98.6㎡を測る。

調査は、現地表下約1.8mまでを機械掘削とし、ここまでは北部・南部において地層の確認を実施した。以下約1.5mについては北・東・南に地層観察用の壁を残しながら、人力・機械掘削併用により調査を実施した。また工事掘削深度である以下の約1.2mについては、調査区内の３箇所に機械掘削による下層確認トレンチ（北から１～３）を設定し、地層の確認を実施した。

調査で使用した標高の基準は、調査地北東部の校門付近に位置する四級基準点相当の八尾市街区補助点〈3B229：T.P.+6.507m〉である。



第２図　調査区位置図

２）基本層序と出土遺物

東壁断面により基本層序(０～32層)を設定した。このうち０～５層については、機械掘削の際に調査区北端・南端で確認した。また20層以下は北端・中央・南端に設定した下層確認トレンチでの確認である。

０層はグラウンド造成時の盛土、１層は旧耕土である。２～５層は撹拌された作土である。６層は水成層である。７・８層はブロック状、９層は撹拌された作土で、９層上面が第１面である。10・11層の粘土は湿地性の水成層である。10層からは古墳時代後期頃の土師器・須恵器の小片が極少量出土した。12層は土壌化層で、作土の可能性がある。南部で古墳時代初頭頃の土師器片が少量出土した。13層は水成層と考えられる。14層は水成層で、第２面検出の自然河川(ＮＲ201)の堆積土である。東部の河川から供給された洪水砂とも捉えられる。15～18層の粘土～シルトは湿地性の水成層である。19層は水成層で、第３面検出の自然河川(ＮＲ301)の堆積土である。20層の粘土は湿地性の水成層である。21層の極細粒砂～細粒砂は洪水砂と考えられる。22～25層は湿地性の水成層で、25層上部は暗色を呈し土壌化していると考えられる。26層のシルト～細粒砂互層は洪水砂と考えられる。27～29層は湿地性の水成層である。30層の粘土は暗色を呈し、土壌化している可能性がある。31層は湿地性の水成層である。

３）検出遺構と出土遺物

〈第１面〉（T.P.+4.7m）

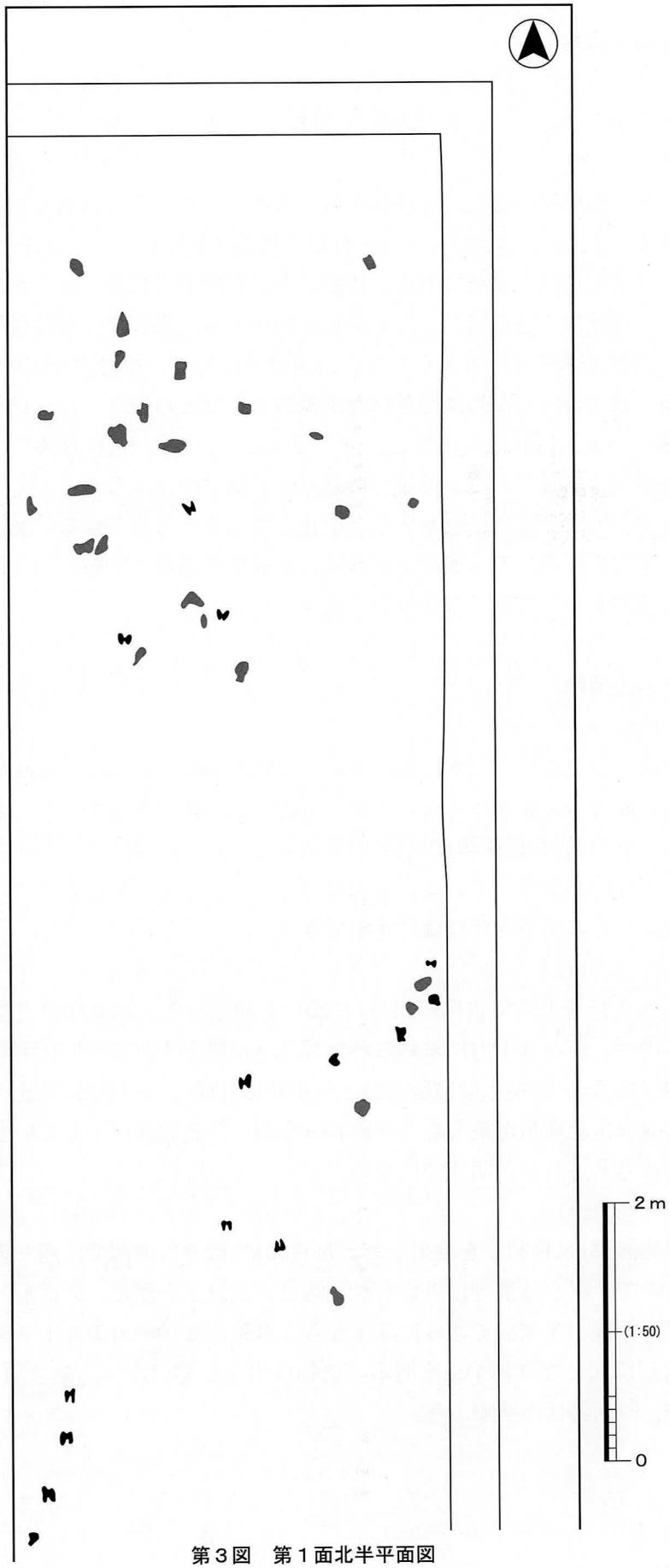
作土である９層上面で検出した水田面である。東壁北部においては約10cm程度の高まりが認められたことから、畦畔の存在が考えられたが、平面では確認できなかった。北半部においては砂粒で充填されたヒトや動物(偶蹄類)の足跡が多数見られた。砂粒は水田面を覆った洪水砂と考えられるが、足跡部分のみ遺存している。水田の時期については、10層から古墳時代後期頃の土器が出土していることから飛鳥時代以降に比定できよう。

〈第２面〉（T.P.+3.9m）

南半部に見られる15層上面で自然河川(ＮＲ201)を検出した。調査区中央で北西－南東方向の肩を検出したもので、流心は東方に求められ、幅は９ｍ以上を測る。断面形状は肩から緩やかに北東方向に下がってゆき、堆積土は14層の粘土～中粒砂互層で、南部では粘土～シルト互層となっている。層厚は調査区北東角が最大となり約40cmを測る。遺物は出土していない。時期的には古墳時代初頭以前と考えられるが明確ではない。

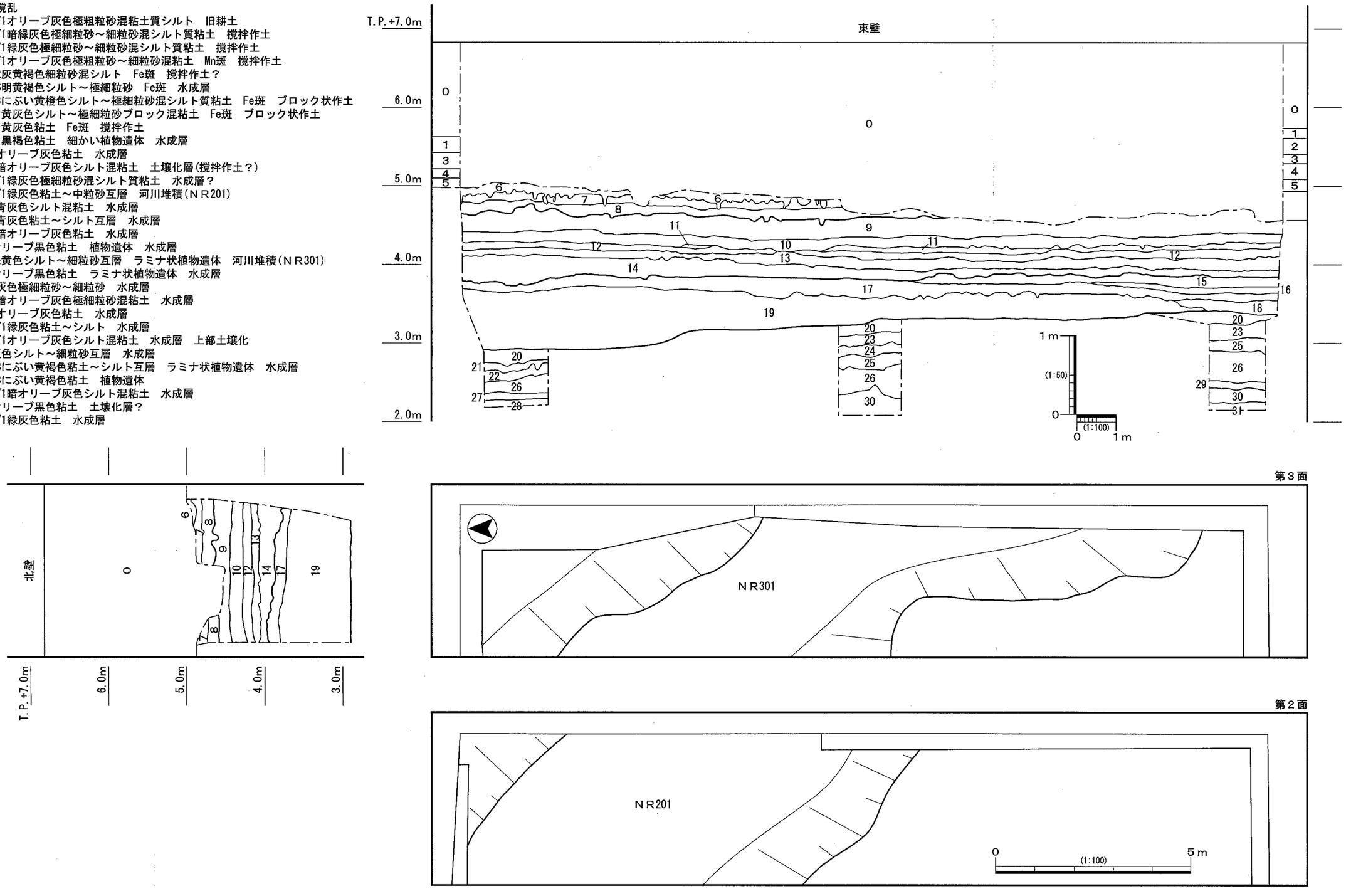
〈第３面〉（T.P.+3.4m）

20層上面で自然河川(ＮＲ301)を検出した。ＮＲ301は調査区南部で北西－南東方向の蛇行する肩を検出したもので、流心は東方に求められ、幅は８ｍ以上を測る。断面形状は肩から緩やかに北東方向に下がった後、北東部でさらに深くなる。堆積土は19層のシルト～細粒砂互層で、層厚は調査区北東角が最大となり約80cmを測る。遺物は出土していない。第２面ＮＲ201の前身河川と捉えられるが、時期等は不明である。



第３図　第１面北半平面図

０．盛土・撹乱
１．2.5GY6/1オリーブ灰色極粗粒砂混粘土質シルト　旧耕土
２．7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
３．7.5GY5/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
４．2.5GY6/1オリーブ灰色極粗粒砂～細粒砂混粘土　Mn斑　撹拌作土
５．10YR6/2灰黄褐色細粒砂混シルト　Fe斑　撹拌作土？
６．10YR7/6明黄褐色シルト～極細粒砂　Fe斑　水成層
７．10YR7/3にぶい黄橙色シルト～極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　ブロック状作土
８．2.5Y6/1黄灰色シルト～極細粒砂ブロック混粘土　Fe斑　ブロック状作土
９．2.5Y5/1黄灰色粘土　Fe斑　撹拌作土
10．2.5Y3/1黒褐色粘土　細かい植物遺体　水成層
11．5GY6/1オリーブ灰色粘土　水成層
12．5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混粘土　土壌化層(撹拌作土？)
13．7.5GY5/1緑灰色極細粒砂混シルト質粘土　水成層？
14．7.5GY5/1緑灰色粘土～中粒砂互層　河川堆積(ＮＲ201)
15．5BG6/1青灰色シルト混粘土　水成層
16．5BG5/1青灰色粘土～シルト互層　水成層
17．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　水成層
18．5Y3/1オリーブ黒色粘土　植物遺体　水成層
19．5Y7/3浅黄色シルト～細粒砂互層　ラミナ状植物遺体　河川堆積(ＮＲ301)
20．5Y3/1オリーブ黒色粘土　ラミナ状植物遺体　水成層
21．10Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂　水成層
22．5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土　水成層
23．5GY6/1オリーブ灰色粘土　水成層
24．7.5GY5/1緑灰色粘土～シルト　水成層
25．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト混粘土　水成層　上部土壌化
26．5Y5/1灰色シルト～細粒砂互層　水成層
27．10YR4/3にぶい黄褐色粘土～シルト互層　ラミナ状植物遺体　水成層
28．10YR4/3にぶい黄褐色粘土　植物遺体
29．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混粘土　水成層
30．5Y3/1オリーブ黒色粘土　土壌化層？
31．7.5GY6/1緑灰色粘土　水成層



第４図　断面図、第２・３面平面図

３．まとめ

今回の調査では第１面で水田遺構、第２・３面で自然河川を検出した。遺構や出土遺物に乏しく、各遺構面の時期や性格については不明といわざるを得ない。

第１面については南部の第２次調査で確認している平安時代の水田に相当する可能性がある。また同調査では約T.P.+4.4mで古墳時代後期の遺構を検出しているが、該期の土器を含む本調査の第10層がこの遺構面に相当すると考えられ、レベル的にもほぼ合致するものである。当地では遺構は認められず、居住域からは外れている可能性が高い。

第２・３面検出の自然河川(ＮＲ201・301)については、共に調査地の東方に流心が求められ、調査地西方の長瀬川、東方の楠根川と流向を同じくする河川である。埋没の時期等は不明である。北西部の近畿自動車道調査地(府センター美園)では古墳時代前期のＢＮＲ301、弥生時代中期のＢＮＲ201・202等の自然河川が検出されているが、ＮＲ201が前者、ＮＲ301が後者に繋がってゆく可能性が考えられる。

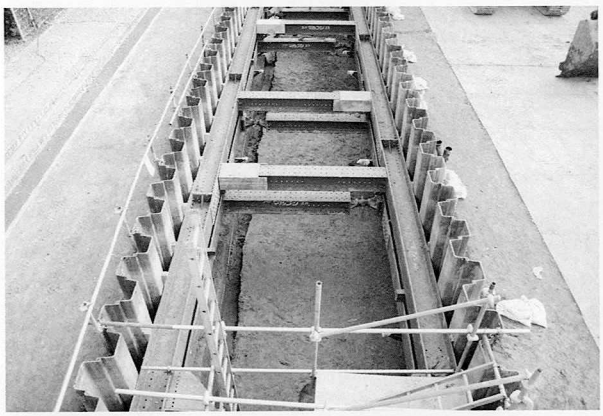
図版1

調査地（南東から）

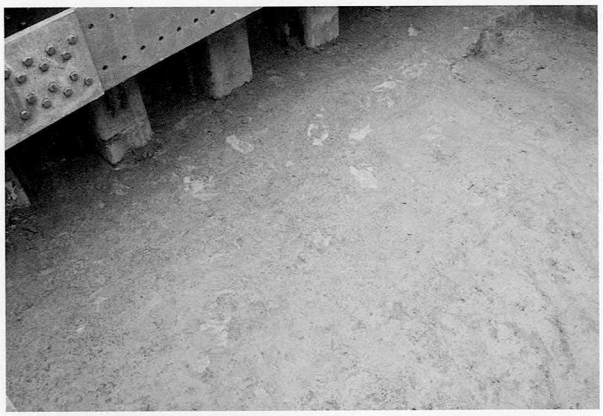
機械掘削（北東から）

北部上層南壁

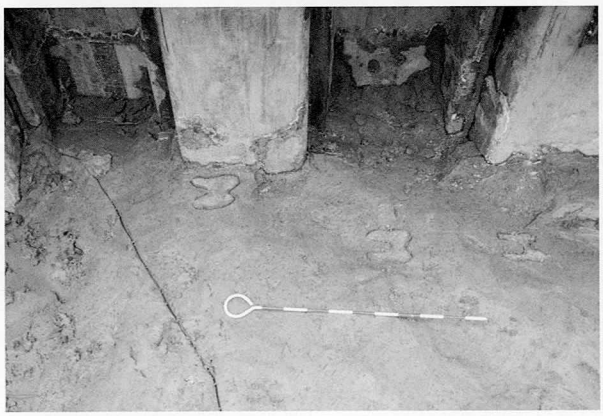
南部上層北壁



第１面（北から）

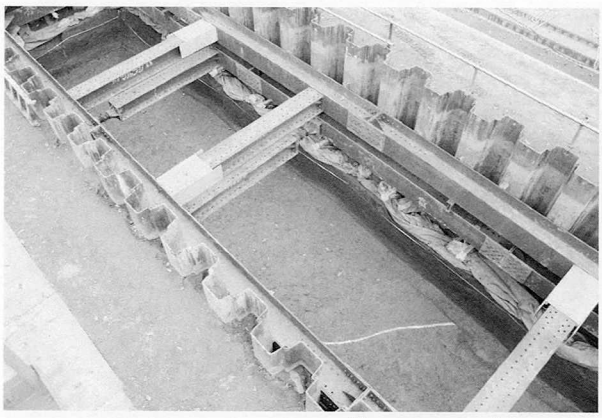


第１面北西部足跡群（南東から）



第１面西部足跡群（東から）

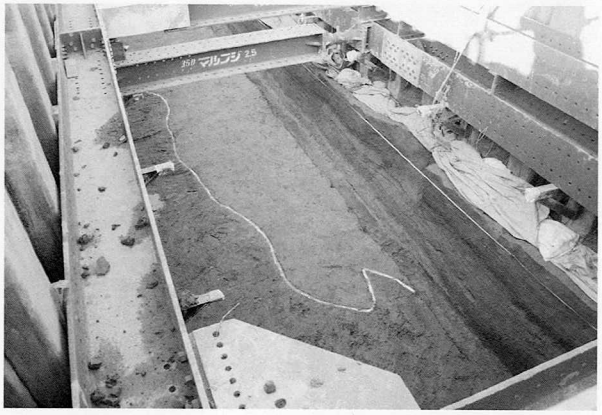
第１面足跡（西から）



第２面ＮＲ201（南西から）

第２面ＮＲ201（南から）

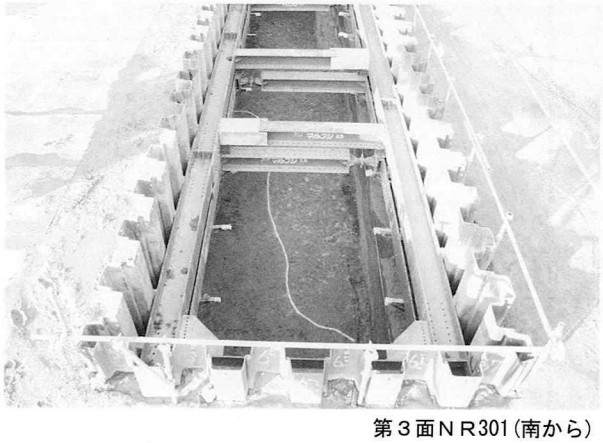
第２面ＮＲ201北東角（南西から）



第３面ＮＲ301検出（南西から）

第３面ＮＲ301検出（北から）

第３面ＮＲ301（南西から）



第３面ＮＲ301（南から）

第３面ＮＲ301北東角（南西から）

図版3

北壁

東壁

下層確認トレンチ１機械掘削（南東から）

下層確認トレンチ１東壁

下層確認トレンチ２東壁

下層確認トレンチ３東壁

調査状況（北東から）

調査状況（東から）

X　八尾寺内町第６次調査（ＹＣ2011－６）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市本町二丁目２番８号で実施した、(仮称)八尾図書館等建設に伴う発掘調査報告書である。
1．本書で報告する八尾寺内町第６次調査(ＹＣ2011－６)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づくもので、八尾市と財団法人八尾市文化財調査研究会の間で、八尾市教育委員会を立会者として締結した契約により、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　坪田真一が担当した。
1．現地調査は、平成23年９月20日～平成24年１月23日(現場実働21日)に実施した。調査面積は約186㎡である。
1．現地調査には飯塚直世・伊藤静江・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子・西出一樹が参加した。
1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成26年３月31日に完了した。
1．本書の執筆・編集は坪田が行った。
1．基準点測量及び航空写真測量は株式会社かんこうに委託した。

本　文　目　次

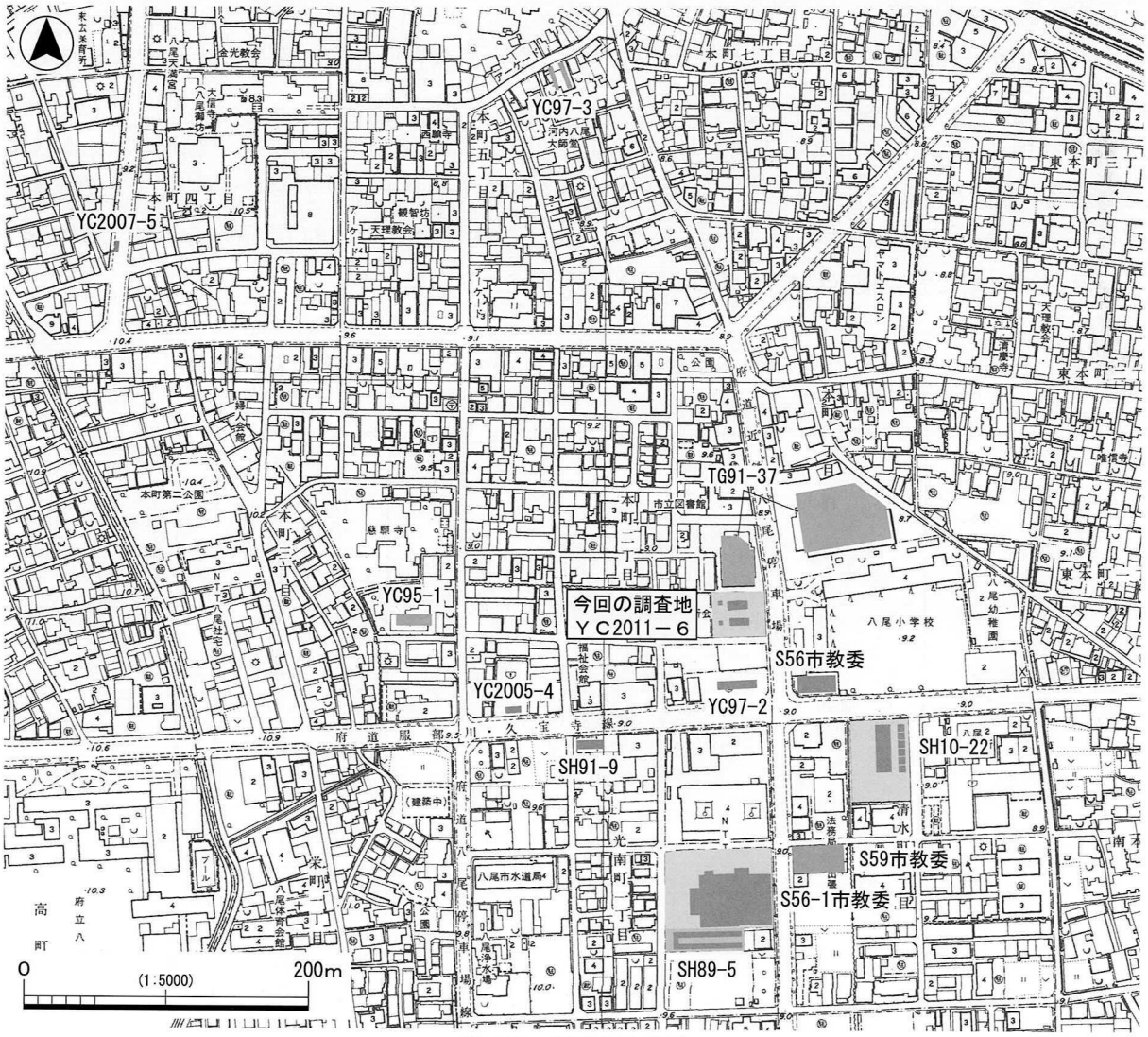
1．はじめに……61
2．調査概要……62
　1）調査の方法と経過……62
　2）基本層序と出土遺物……63
　3）検出遺構と出土遺物……64
3．まとめ……69

X　八尾寺内町第６次調査（ＹＣ2011－６）

１．はじめに

八尾寺内町は、八尾市北西部に位置する弥生時代中期以降の複合遺跡である。現在の行政区画では、八尾市本町２～５丁目の約500m四方がその範囲に当たり、旧大和川の主流であった長瀬川右岸の沖積地上に位置する。周辺では北側に宮町遺跡、東側に東郷遺跡、南側に成法寺遺跡が隣接する他、西側に旧大和川の主流であった長瀬川を挟んで久宝寺遺跡が所在する。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+8.3～10.5mを測る。

当遺跡名の由来となる八尾寺内町は、慶長11(1606)年に、森本七郎兵衛ら17人を主導者とする一部の久宝寺寺内町住人と慈願寺が久宝寺寺内町を出て、長瀬川(旧大和川本流)沿いの荒野の地を開拓し移住したことに始まる。この移住については、久宝寺寺内町において顕証寺の下代として、かつ久宝寺村の庄屋を務めていた安井氏の独裁的・専制的な特権行為に対抗したためであるが、その背景には本願寺の東西分派があったとされる。翌年には東本願寺の掛所として大信寺御



第１図　調査地位置図

坊が建立され、やがて大信寺を中核とする寺内町が形成された。そして江戸時代後半以降、八尾の中核的な地域として発展してゆく。

今回の調査地は遺跡範囲の南東部に位置しているが、享保年間(1716～1735)作成と考えられる絵図『河内国若江郡八尾郷絵図』によると、寺内町を巡る環濠の外側にあたる。

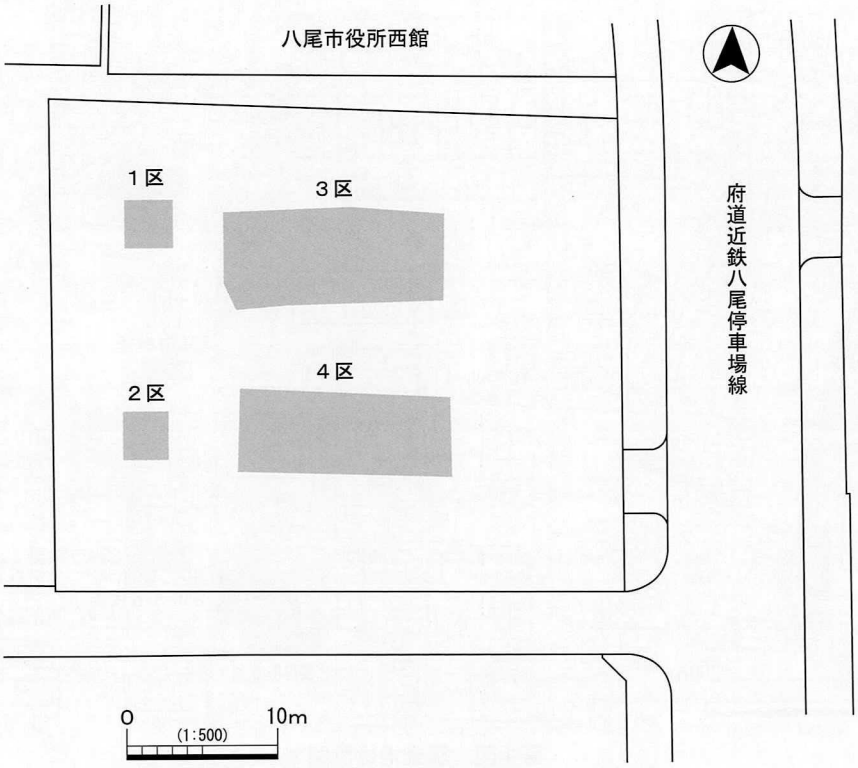
当遺跡内ではこれまでに、当研究会による第１～５次調査の他、小規模な遺構確認調査が実施されている。第１次調査では竪穴住居等で構成された弥生時代後期末～古墳時代初頭の居住域を確認した。同時期の遺構は第４次調査や南の成法寺遺跡(SH)第５・９次調査等においても確認している。第２次調査では古墳時代前期布留式期の遺構を検出した。同時期の遺構は東・北に近接する東郷遺跡(TG)第37次調査や市56年調査でも確認されていることから、今回の調査地一帯に該期の集落が展開していると考えられる。遺跡範囲北部の第３次調査では寺内町形成以前にあたる平安時代末～室町時代の集落遺構が検出されている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は(仮称)八尾図書館等建設に伴う調査で、当調査研究会が八尾寺内町で行った第６次調査(ＹＣ2011－６)である。

調査区は４箇所で、約3.0×3.0m－２箇所(１・２区)、約6.0×14.0m－２箇所(３・４区)、総面積約186㎡である。３・４区については当初9.0×20.0mの上幅を予定していたが、既設建物解体時の工法上の制約により縮小したものであり、総面積は予定の約378㎡から減少している。また３区は北側に既設地下構造物が存在したため予定より南に移動している。



第２図　調査区位置図

調査は１・２・４・３区の順に実施した。調査地の既設建物が地下駐車場を備えていたことから、１・２区は周辺道路面から約1.1m、また３・４区は建物解体によりさらに約1.0m下がったレベルからの調査となっている。なお１区については、掘削直後より西側からの湧水が著しかったため、平面的な調査は実施できず、一部で断面の観察を行った。

地区割り、標高の基準については基準点測量を委託し、国土座標第Ⅵ系により実施した。また３区の調査に際しては２回の航空写真測量を実施した。

遺構名は、遺構略号＋面＋二桁番号とし、１区から順に付した（ＳＤ101：第１面の１番目の溝）。

２）基本層序と出土遺物

０層－盛土・撹乱。２区では地表下２m付近、１・３・４区では３～４m付近まで、さらに３区中央では５m付近まで既設建物の基礎や地下構造物、解体時の撹乱が及んでいる。

１～４層－２区西部でのみ確認した。粘土～極細粒砂からなる湿地性の水成層である。

５～10層－全域に広がる湿地性の水成層で、層厚約1.4mを測る。粘土～シルトの互層状を成し、ラミナ状の植物遺体や炭酸鉄を含む。

11～15層－４区で見られた湿地性の水成層で、植物遺体や炭酸鉄を多く含む。第１面検出の落ち込み埋土となっている。

16～21層－３・４区で見られた粘土～細粒砂の水成層で、植物遺体や炭酸鉄を含む。18～21層は３区第１面ＳＯ101の埋土となっている。

22層－３・４区で見られたシルト質粘土混細粒砂～粗粒砂である。撹拌され汚れた層相であるが、人為的なものではないと考えられる。

23～25層－４区で見られた粘土～極細粒砂の互層状の水成層で、植物遺体や炭酸鉄を含む。

26・27層－４区で見られた細粒砂～粗粒砂混粘土～シルト質粘土である。やや汚れた層相であるが、人為的なものではないと考えられる。27層上面では踏み込み状の窪みに25層のシルトが溜まる状況が見られた。

28・29層－３区検出の高まり101の構築層で、暗色を呈するブロック状の層相である。

30層－３区検出のＳＤ301の最終埋土で、ブロック状の層相である。

31・32層－３区で見られたシルト質粘土～細粒砂の互層状をなす水成層である。３区西部ではＳＤ301に落ち込んでいる。

33層－４区検出のＳＤ302の埋土で、シルト～細粒砂の互層状をなす水成層である。

34～38層－３・４区全域に亘る河川堆積である。底面のレベルは３区北部で約T.P.+3.3m、南部で約T.P.+3.1m、４区ではT.P.+3.0m以下に及ぶ。上層にあたる34～36層は極細粒砂～極粗粒砂の互層からなり、層厚は３区で0.5m、４区で1.2m以上に及ぶ。下層の37・38層は３区で見られ、粘土～シルトからなり、植物遺体を多く含む。層厚は0.3mを測る。

39層－３区で見られた極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土で、上部は土壌化している。上面が第３面である。

40層－３区で見られた細粒砂～粗粒砂からなる河川堆積である。液状化による噴砂が全域で認められた。

3）検出遺構と出土遺物

〈第１面〉

３区(約T.P.+4.5m)で高まり１箇所(高まり101)、落ち込み１箇所(ＳＯ101)、畦畔状遺構１条(畦畔状遺構101)、４区(約T.P.+4.8m)で落ち込み３箇所(ＳＯ102～104)を検出した。層位的にみて３区の遺構群は４区の遺構群より時期的に先行する。

高まり101・ＳＯ101

高まり101は３区南西角に位置し、西北西－東南東方向に延びる肩から北東方向に落ち込むＳＯ101に至る。高まり101は人為的な盛土と考えられる28・29層で構成されており、検出長約4.5m・高さ約40cmを測る。平面的には捉えていないが、28層は３区南東角にも認められることから、３区南辺に沿って延びている可能性が高く、長さ12m以上を測ると考えられる。なお第２面ＳＤ201の上位に重複して構築されているが、意図的なものと考えられよう。ＳＯ101は高まり101の北東側全域を占め、東西12m以上に広がる。深さ約40cmを測り、埋土は18～21層にあたる水成層である。遺物は高まり101際で弥生土器と考えられる土器片が１点出土した。

畦畔状遺構101

３区東部のＳＯ101底面で検出した。北西－南東方向に延びるもので、上幅0.9～1.2m・検出長約3.1m・高さ約10cmを測る。盛土されたものではなく、また上面の顕著な土壌化や作土の存在は認められない。

ＳＯ102・103

４区西部に位置し、16層上面から落ち込むものである。ＳＯ102は南北方向に延びる蛇行する肩から西に落ち込み、規模は南北3.1m以上・東西1.0～2.2m以上を測る。ＳＯ103は弧状を呈する肩から南に落ち込む土坑状で、規模は南北0.7m以上・東西2.5m以上を測る。２基は一連の遺構の底部の起伏と考えられ、16層上面からの深さは約45cmを測る。埋土はＳＯ103に15層が堆積した後に、両遺構に14・11層が堆積する状況で、いずれも湿地性の水成層である。

ＳＯ104

４区南東部に位置し、ＳＯ102・103と同じく16層上面から落ち込むものである。北東－南西方向の肩から南東に落ち込む状況で、規模は長さ4.1m以上・幅2.0m以上を測る。埋土は11～13層からなる湿地性の水成層で、深さ約0.6mを測る。

〈第２面〉

３区(約T.P.+4.1～4.2m)で土坑１基(ＳＫ201)、溝１条(ＳＤ201)、４区(約T.P.+4.2m)で溝１条(ＳＤ202)を検出した。

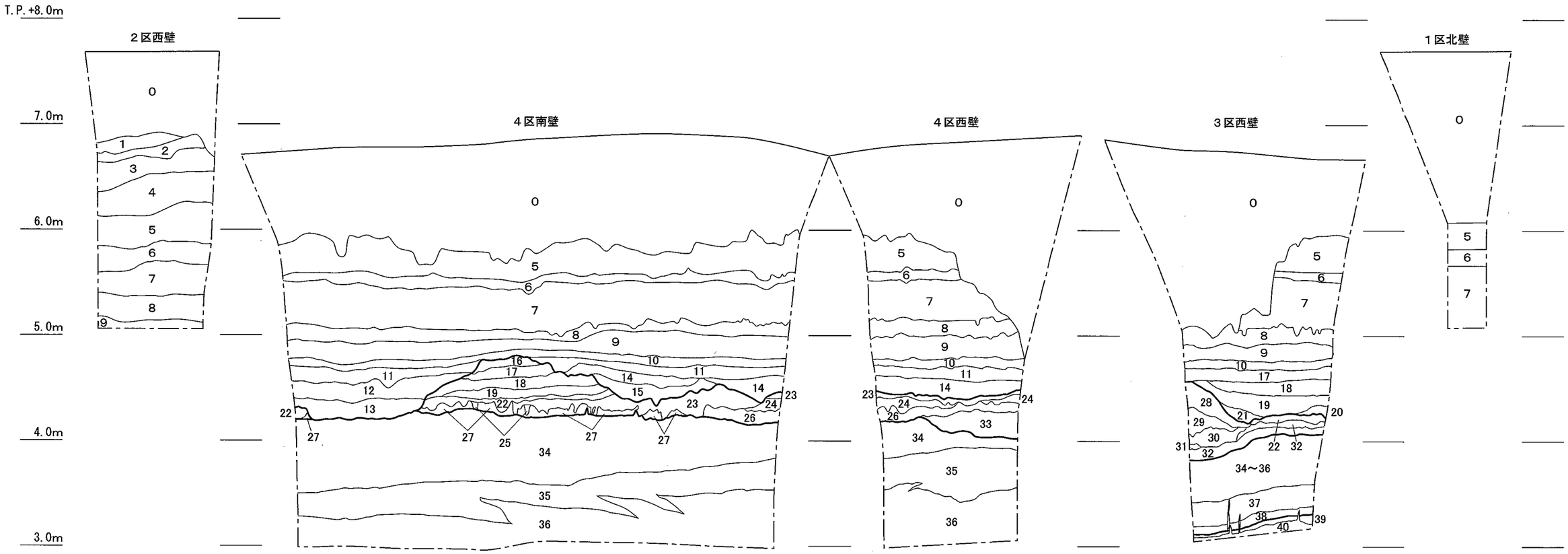
ＳＫ201

３区東部に位置し、31層上面で検出した。平面不定形な土坑であるが、本来は北西－南東方向に主軸を有するものと考えられる。規模は南北約2.5m・東西約2.0mを測る。深さは約５cmと浅く、埋土は上位の22層が落ち込む。自然地形の可能性がある。

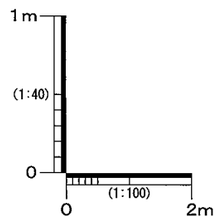
ＳＤ201

３区南西部、河川堆積である砂層(34～36層)上面で検出した溝である。西北西－東南東方向に延びる北肩を検出したもので、検出長約4.0m・幅1.5m以上・深さ30cm以上を測る。埋土は構築面上位に堆積する水成層である31・32層が落ち込み、最終的にはブロック状の30層により埋めら

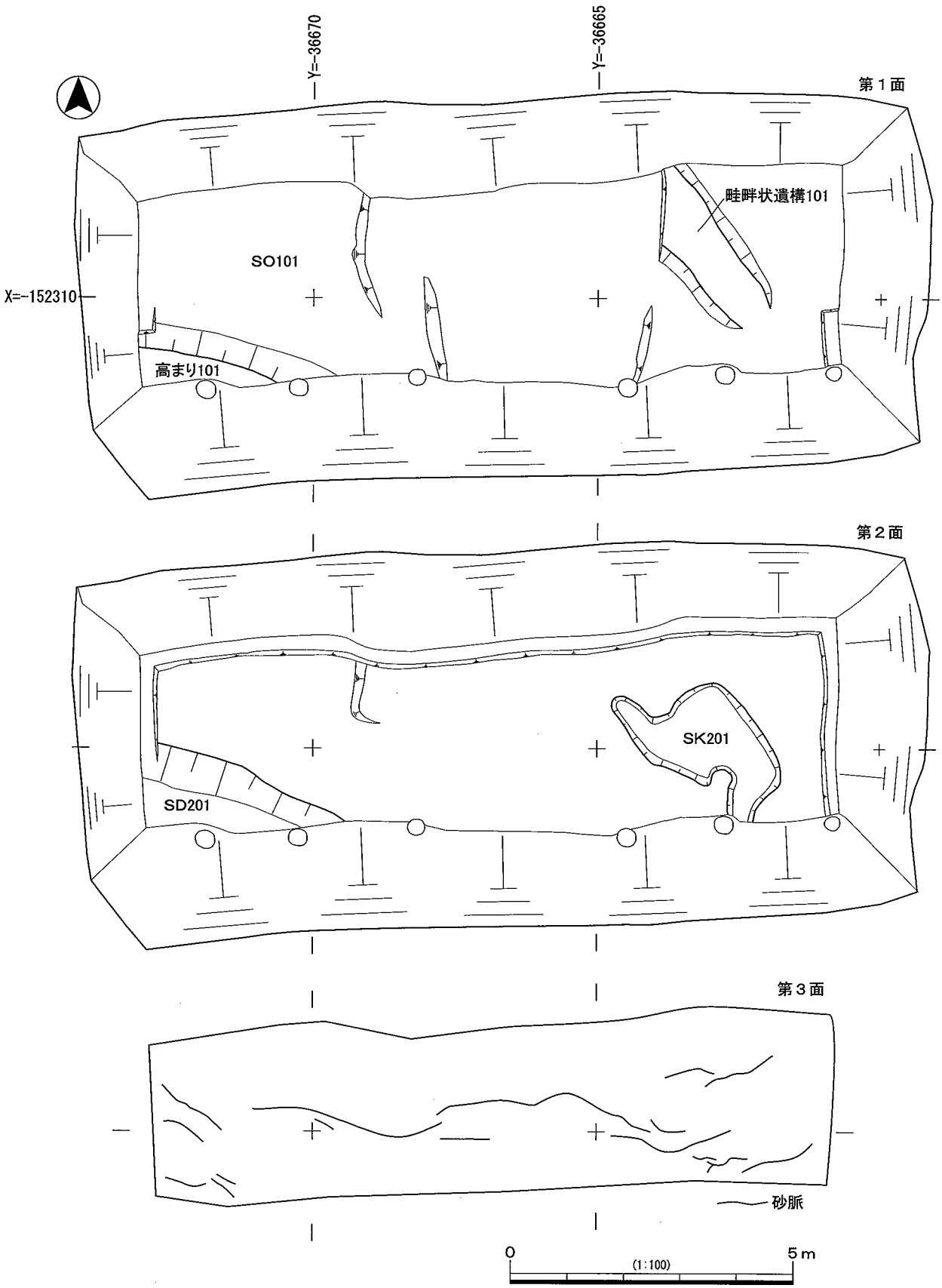
周辺の道路面：約T. P. +8. 8m



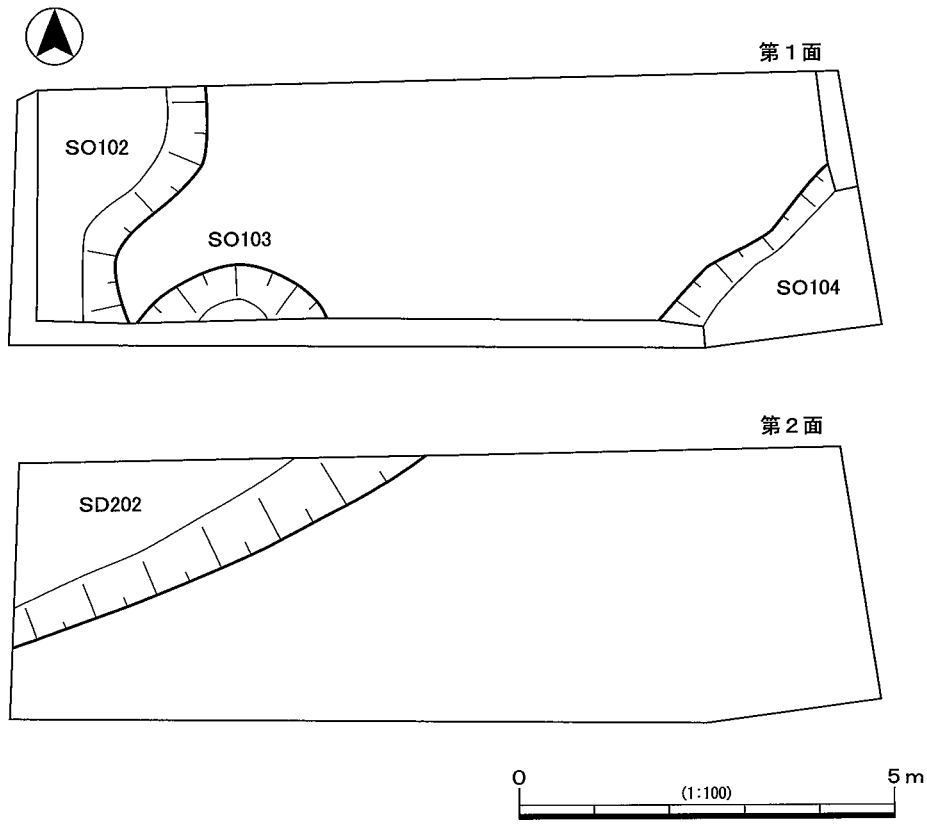
0．盛土・撹乱
1．7.5Y3/2オリーブ黒色粘土～シルト互層
2．7.5Y5/1灰色粘土～極細粒砂互層
3．7.5Y3/2オリーブ黒色シルト質粘土
4．2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混粘土
5．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土～シルト互層　ラミナ状植物遺体
6．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト互層　ラミナ状植物遺体
7．5GY5/1オリーブ灰色粘土～シルト質粘土互層
8．10GY5/1緑灰色粘土　炭酸鉄
9．10GY6/1緑灰色粘土　ラミナ状植物遺体
10．5BG4/1暗青灰色粘土　植物遺体多
11．5BG5/1青灰色粘土　炭酸鉄
12．7.5GY4/1暗緑灰色粘土　植物遺体多
13．2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂少混粘土　植物遺体多
14．10GY5/1緑灰色極細粒砂混粘土　炭酸鉄
15．5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂多混粘土　植物遺体
16．10G5/1緑灰色粘土　炭酸鉄
17．5G5/1緑灰色極細粒砂少混シルト質粘土　炭酸鉄多
18．10G4/1暗緑灰色粘土　植物遺体
19．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粘土互層　ラミナ状植物遺体
20．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　植物遺体多
21．2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混シルト質粘土　植物遺体多
22．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土混細粒砂～粗粒砂　炭酸鉄　植物遺体
23．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト～極細粒砂互層
24．10GY4/1暗緑灰色粘土　ラミナ状植物遺体
25．2.5Y6/3にぶい黄色シルト
26．10GY4/1暗緑灰色細粒砂～粗粒砂多混粘土
27．2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　植物遺体多
28．7.5Y3/2オリーブ黒色極細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト　植物遺体　ブロック状
29．5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状
30．7.5GY4/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
31．5Y7/3浅黄色極細粒砂～細粒砂
32．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土～細粒砂互層
33．7.5GY5/1緑灰色シルト～細粒砂互層
34．2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～極粗粒砂互層
35．2.5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂～中粒砂互層
36．2.5GY6/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂互層
37．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土～シルト互層　植物遺体多
38．5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂～細粒砂極少混粘土　植物遺体
39．5BG5/1青灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　上部土壌化
40．2.5Y6/3にぶい黄色極細粒砂～粗粒砂



第３図　断面図


Y=-36670
Y=-36665
第１面
畦畔状遺構101
SO101
X=-152310
高まり101
第２面
SK201
SD201
第３面
砂脈
0
(1:100)
5m

第４図　３区平面図



第５図　４区平面図

れている。なお埋没後、上位に高まり101が構築されており、これが連続的なものか、時間的に隔たりがあるのかは不明であるが、高まりを構築するために、埋没しつつあった当溝を埋め立てて地形を平坦化したものと推察される。

ＳＤ202

４区北西部、河川堆積である砂層(34層)上面で検出した溝である。東北東－西南西方向に延びる南肩を検出したもので、検出長約6.0m・幅2.2m以上・深さ約30cmを測る。埋土はシルト～細粒砂からなる水成層(33層)の単一層である。下位の河川(34～36層)の最終的な流路部分である可能性がある。

〈第３面〉

３区39層上面(T.P.+3.1～3.3m)は土壌化しており、遺構は認められなかったが噴砂による砂脈を確認した。40層の液状化による噴砂で、高さ40cm、36層にまで及ぶものも見られた。東西方向に延びるものが多く、北西－南東、北東－南西方向のものも見られる。

３．まとめ

今回の調査では遺構・遺物の検出は希薄なものであった。

北側の東郷遺跡第37次調査（ＴＧ91－37）では、T.P.+6.6mで古墳時代前期、T.P.+7.2mで平安時代後期～室町時代、また南側の八尾寺内町第２次調査（ＹＣ97－２）ではT.P.+6.1mで古墳時代前期の生活面が確認されている。しかし本調査地においては、大部分がT.P.+6.0m以下まで既設建物等による削平・撹乱が及んでおり、これら周辺で確認されている古墳時代前期以降の生活面は遺存していなかった。上層部が確認できた２区の地層を見る限りでは、古墳時代前期の集落域は西には広がらないものと考えられる。

第１面では３区で人為的に構築された高まりや畦畔状遺構を検出した。類似する遺構として、西方の久宝寺遺跡では、弥生時代中期～後期において高まりや畦畔からなる水田域が検出されている。本調査では作土は認められなかったが、同様の性格の遺構である可能性が考えられよう。出土遺物は弥生土器と考えられる細片１点のみで、時期的には断定できないが、周辺の調査成果から勘案して第１面の時期は古墳時代初頭以前に比定される。

第２面で検出した土坑や溝については、人為的な遺構であるかどうか不明である。

第３面では３区で液状化による噴砂を確認した。

参考文献

・櫻井敏雄・大草一憲1988『寺内町の基本計画に関する研究―久宝寺寺内と八尾寺内を中心として―』八尾市教育委員会
・小谷利明2009『平成21年度特別展　やお まち 発見　八尾の寺内町－久宝寺・萱振・八尾－』八尾市立歴史民俗資料館
・岡田清一1999「Ⅲ　八尾寺内町遺跡第１次調査（ＹＣ95－１）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告63』財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一1999「ⅩⅣ　八尾寺内町遺跡第２次調査（ＹＣ97－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2000「Ⅺ　八尾寺内町遺跡第３次調査（ＹＣ97－３）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告66』財団法人八尾市文化財調査研究会
・荒川和哉2007「Ⅳ　八尾寺内町遺跡第４次調査（ＹＣ2005－４）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告97』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助1993「ⅩⅣ　成法寺遺跡第９次調査（ＳＨ91－９）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一1992「Ⅰ　成法寺遺跡（第５次調査）」『平成４年度八尾市埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅱ）　財団法人八尾市文化財調査研究会報告35』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則1999「Ⅱ　東郷遺跡第37次調査（ＴＧ91－37）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会
・八尾市教育委員会1983『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要　1980・1981年度』
・亀井　聡・他2007『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ　－寝屋川流域下水道竜華水みらいセンター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他－　（財）大阪府文化財センター調査報告書第156集』財団法人大阪府文化財センター

調査地全景（東から）

１・２区調査地（南から）

１区全景（西から）

１区北壁

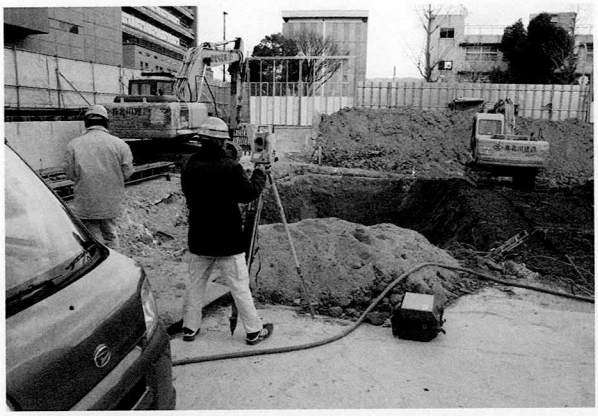
２区全景（南から）

２区西壁

２区調査状況（東から）

３・４区調査地（北西から）

図版2



3区基準点測量（西から）

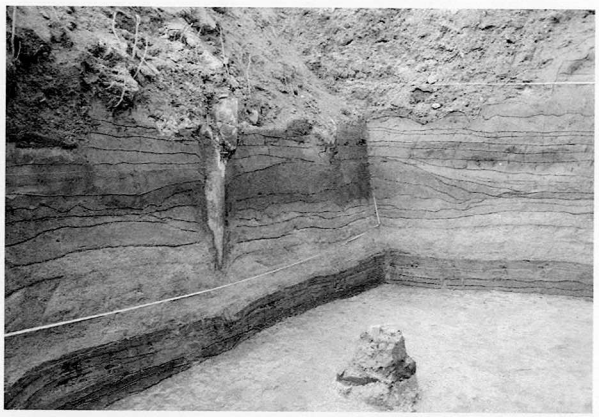
3区スカイマスター使用状況（西から）

3区空中写真撮影状況（南西から）

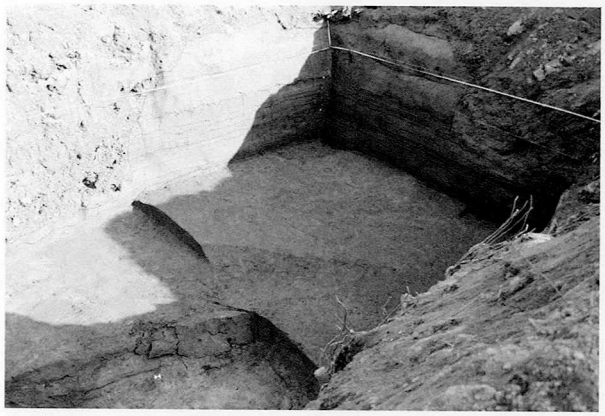
3区第1面（東から）

3区第1面航空写真（上が北）

３区第１面高まり101（北から）



３区高まり101南・西壁

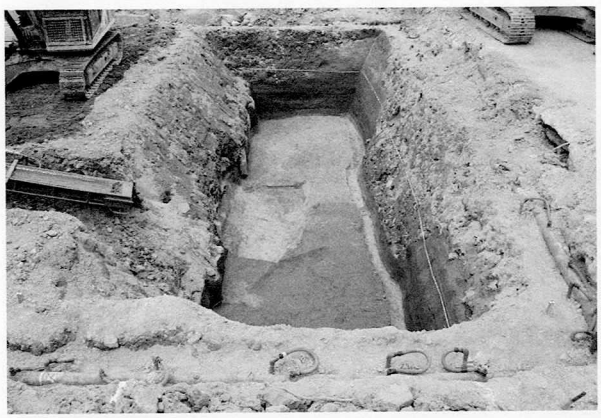


３区第１面畦畔状遺構（南西から）

３区調査状況（北西から）

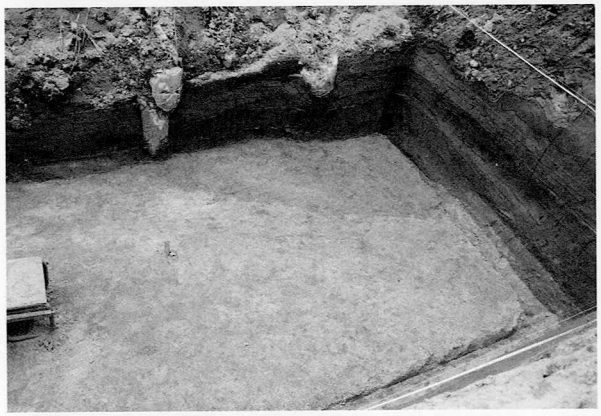
３区第２面航空写真（上が北）

図版4



3区第2面(東から)

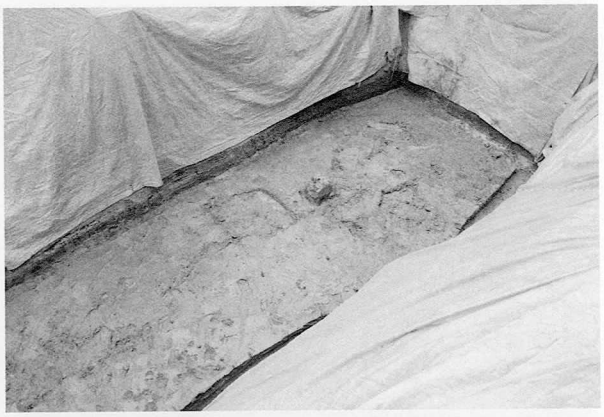
3区第2面SK201(北から)



3区第2面SD201検出(北東から)

3区第2面SD201(北東から)

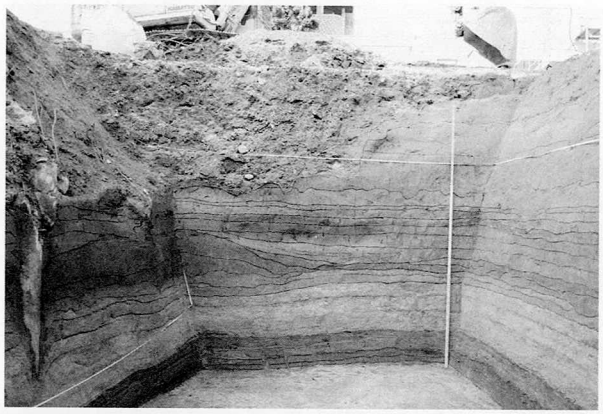
3区第3面(東から)



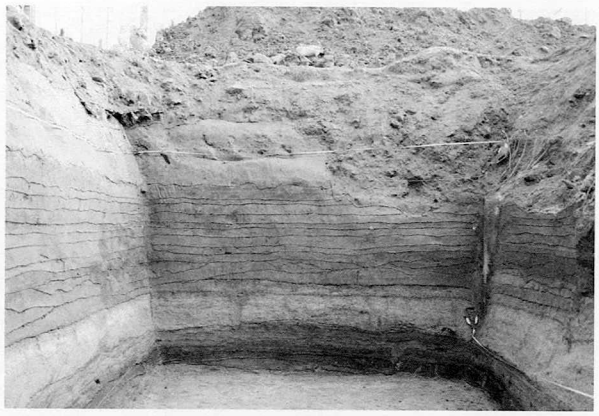
3区第3面西部(北東から)

3区西・南壁噴砂

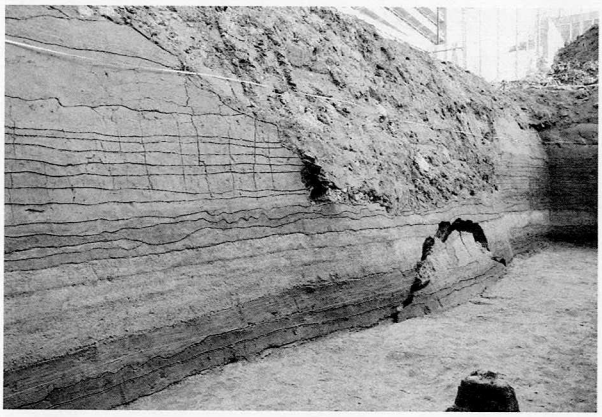
3区調査状況(西から)



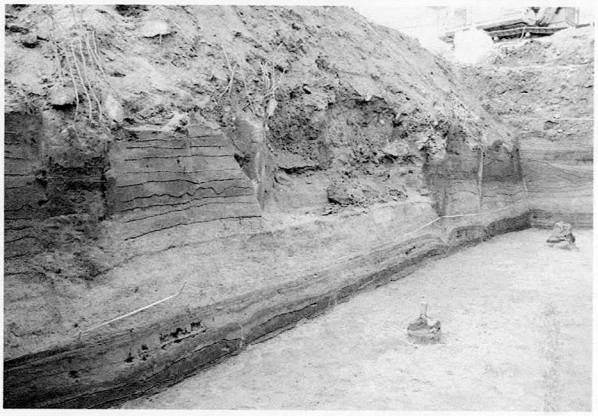
３区西壁



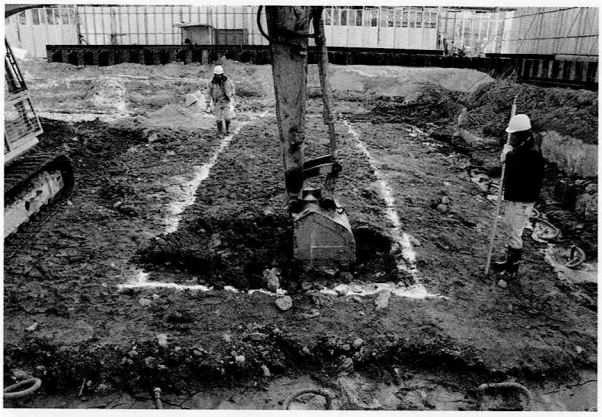
３区東壁



３区北壁



３区南壁



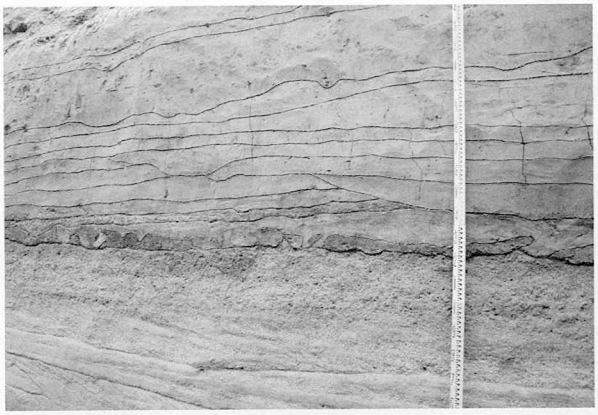
４区機械掘削（西から）

４区第１面（西から）

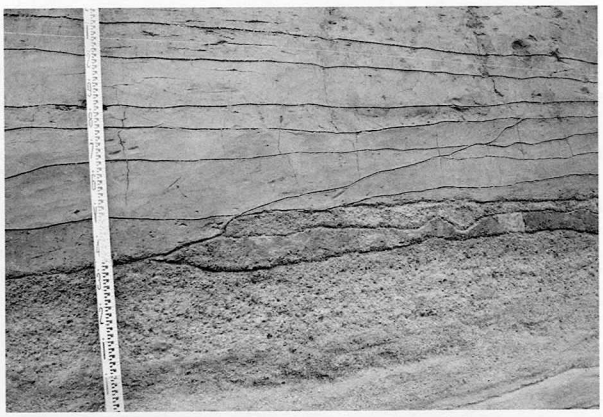
４区第１面ＳＯ102・103（北東から）

４区第１面ＳＯ104（東から）

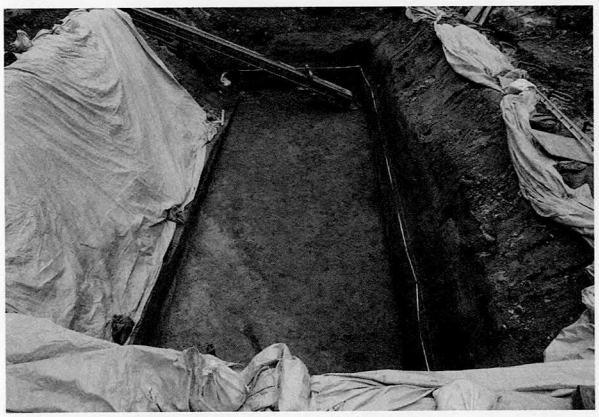
図版6



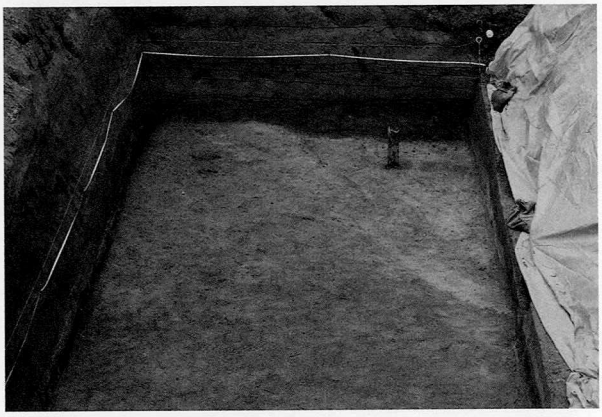
4区ＳＯ103南壁（西から）



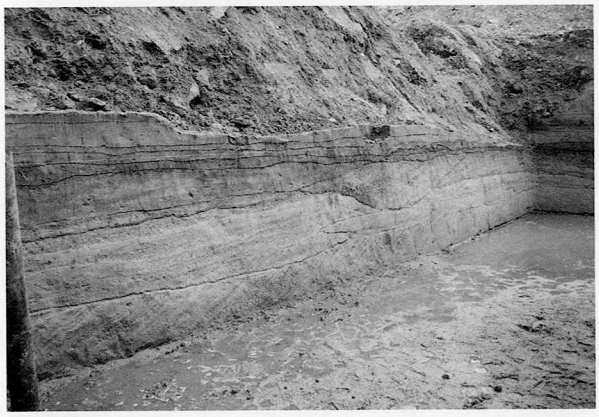
4区ＳＯ104南壁（西から）



4区第２面（西から）

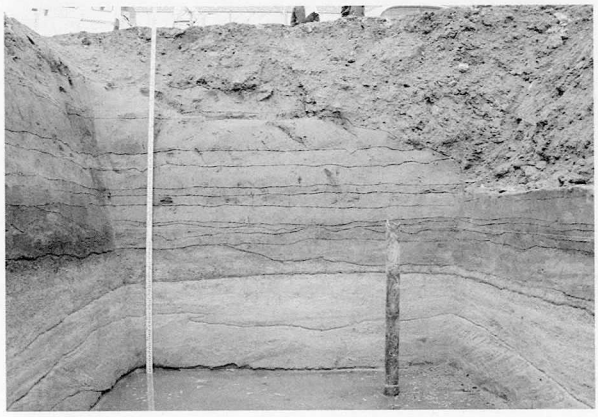


4区第２面ＳＤ201（東から）

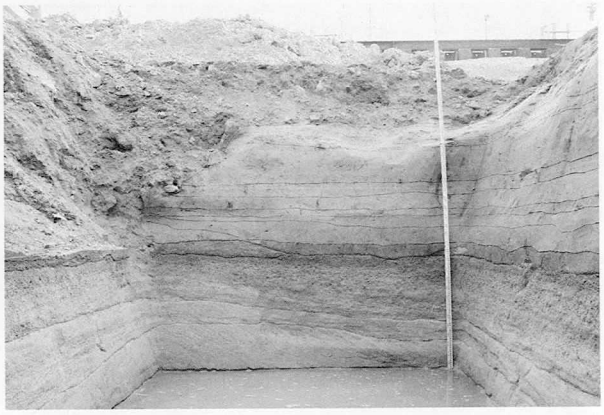


4区北壁

4区南壁



4区西壁



4区東壁

報　告　書　抄　録

ふりがな	うえまついせき　おおたがわいせき　おんぢいせき　かめいいせき　かやふりいせき こざかあいいせき　じょうほうじいせき　たかやすこふんぐん　みそのいせき　やおじないまち
書　　名	植松遺跡　太田川遺跡　恩智遺跡　亀井遺跡　萱振遺跡 小阪合遺跡　成法寺遺跡　高安古墳群　美園遺跡　八尾寺内町
副 書 名	
シリーズ名	公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	145
編 著 者 名	高萩千秋　坪田真一(編)
編 集 機 関	公益財団法人八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2014年３月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
うえまついせき 植松遺跡 (第13次調査)	おおさかふやおしうえまつちょう３ちょうめ 大阪府八尾市植松町３丁目	27212	63	34度 37分 03秒	135度 35分 44秒	20130520 ～ 20130521	約16	記録保存調査 JR八尾駅周辺整備 遺構確認調査
おおたがわいせき 太田川遺跡 (第３次調査)	おおさかふやおしみずこし３ちょうめほか 大阪府八尾市水越３丁目	27212	55	34度 38分 06秒	135度 38分 19秒	20131028	約9	記録保存調査 消防機械器具置場改築 遺構確認調査
おんぢいせき 恩智遺跡 (第25次調査)	おおさかふやおしおんぢきたまち４ちょうめ 大阪府八尾市恩智北町４丁目	27212	30	34度 36分 35秒	135度 38分 00秒	20120326	約4	記録保存調査 給食調理場改築 遺構確認調査
かめいいせき 亀井遺跡 (第17次調査)	おおさかふやおしかめいちょう４ちょうめ 大阪府八尾市亀井町４丁目	27212	26	34度 36分 50秒	135度 34分 42秒	20120723	約4	記録保存調査 流域貯留浸透施設
かやふりいせき 萱振遺跡 (第30次調査)	おおさかふやおしあさひがおか５ちょうめ 大阪府八尾市旭ヶ丘５丁目	27212	65	34度 38分 01秒	135度 36分 39秒	20140122	約7	記録保存調査 駐車場整備
こざかあいいせき 小阪合遺跡 (第45次調査)	おおさかふやおしやまもとちょうみなみ８ちょうめ 大阪府八尾市山本町南８丁目	27212	40	34度 37分 12秒	135度 37分 06秒	20110926 ～ 20110927	約8	記録保存調査 校舎改築 遺構確認調査
こざかあいいせき 小阪合遺跡 (第46次調査)	おおさかふやおしやまもとちょうみなみ８ちょうめ 大阪府八尾市山本町南８丁目	27212	40	34度 37分 12秒	135度 37分 08秒	20130128 ～ 20130208	約264	記録保存調査 校舎改築
じょうほうじいせき 成法寺遺跡 (第26次調査)	おおさかふやおしこうなんちょう１ちょうめ 大阪府八尾市光南町１丁目	27212	73	34度 37分 28秒	135度 35分 54秒	20130507 ～ 20130508	約17	記録保存調査 水道庁舎機能更新 遺構確認調査
たかやすこふんぐん 高安古墳群 (第７次調査)	おおさかふやおしおおあざはっとりがわ 大阪府八尾市大字服部川	27212	12	34度 37分 20秒	135度 38分 49秒	20111007 ～ 20111116	約167	記録保存調査 市道高安第30号線道路整備
みそのいせき 美園遺跡 (第９次調査)	おおさかふやおしみそのちょう２ちょうめ 大阪府八尾市美園町２丁目	27212	34	34度 38分 17秒	135度 35分 43秒	20121116 ～ 20121205	約98.6	記録保存調査 耐震性緊急貯水槽設置
やおじないまち 八尾寺内町 (第６次調査)	おおさかふやおしはっとりがわ５ちょうめ 大阪府八尾市服部川５丁目	27212	80	34度 37分 35秒	135度 36分 00秒	20110920 ～ 20120123	約186	記録保存調査 (仮称)八尾図書館等建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
植松遺跡 (第13次調査)	集落	中世 近世	土坑 溝、杭列	土師器、須恵器、瓦器 陶磁器	
太田川遺跡 (第3次調査)	集落	縄文時代晩期～弥生時代 近世	遺物包含層 溝	縄文土器(長原式)、弥生土器	
恩智遺跡 (第25次調査)	集落				
亀井遺跡 (第17次調査)	集落				
萱振遺跡 (第30次調査)	集落	近世	落込み	土師器、瓦	
小阪合遺跡 (第45次調査)	集落			土師器、須恵器、瓦器	
小阪合遺跡 (第46次調査)	集落	弥生時代後期～古墳時代初頭 古墳時代後期 平安時代	溝 土坑 溝、落込み	弥生土器、古式土師器 須恵器 土師器	
成法寺遺跡 (第26次調査)	集落				
高安古墳群 (第7次調査)	集落			須恵器	
美園遺跡 (第9次調査)	集落	古墳時代初頭以前 飛鳥時代以降	自然河川 水田(足跡)	土師器、須恵器	
八尾寺内町 (第6次調査)	集落	古墳時代初頭以前	畦畔状遺構、高まり	弥生土器	

要　約	太田川3次では縄文時代晩期長原式の深鉢片が出土した。小阪合46次では弥生時代後期～古墳時代初頭の溝が検出され、北部で確認している該期の方形周溝墓との関連が考えられる。

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告145

Ⅰ　植松遺跡　（第13次調査）
Ⅱ　太田川遺跡　（第３次調査）
Ⅲ　恩智遺跡　（第25次調査）
Ⅳ　亀井遺跡　（第17次調査）
Ⅴ　萱振遺跡　（第30次調査）
Ⅵ　小阪合遺跡　（第45・46次調査）
Ⅶ　成法寺遺跡　（第26次調査）
Ⅷ　高安古墳群　（第７次調査）
Ⅸ　美園遺跡　（第９次調査）
Ⅹ　八尾寺内町　（第６次調査）

発　行　平成26年３月
編　集　公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX（072）994－4700

印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　<260Kg>
本　文　マットコート　< 70Kg>
図　版　マットコート　< 70Kg>